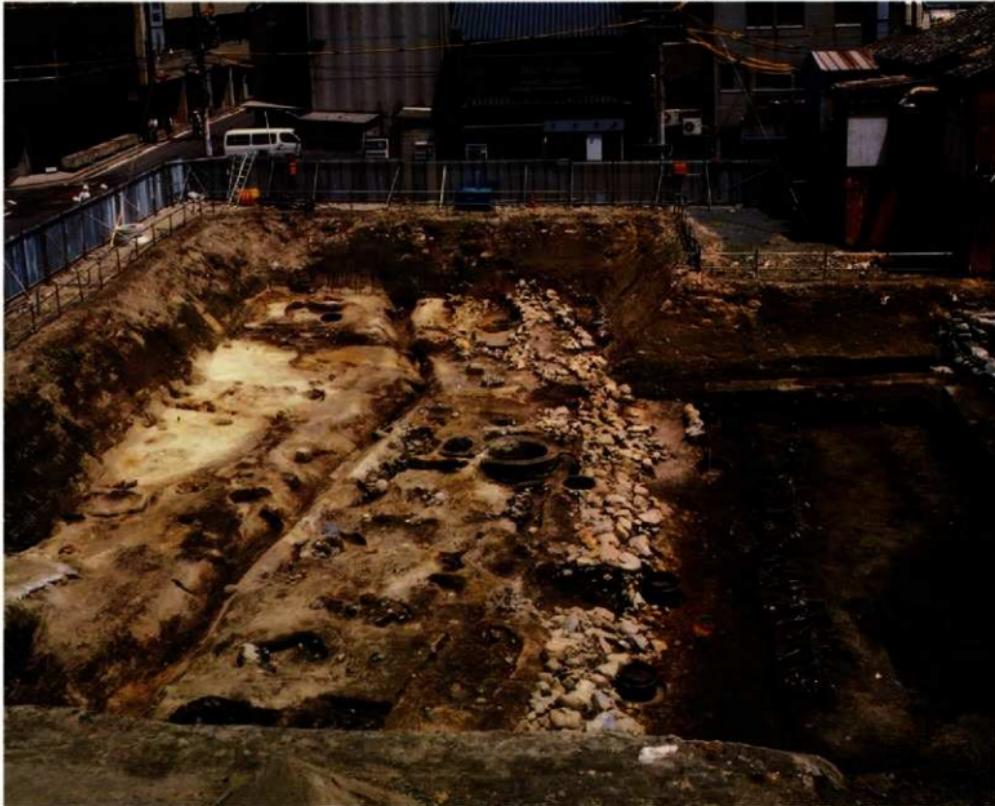


はか
博 多 68

一下川端東地区市街地再開発事業に伴う博多遺跡群第96次調査の概要

福岡市埋蔵文化財発掘調査報告書第605集



1999

福岡市教育委員会

表紙カラー 濡岸跡石組基礎石全景（西より）

はか
た
博 多 68

－下川端東地区市街地再開発事業に伴う博多遺跡群第96次調査の概要－

福岡市埋蔵文化財発掘調査報告書第605集



調査番号 9559

遺跡記号 HKT-96

1999

福岡市教育委員会

序

北部九州は、弥生時代より大陸文化の窓口として栄えたところであり、中世に博多は「貿易都市」として繁栄をきわめたところです。

この博多の街も都市部の再開発が急速に進み、今日までに100地点を越える発掘調査が実施されています。輸入陶磁器をはじめとする多種多様な遺物の発見は、まさに国際貿易都市「博多」の繁栄を彷彿させるものがあります。

下川端東地区の再開発事業とともに実施した博多遺跡群第96次調査では、中世末から江戸時代のさまざまな遺構や遺物を検出しました。殊に、石積みの護岸跡の発見は、16世紀後半の「息の濱」西南域に拡がる内湾の汀線が明らかになりました。また、その前面に連なる杭列と櫛^{しめくわ}跡は、内湾の埋立て工法を明らかにするとともに、その後の「博多」の発展を考える上で貴重な資料となりました。

本書は、これらの発掘調査の成果を収録したものです。本書が市民の皆さんに広く活用されて埋蔵文化財の保護に対するご理解の一助になるとともに、学術研究に活用していただければ幸いです。

なお、発掘調査から調査報告書作成までの間には、下川端東地区再開発組合の方をはじめとして多くの方々のご指導とご協力をいただきました。心から感謝の意を表する次第であります。

平成11年 3月10日

福岡市教育委員会

教育長 町田英俊

.....れいげん.....

1. 本書は、福岡市教育委員会が福岡市博多区下川端東地区における市街地再開発事業に先立って1996(平成8)年2月から5月に緊急調査した博多遺跡群第96大調査の発掘調査報告書である。
2. 本書に使用した方位は、すべて磁北方位である。
3. 道構は呼称を記号化し、建物跡をSB、井戸跡をSE、土塁をSK、溝遺構をSD、ピットをSPとし、その後にすべての道構を番号でナンバーを付した。
4. 本著に掲載した道構の実測は、小林義彦と八丁由登、立石真二があたったが石積段岸跡と博多大水道は厚別エンジニアリング(株)の写真測量によった。また、遺物の実測は、小林、八丁、大嵐あさ、今村ひろ子、鎌ヶ江賢治、平川敷治が作成した。
5. 本書に掲載した遺構と遺物の製図は、小林、今村と藤村佳公恵が分担して作成した。
6. 本書に掲載した道構と遺物の写真は、小林と八丁が撮影した。
7. 本書の執筆、編集は小林が行なった。なお、文末には吉田生物研究所に依頼した道構の複原構造調査結果を掲載した。
8. 本報告に係わる遺物・記録類は一括して埋蔵文化財センターに保管する予定である。

| | | |
|--------------------------|----------------------------|----------------------------|
| 遺跡調査番号：9559 | 遺跡略名：HKT-96 | 分布地図番号：49-0121 |
| 調査地 域：福岡市博多区下川端町 | | |
| 工事面積：5,000m ² | 調査対象面積：2,500m ² | 調査実施面積：1,080m ² |
| 調査期間：1996年2月13日～5月12日 | | |

本文目次

序

| | |
|------------------|----|
| I.はじめに | 1 |
| 1. 発掘調査にいたるまで | 1 |
| 2. 発掘調査の組織 | 3 |
| 3. 立地と歴史的環境 | 3 |
| 4. 地形と地質 | 7 |
| II. 調査の記録 | 9 |
| 1. 発掘調査の方法と経過 | 9 |
| 2. 基本的層序 | 10 |
| 3. 調査の概要 | 11 |
| 4. 第1期の遺構 | 12 |
| 1) . 近世墓 | 13 |
| 2) . 土 壤 | 15 |
| 3) . 井戸跡 | 35 |
| 4) . 溝遺構 | 38 |
| 5. 第2期の遺構 | 46 |
| 1) . 土 壤 | 47 |
| 2) . 墓立地 | 47 |
| 6. 第3期の遺構 | 54 |
| 1) . 建物跡 | 54 |
| 2) . 土 壤 | 56 |
| 3) . 渡岸跡 | 65 |
| 7. 包含層出土の遺物 | 72 |
| III. おわりに | 73 |
| 付 漆製品の塗膜構造分析について | 77 |

挿 図 目 次

| | |
|------------------------------------|----|
| 1. 周辺遺跡分布図(1/50,000)..... | 2 |
| 2. 博多遺跡第96次調査区位置図(1/7,500) | 4 |
| 3. 博多遺跡第96次調査区周辺現況図(1/1,500)..... | 6 |
| 4. 地質柱状模式図..... | 7 |
| 5. 調査区とグリッド位置図(1/500) | 9 |
| 6. 調査区全景(南より) | 10 |
| 7. 第1期の遺構配置図(1/200) | 12 |
| 8. 1号墓全景(南より) | 13 |
| 9. 1号墓火葬骨検出状況(南より)..... | 13 |
| 10. 2・3号墓全景(南より)..... | 13 |
| 11. 近世墓群全景(西より) | 13 |
| 12. 1~3号墓出土遺物実測図(1/4・1/6) | 14 |
| 13. 1~3号墓出土遺物(1/5・1/6) | 14 |
| 14. 18号土壤実測図(1/30)..... | 15 |
| 15. 18~20号土壤全景(西より)..... | 15 |
| 16. 18号土壤全景(東より) | 15 |
| 17. 18号土壤出土遺物実測図 1 (1/3) | 16 |
| 18. 18号土壤出土遺物実測図 2 (1/4)..... | 17 |
| 19. 18号土壤出土遺物(1/3・1/4)..... | 17 |
| 20. 19号土壤実測図(1/30)..... | 18 |
| 21. 19号土壤全景(東より) | 18 |
| 22. 19号土壤出土遺物実測図 1 (1/3・1/6) | 19 |
| 23. 19号土壤出土遺物実測図 2 (1/4)..... | 20 |
| 24. 19号土壤出土遺物(1/3・1/4・1/6)..... | 20 |
| 25. 23・24号土壤全景(南より)..... | 21 |
| 26. 23号土壤出土遺物実測図 (1/3・1/4)..... | 22 |
| 27. 23号土壤出土遺物(1/3・1/4)..... | 23 |
| 28. 24号土壤出土遺物実測図 (1/3・1/4)..... | 23 |
| 29. 24号土壤出土遺物(1/3・1/4) | 24 |
| 30. 26号土壤全景(東より) | 24 |
| 31. 26号土壤出土遺物実測図 (1/3・1/4)..... | 25 |
| 32. 26号土壤出土遺物(1/3・1/4) | 26 |
| 33. 29号土壤実測図(1/30)..... | 26 |
| 34. 29号土壤全景(北より) | 27 |
| 35. 29号土壤出土遺物実測図 (1/4)..... | 27 |
| 36. 29号土壤出土遺物(1/4) | 27 |
| 37. 30号土壤出土遺物実測図 (1/3)..... | 27 |
| 38. 30号土壤出土遺物(1/3) | 27 |
| 39. 調査区中央部の土壤剖(北より) | 28 |
| 40. 41・45・46号土壤出土遺物実測図(1/3) | 29 |
| 41. 41・46号土壤出土遺物(1/3) | 29 |
| 42. 70・73・74号土壤全景(西より) | 30 |
| 43. 93号土壤出土遺物実測図(1/4) | 30 |
| 44. 93号土壤出土遺物(1/4) | 31 |
| 45. 102号土壤遺物出土状況実測図(1/30) | 31 |
| 46. 102号土壤遺物出土状況(西より) | 31 |

| | | | |
|---------------------------------------|----|---------------------------------|----|
| 47. 102号土壙築出土状況(西より) | 32 | 73. 4号溝出土遺物(1/3・1/4) | 42 |
| 48. 102号土塙竹笥出土状況(西より) | 32 | 74. 101号溝実測図(1/100) | 43 |
| 49. 102号土壤金隠し・杓出土状況(西より) | 32 | 75. 101号溝全景(北より) | 44 |
| 50. 102号土壤墨書き板出土状況(南より) | 32 | 76. 101号溝蓋蓋状況(西より) | 44 |
| 51. 102号土塙出土遺物実測図1(1/3) | 32 | 77. 101号溝蓋石除去後(西より) | 44 |
| 52. 102号土壤出土遺物実測図2(1/3・1/4・1/6) | 33 | 78. 101号溝北壁裏込め(北より) | 44 |
| 53. 102号土塙出土遺物(1/3・1/6) | 34 | 79. 101号溝南壁裏込め(南より) | 44 |
| 54. 8~10号井戸跡全景(東より) | 35 | 80. 101号溝屈曲部壁面(西より) | 44 |
| 55. 8・9号井跡全景(北より) | 35 | 81. 101号溝蓋石支脚設(南より) | 44 |
| 56. 10号井戸跡全景(東より) | 35 | 82. 101号溝出土遺物実測図(1/3・1/4) | 45 |
| 57. 11号井戸跡全景(北西より) | 36 | 83. 101号溝出土遺物(1/3・1/4) | 45 |
| 58. 12号井戸跡全景(北より) | 36 | 84. 第2期の遺構配置図(1/200) | 46 |
| 59. 25号井戸跡全景(南より) | 36 | 85. 87号土壤全景(東より) | 47 |
| 60. 27号井戸跡全景(南より) | 36 | 86. 90号土塙全景(南より) | 47 |
| 61. 49号井戸跡実測図(1/40) | 36 | 87. 90号土壤出土遺物実測図(1/4) | 47 |
| 62. 49号井戸跡全景(東より) | 37 | 88. 埋立地杭列実測図(1/80) | 48 |
| 63. 10・21・27・49号井戸跡出土遺物実測図(1/3) | 37 | 89. 埋立地全景(南より) | 49 |
| 64. 10・49号井戸跡出土遺物(1/2・1/3) | 37 | 90. 第1・2杭列全景(東より) | 49 |
| 65. 4号溝全景(東より) | 38 | 91. 第1・2杭列全景(北より) | 49 |
| 66. 4号溝実測図(1/150) | 38 | 92. 第1杭列横(北より) | 49 |
| 67. 4号溝下層イヌの骨出土状況(南より) | 39 | 93. 第2杭列横(北より) | 49 |
| 68. 4号溝下層土鍋出土状況(南より) | 39 | 94. 埋立地出土遺物実測図1(1/3・1/6) | 50 |
| 69. 4号溝下層漆器椀・皿出土状況(北西より) | 39 | 95. 埋立地出土遺物実測図2(1/3) | 51 |
| 70. 4号溝下層漆器椀(南より) | 39 | 96. 埋立地出土遺物(1/2・1/3) | 52 |
| 71. 4号溝出土遺物実測図1(1/3・1/4) | 40 | 97. 第3期の遺構配置図(1/200) | 53 |
| 72. 4号溝出土遺物実測図2(1/3) | 41 | 98. 89号建物跡実測図(1/60) | 54 |

| | | |
|------|------------------------------|----|
| 99. | 89号建物跡全景(南より)..... | 55 |
| 100. | 89号建物跡全景(東より)..... | 55 |
| 101. | 103～105号建物跡実測図(1/60) | 55 |
| 102. | 103～105号建物跡全景(南より)..... | 56 |
| 103. | 14号土壙実測図(1/30)..... | 56 |
| 104. | 14号土壙全景(西より)..... | 56 |
| 105. | 14号土壙出土遺物実測図(1/3)..... | 57 |
| 106. | 15号土壙全景(南より) | 57 |
| 107. | 15号土壙実測図(1/30)..... | 57 |
| 108. | 15号土壙出土遺物実測図(1/3・1/4) | 58 |
| 109. | 16号土壙実測図(1/30)..... | 58 |
| 110. | 16号土壙全景(南より) | 58 |
| 111. | 16号土壙出土遺物実測図(1/3)..... | 59 |
| 112. | 17号土壙実測図(1/30) | 59 |
| 113. | 17号土壙全景(南より) | 59 |
| 114. | 17号土壙出土遺物実測図(1/3)..... | 60 |
| 115. | 20号土壙全景(東より) | 60 |
| 116. | 20号土壙実測図(1/30)..... | 60 |
| 117. | 20号土壙出土遺物実測図(1/3)..... | 60 |
| 118. | 85号土壙出土遺物実測図(1/3)..... | 61 |
| 119. | 88号土壙全景(西より) | 61 |
| 120. | 88号土壙出土遺物実測図(1/3)..... | 62 |
| 121. | 88号土壙出土遺物(1/3)..... | 63 |
| 122. | 98号土壙実測図(1/30)..... | 63 |
| 123. | 98号土壙全景(東より) | 63 |
| 124. | 98号土壙出土遺物実測図(1/3) | 64 |
| 125. | 99号土壙出土遺物実測図(1/3)..... | 65 |
| 126. | 護岸跡全景(北より) | 65 |
| 127. | 護岸跡実測図(1/150)..... | 66 |
| 128. | 護岸跡石組上面全景(西より) | 67 |
| 129. | 護岸跡石組上面全景(南より) | 67 |
| 130. | 護岸跡石組基礎石全景(南より) | 67 |
| 131. | 護岸跡石組基礎石全景(南より) | 67 |
| 132. | 護岸跡石組基礎石全景(南より) | 67 |
| 133. | 護岸跡石組基礎石全景(西より) | 67 |
| 134. | 護岸跡石組断面(東より) | 67 |
| 135. | 護岸跡内浜の杭列(南西より) | 67 |
| 136. | 護岸跡出土遺物実測図(1/3) | 68 |
| 137. | 護岸跡出土遺物(1/4) | 68 |
| 138. | 包含層出土遺物実測図 1 (1/3) | 69 |
| 139. | 包含層出土遺物実測図 2 (1/3・1/4) | 70 |
| 140. | 包含層出土遺物実測図 3 (1/3) | 71 |
| 141. | 銅鏡拓影(2/3) | 72 |
| 142. | 護岸跡推定復原図 | 73 |
| 143. | 陶磁器編年表 1 | 74 |
| 144. | 陶磁器編年表 2 | 75 |

I. はじめに

1. 発掘調査にいたるまで

「博多」は、弥生時代の昔より大陸文化の受入口として長い歴史をもち、中世には泉州堺と並ぶ自由貿易都市として栄えた町である。なかでも「川端地区」は、博多商人発祥の地として江戸時代以降は商業の中心的役割を果たしてきた。しかしながら、近年は天神地区や博多駅地区への商業機能の集積による地域の地盤沈下が進み、かつての賑わいは次第に失われてきた。これに対して、都市部における均衡ある発展をめざして商業核の形成による回遊拠点づくりを行ない、商業振興と博多部全体の活性化を図る再開発事業が提議され、1980(昭和55)年12月には、その実現にむけた再開発組合が地元地権者等によって設立された。その後は幾多の曲折を経て、西地区はホテルやデパートを核とする商業ゾーン(博多リバーレイン)、東地区は歌舞伎やミュージカル等を上演する劇場ゾーン(博多座)として機能的、有機的な再開発事業が決定され、1992(平成4)年8月再開発組合の設立総会を機として具体的に再開発事業が動き出した。

この下川端地区は、広大な博多遺跡群の北西部にあたり、中世から近世の遺跡が重複して拡がっていることが予想された。そのため円滑な事業の推進と文化財の保存を図るために1992(平成4)年10月より幾度となく協議を重ね、再開発地内の遺跡の拡がりや密度を詳細に把握するために試掘調査を実施することとなった。試掘調査は、建物の解体工事に合わせて1994(平成6)年8月より数次に亘って実施し、井戸跡や土壌等を検出したが試掘範囲が狭いために基層面を確認できず詳細は明らかにならなかった。のために建物の解体後に改めて試掘調査を実施して詳細の把握に努めることとなった。

一方、下川端地区の再開発プロジェクトは、地域の浮揚を賭けた長年の宿願であるとともに東地区と西地区の開発計画は一体のものであり、両事業の竣工は1999(平成11)年の春と決定され日程の遅延は容認されなかった。このタイムスケジュールに沿って事業は進行し、西地区(第89次調査)の発掘調査は1996(平成8)年11月には終了しようとしていた。これに対して東地区は、移転交渉が難航しており埋蔵文化財課とも未協議のままであったが、竣工スケジュールは既定通りに進捗しており、発掘調査の終了日程は必然的に設定されていた。このような状況下の1995(平成7)年10月16日に都市未来ふくおかより発掘調査の協議依頼があったが、市試掘は未了のままで詳細なデータはなかった。しかしながら、事業の緊急性から発掘調査の回避は不可能であった。そのために発掘調査範囲を西地区(第89次調査)の調査データから推して右組護岸跡の露がりが予想される事業地の北半部に限定し、更に未解体の街区は除外して条件が整い次第速やかに発掘調査に取りかかることとなった。

発掘調査は、事前協議に基づいて東南角地と西側の未解体の街区を除いた範囲に調査区を便宜的に設定し、1996(平成8)年2月13日より着手した。ところが調査開始早々にいわゆる「博多大水道」が発見され、次いで右組護岸跡の続きが予想通りに検出された。しかし、先人の偉業を偲ばせる「博多大水道」の発見は、奈良屋校区まちづくり協議会をはじめとする地元各位やマスコミの関心を高めた。そのために奈良屋小学校や博多中学校の生徒諸君のほか延べ1,000人に達する見学者があった。検出した右組護岸跡や博多大水道の実測は、写真測量法を採用して期日の短縮を図り、5月12日発掘調査を終了した。写真測量は写潤エンジニアリング(株)に、全景写真の撮影は空中写真企画に委託して実施した。

なお、発掘調査にあたっては、下川端東地区市街地再開発組合の事務局をはじめ都市未来ふくおかの関係者諸氏には多大のご理解とご協力をいただき、また、大林組九州支店の方々には調査中の排土搬出や諸施設の設置にあたって便宜を図っていただいた。ここに心より感謝の意を表します。



2. 発掘調査の組織

| | | | |
|---------|-----------------|----------|--|
| 調査委託 | 下川端東再開発組合 | | |
| 理事長 | 河原由明 | 副理事長 | 右田喜章 |
| 理事 | 新島一弘 | 監事 | 内堀 弘徳 重京 |
| 調査主体 | 福岡市教育委員会 | | |
| 文化財部長 | 平塚克則(現任) | 後藤 直(前任) | |
| 調査統括 | 大規模事業等担当課長 | 山崎純男 | 主査 松村道博(現任) 池崎謙二(前任) |
| 調査庶務 | 谷口真由美(現任) | 河野淳美(前任) | 西田絹花(前任) |
| 調査担当 | 小林義彦 | | |
| 調査員 | 八丁由香(現久山町教育委員会) | 藤村佳公恵 | 立石真二 大歯あづさ |
| 調査・整理作業 | 石橋テル子 | 今村ひろ子 | 今村弘美 内村洋一 梶津良一 大塩皓 岡部静江 大瀬良清子 大瀬良志乃 甲斐正耕 金子由利子 清原ユリ子 楠本純次 黒岩敬太 下司昭枝 小松富美 坂本ハツ子 佐藤テル子 笹部幸子 指山歌子 指山浩子 真田弘二 柴田タツ子 柴田常人 島崎昭二 高橋茂子 辻美佐江 上斐崎孝子 上斐崎新 土斐崎恵美 西尾タツヨ 萩尾寛文 馬場イツ子 馬場賢治 馬場久美子 堀ウメコ 堀川ヒロ子 松井フユ子 松本藤子 三原章司 三栗野明美 三栗野和子 水野山美子 村崎里子 門司弘子 山中千晴 吉川春美 |

なお、発掘調査では佐伯弘次氏(九州大学)、山崎純男氏、池崎謙二氏、陶磁器の整理分類については大橋康二氏(佐賀県教育庁)の的確な指導と助言をたまわった。

3. 立地と歴史的環境

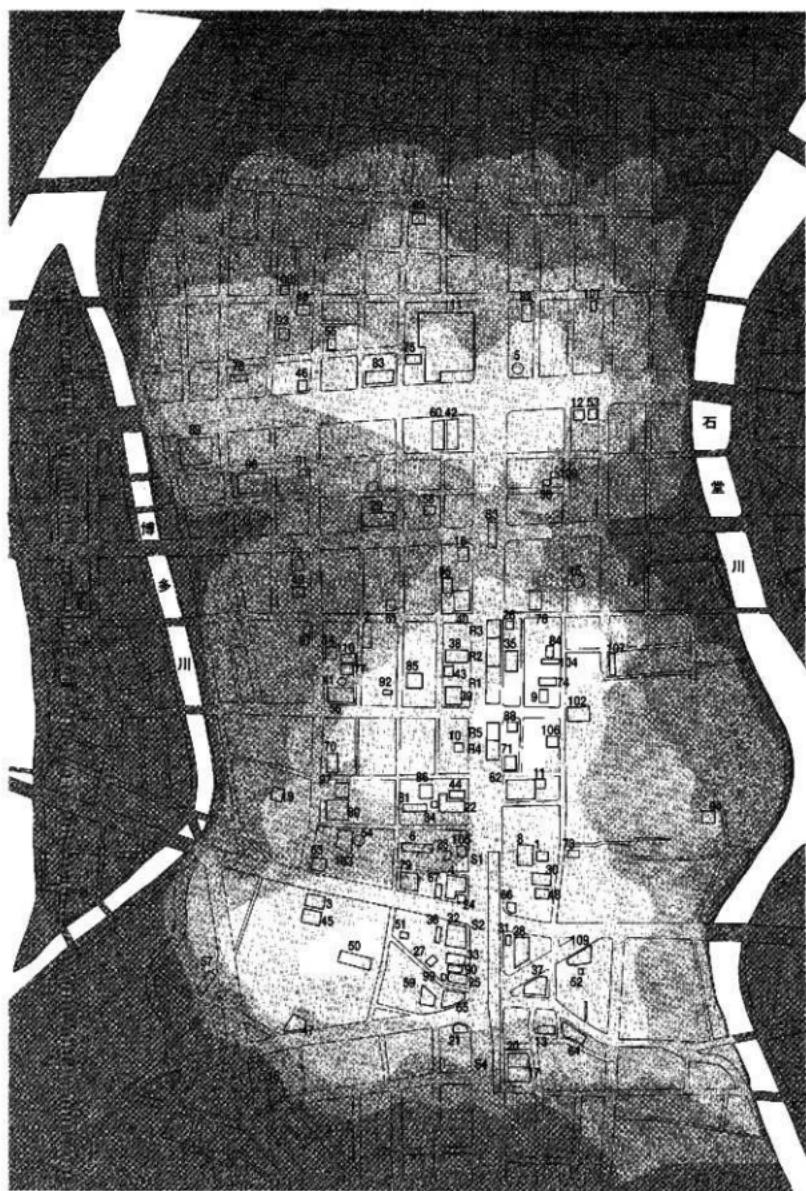
三方を三郡山系と背振山系に囲まれた福岡平野は、北の博多湾にむかって開口し、平野を貫流する三笠川と那珂川の二筋の流れは河口を接して博多湾に注いでいる。博多遺跡群は、この両河川に挟まれた博多湾岸沿いの古砂丘上に立地し、南は旧北惠川によって画される地域である。

博多遺跡群は、弥生時代から古代、中世を経て近世までの二千年の間に連続とつづく大複合遺跡であり、中世には泉州場と並ぶ貿易都市として繁栄を極めたところである。この博多遺跡群の発掘調査は、1977(昭和52)年の高速鉄道祇園町工区の調査に始まり、一連の高速鉄道や都市計画道路博多駅築港線関係の調査など100次を越える発掘調査の結果、次第にその姿は明らかになりつつある。

博多遺跡群を概観すると、その初見は弥生時代中期前半に遡る。祇園町交差点を中心とする古砂丘上には円形の整穴住居跡や斎棺墓群が立地する。ここは「博多濱」のほぼ中央部で、古砂丘の最高所にあたる。弥生時代後期になると、集落城や墳墓群は南の後背地にむかって更に拡がりを見せる。

古墳時代になると、砂丘の前進に伴って北方の上呉服町周辺まで造構は拡がるが、遺跡の中心はまだ「博多濱」の最高所にあり、整穴住居跡や方形周溝墓が調査されている。また、第28次調査区では、墳丘長が56mを越える5世紀初頭の前方後円墳が確認されており、那珂川右岸に展開する前方後円墳群の一翼を担うものと考えられる。

「那の津」官家が設置された536(宣化1)年以降の古代になると、博多遺跡群は对外貿易の拠点としての性格を強め、遺跡は「博多濱」全域に拡がる。688(朱雀3)年に初見する筑紫館や842(承和9)年以降に現われる太宰府鴻臚館は、博多遺跡群から入海ひとつ隔てた西の丘陵上に位置する。博多遺跡群に官衙が置かれた記録はないが、鴻臚館式瓦や老司式瓦、皇朝十二錢、円面鏡、石帶、墨書須恵器、綠釉陶器、灰釉陶器のほかに越州麻糸青磁や長沙窯系陶器等の輸入陶磁器が多く出土し、官衙的色彩の濃



2. 博多道路第 96 次調査区位置図 (1/7,500)

い施設の存在を想起させるとともに貿易都市としての性格を強めていったものと思われる。909(延喜9年)の遣唐使の廃止は私貿易を促すこととなり、古代末から博多は対宋貿易の中心地となる。発掘調査でもっとも多く検出される遺構や遺物は11世紀後半から13世紀前半のものであり、夥しい量の輸入陶磁器が出土するのもこの時期である。また、11世紀後半には「博多濱」北眼の渴が砂州状に埋立てられ、共服町交差点付近で「息の濱」と繋がる。

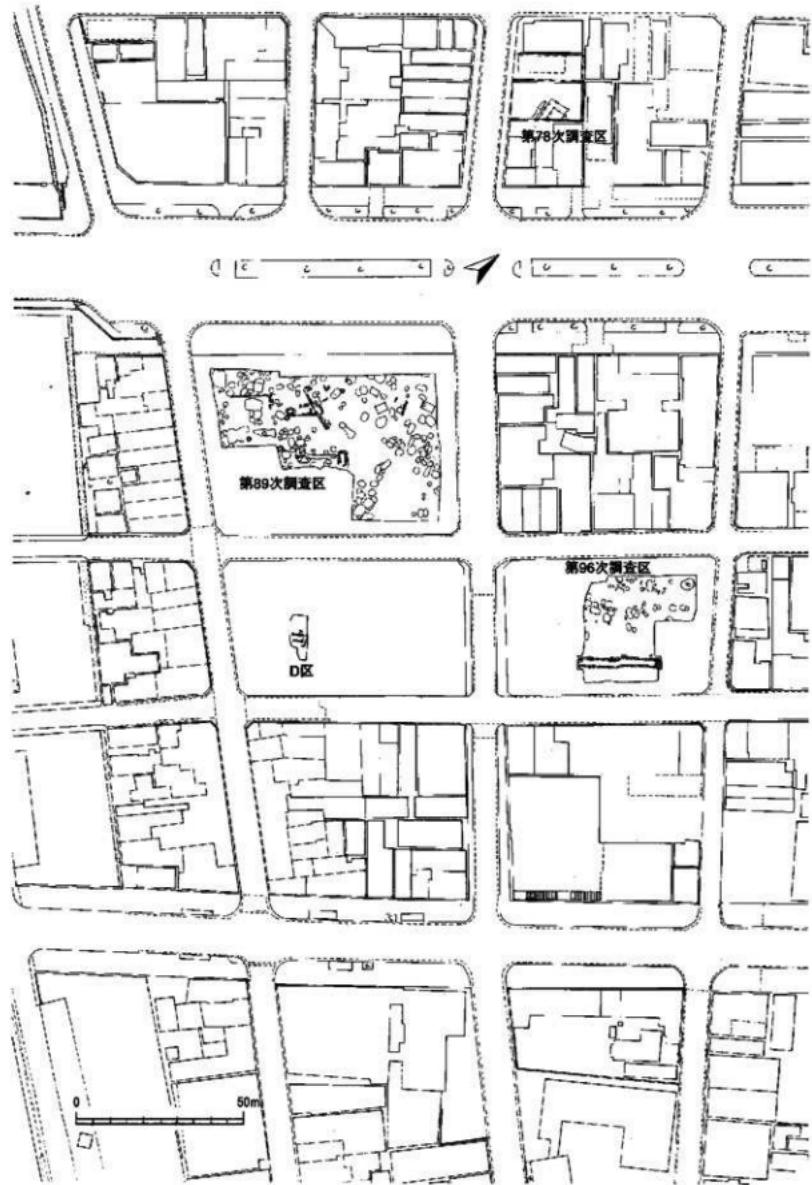
鎌倉時代には、「息の濱」の開発が進み、「博多濱」と一体化して都市「博多」を形成する。13世紀後半から14世紀初めには砂丘上に幾筋もの道路が開削され、室町時代にまで引き継がれるが相互間の規則性や統一性は有していない。しかしながら、これらが中世後半期の博多の町並みの概観を示しているといえよう。一方、「元寇の役」後には鎮西探題府が設置され、対外貿易都市としての機能のみならず西国の政治的中心地としての側面をもつて立る。「息の濱」が初めて文献史上に登場するのも鎌倉時代で、13世紀の「蒙古襲来絵詞」によってである。

室町時代には、「息の濱」の発展が著しく15世紀後半には博多全体の戸数1万戸の六割を占めるまでの都市が成立し、博多の都市機能の中心は内陸側の「博多濱」から湾側の「息の濱」へと移る。「息の濱」の商人たちは、朝鮮半島や中國大陸のみならず、遠く東南アジア地域まで進出していく。ベトナム陶磁器やタイ陶磁器の出土がこれを裏付けている。また、博多にも倭寇の存在が記録されており、海賊である倭寇によって民間貿易が阻られた側面もある。一方、政治的には、足利幕府によって九州探題が置かれたが、南朝方の反幕府勢力が強くその政治力や軍事力は強大なものとは成りえなかった。1333(元弘3)年の鎮西探題襲撃はその象徴で、博多濱は灰燼に帰す。この乱を鎮圧した大友貞宗が、建武政権から「息の濱」を恩賞として与えられ、この時より大友氏の「息の濱」支配が始まる。しかし、「息の濱」の本格的な発展は、九州探題の支配を経て再び大友氏の支配が認められた1429(永享1)年以降である。大友氏は、この「息の濱」を舞台に朝鮮との貿易を積極的に繰り広げて莫大な利益を得た。この時、博多の入港公事権は大内氏がもっていたが、16世紀初頭になるとこの権益は大友氏に移っている。大友氏と筑前守護の大内氏はこの権益を巡って対立し、1532(天文1)年には戦火を交えて大内氏が「息の濱」を奪っている。これは「息の濱」が勘合貿易によって莫大な利益を産み出すところであった故で、幕府権力の衰退とともに貿易利権をめぐる争奪戦が大友氏・大内氏・少弐氏等の間で繰り返されている。そのたびに泉州堺と並ぶ自山都市博多は戦火によって焼失し、ついに1586(天正14)年には、立化城を攻めあぐねた島津氏によって焼き尽くされ、すべてが灰燼に帰している。

その後の1587(天正15)年、博多の街は九州征伐を終えた豊臣秀吉によって復興される。これがいわゆる「太閤町割り」であり、これをもって鎌倉時代より続いた中世の博多の道路や街区は廃される。博多商人神屋宗湛や島井宗室等の建議によるこの太閤町割りは、不規則な道路や街区を統一して博多全体を長方形の街区と幔の寝床と呼ばれる短冊型の地割りに区切るものであり、博多は中世都市から近世都市へと変容を遂げる。

博多はこの太閤町割りで戦国期の荒廃から復興し、さらには朝鮮出兵に際しては兵站基地として活況を呈した。1600(慶長15)年には小早川秀秋によって、また1613(慶長18)年には黒田長政によって入海の埋立てがなされて市域は更に拡張している。しかしながら、1639(明正16)年の鎖国令によって海外への進出を阻まれ、貿易都市としての博多はその終焉を迎える。その後は、黒田氏52万石の城下町「福岡」と商人町「博多」は一体として黒田藩の藩都となり、そのまま明治維新を迎えるに至る。

下川端地区は、この「息の濱」の南西縁に位置し、17世紀初頭に小早川秀秋と黒田長政によって埋立てられた新闢地にあたる。



3. 博多道路第96次調査区周辺現況図 (1/1,500)

4. 地形と地質

福岡平野は、その東側を三郡山系に南側と西側を背振山系に囲まれ、北方は博多湾にむかって開口している。博多遺跡群の第96次調査区は、福岡平野北端の海岸砂丘上に立地する。

福岡平野は、地形的には海岸から山地までの奥行が比較的短く、平野を貫流する河川の川床勾配が急なために扇状地が発達している。一方、地質的には古生代の変成岩類と共に中生代に貫入した花崗岩類を基盤とし、その上層に新生代古第三紀堆積岩が覆っているのが一般的である。博多遺跡群を含む北部では第三紀層が、南部では花崗岩が基盤層となっていることが多い。この基盤層中には北西～南東方向に走る多くの断層が認められ、そのうちの最も大きな断層が「警固断層」で、この断層にむかって第三紀層の表面が大きく落ち込んでいる。高宮一警固一長浜を結ぶ線上には、地形的にも明瞭で断層崖級が発達している。したがって、博多遺跡群の南端部辺り（JR博多駅付近）では比較的浅くから第三紀層が分布するが、西にむかって深くなり、福岡城の東端部辺りでは約50mの深さまで達している。

平野部ではこれらを覆って第四紀層が堆積しているが、概して沖積層は薄く、海成層は東平尾一山王一塙原を結ぶラインより北にしか分布しない。また、この第四紀層は川床勾配が急なことと併せて平野後背部が主に中生代の花崗岩山塊で囲まれていることから、扇状地性の真砂土の二次堆積物によって構成されることが多い。下川端東地区（第96次調査区）の地質は、次のように概観される。

1. 沖積層

地表面から深さ9～10mまでに分布する砂質上層で、横方向の連続性は良い。上質の土体は、暗黄褐色の疊混じりの中～粗砂で、10～20mm程度までの花崗岩礫を多量に混入し、細粒の割合は少ない。また、下層に約2m程度の暗灰色系のシルト質の細砂層を挟んでいるところがある。この間では、細粒分の混入がやや見られる。

一部に貝殻片を含んでいる。

2. 洪積層

深さ10mから35mまでの間に分布する厚い土層である。この土層は、更に深さ12m～13mと23m～24m付近を境として3層に細かく区分される。それらの3層は、「福岡地盤図」の区分による荒江層、博多粘土層および金武砾層のそれぞれに相当する。このうち博多粘土層は、層厚、分布深度ともに不規則で変化が著しい。

1). 荒江層

洪積層の最上部に分布する土層で、層厚は2m～4m程度である。土質は水平方向に連続性を示す暗灰色系の粘土と、その下位に伏在する砂層の2層から

| | 主な土質 | 標測地盤圖 との比較 | 地層名 | 地質時代 |
|-----|-------------------|---------------|----------------------|-------|
| f | 堆積じり～中砂 | 埋土 | 埋土 | 現世 |
| f | 堆積じり～粗砂 シルト質細砂 | 中州層 | 冲積層 | 新世 |
| as | 粘土 | 荒江層 | 洪積層 | 更新世 |
| dAs | 粗砂 | dHs | dHo | 四新世 |
| dHs | 荒江層 | dHs | 博多粘土層 | 博多粘土層 |
| dHo | 堆積じり～粗砂 | dKag | 堆積じり粘土 質粗～中砂 | 金武砾層 |
| dHs | | Ter | 風化砂質頁岩 砂質頁岩 | 第三紀層 |
| | | | 經浜層群 早良層群 福岡層群 | 第三紀 |

4. 地質柱状模式図

成る。粘土の粘着性は強く、一様に腐食物を含んでいる。下位の砂層は、ある所では欠如し、またある所では層厚になり地點によって差異が観られる。上質は、細砂および漂泥じりで、20mm程度までの石英と花崗岩礫を含んでいる。全体的に含水量が多い。

2). 博多粘土層

深さ13m付近より23m付近までの間で、層厚13m程をなして分布している。土質は、粘土と砂が何層も重なる互層をなしている。これらの単層は、横方向の連続性は乏しく、砂層中にも粘土を薄く挟んでいる箇所が観られる。粘土は、暗青灰色系の砂質粘土を主体とし、全体に砂分を含んでいる。粘着性は乏しく、強固な状態を呈するものが多い。層厚は、16m～18mの間が最大で、1.6m～1.7mである。砂層は、淡黄灰色系を基調とし、中～粗砂粒を主体とする。全体に30mm以下の礫が多く混入しており、含水量が多い。

3). 金武疊層

洪積層の最下部に分布する地層で、西区金武の丘陵地に段丘層として露頭している。深さ約23mの地点よりも深層に観られる。色調は、黄褐色～黄緑色、黄青色系を呈している。一様に酸化された形跡を示し、風化が認められる。土質は、漂泥じりの粘土質細砂～中砂より成り、礫の多少や細粒分の差異によって砂疊状や砂質粘土状を示すところも観られる。礫の種類は、花崗岩、頁岩、砂岩などさまざままで、最大50mm程度のものを含んでいる。これらの礫の大部分は、「腐れ礫」で脆く、指先で容易に碎けるものもある。含水量は上層の博多粘土層と比べると少ないが、部分的には多いところも観られる。

3. 第三紀層

第三紀層は、深さ35mよりも深層に分布する堆積岩層である。岩質は、砂質頁岩からなり、炭質物を含んでいる。このうち上層の厚さ1.4mほどは強い風化のために変色しており、土砂状を呈している。下層部も風化は進行しているが、軟岩状で掘進に際しては疊状を呈する。

参考文献

- 「博多遺跡周辺における遺跡形成環境の変化」 碓塙・下山正一・佐野誠二ほか 1991
- 「日本における遺跡形成環境の変化」 横山浩・先史遺跡記念事業
- 「世帯都市道路の調査＝博多」 大庭康時 1992『季刊考古学第39号』 雄山閣
- 「大陸に薦かれた都山博多」 「中世の風景を読む－東シナ海を囲む中世世界」 1995新人物文庫
- 「日本貿易開拓史の研究」 丸井明彦 1966刊行社
- 「鎌倉時代の対外関係と文物の流入」 川添利二 1979『岩波講座日本歴史6中世2』 岩波店
- 「鎌倉中期の対外関係と博多－享天寺の開創と博多御賞賛四明」 1987
- 「鎌倉中期の対外関係と博多」『筑波日本と國際交流』 1968
- 「よみがえる中世（1）東アジアの国际都市博多」 1988平凡社
- 「中世都山博多の発展と衰滅」 佐竹弘次 1987『日本中世史論』 川添利二先史遺跡記念会
- 「中世の博多被風をめぐって」 1993『法哈達第2号』 博多研究会
- 「博多と堺」 展示実録 1992福岡市博物館
- 「法哈達第1号～第4号」 1992～博多研究会
- 「中世定向の都市研究」 宮本理明 1989『日本都市史入门－空間』 東京大学出版会
- 「川篠地下駐車場上質調査報告書」 1992福岡市都市整備局交通計画課

II. 調査の記録

1. 発掘調査の方法と経過

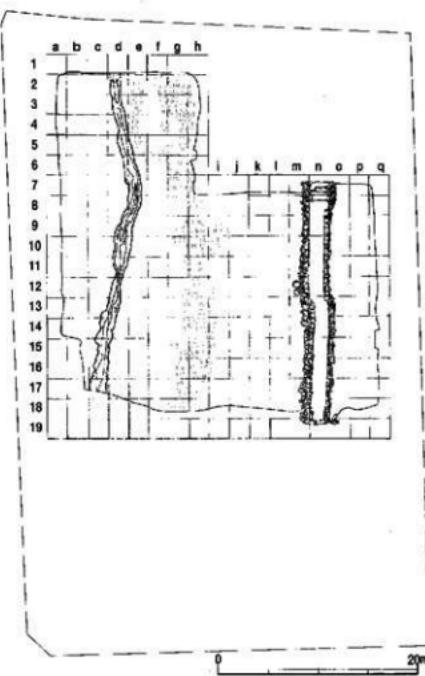
博多遺跡群は、弥生時代から近世までの複合遺跡である。そのため調査地点によっては若干の相違はあるものの基盤層となる黄白色砂層までの間には、1~5mにも及ぶ遺物包含層が堆積しているのが通有である。この遺物包含層には、幾層もの遺構面が重層的にあるが堆積土壌の変化は少ない。そのために部分的には整地層が確認されても面的な拡がりとして捉えがたいのが一般的である。第96次調査区もその例に漏れない。試掘調査の所見では、地表下約2mで中世から近世と思われるピット等の遺構が検出されている。しかし、狭いスペースでの試掘であったために砂丘の基盤層は未確認で、詳細は明らかでなく遺構面が重層している可能性も指摘されていた。また、第89次調査の成果から16世紀の石組護岸跡や博多人水道の石造構築物が続いているものと予想された。

発掘調査は、表土層をパワーショベルで除去することから開始した。その結果、調査区の北側は戦災復興時の搅乱層が予想よりも深くまで達していた。厚さ2~2.5mの表土層下には、中世末から江戸時代中期の遺構が混在しており、調査区の中央部には石組護岸跡の石材も露出していた。また、調査区の南側には東西に延びる「博多大水道」の石組みが、更に浅いレベルで検出された。このために調査区の南半部は、護岸跡と博多大水道の確認に止め、遺構の重複す

る北半部の調査に専念した。しかし、結果としては遺構面の確認も一面的なものとなり、出土遺物や遺構の切り合いによって遺構面の判断をした。

発掘調査では、重複する遺構の検出に時間を要した。建物跡の基礎石列や護岸跡の石造構築物は、構造が把握し易い利便性を備えている。反面、その検出に多くの時間と労力を要し、調査の進捗に支障を来す原因となった。そのためには遺構や遺物の検出に疎漏が生じ、生活面のダメ押しや護岸構築以前の砂丘縁辺の構造確認は割愛せざるを得なかった。

なお、調査座標は、調査区の長軸線に沿って任意に設定し、後に博多地区遺跡基準点と整合した。また、調査時は便宜的に昭和通り側を北、明治通り側を南と仮称して写真撮影をしており、本文中もこの方位を使用している。



5. 調査区とグリッド位置図 (1/500)

2. 基本的層序

博多遺跡群は、砂丘上に立地した遺跡であり、黄白色の風成砂層をその基盤層としている。この黄白色砂層上に焼層もの人工層(遺物包含層)が堆積し、その中に弥生時代から近世までの各時代の生活面が掘り込まれている。

第96次調査区は、博多遺跡群を形成する二つの古砂丘のうち、海側にある「息の濱」南西縁の入海に面した汀線上に位置している。そのために全体に北から南へ緩やかに傾斜し、南側ほど遺物包含層が厚く堆積していた。調査区周辺は、1945(昭和20)年の大空襲で大半の建物が焼失し、復興時はこの焼失家屋の瓦礫材を厚く盛って整地している。この整地層の厚さは、北側が2m~2.5m、南側が0.7m~1mほどあり南北間に段差がある。

この整地層下は、灰茶褐色～黒茶褐色土を基調とする江戸時代中期以降の遺構面になるが、その下層は調査区中央の石組護岸跡を境として南北で大きく異なる。つまり、護岸跡の南側は、入海を埋立てた土層のために灰黒褐色～黒褐色の粘砂土やシルト質土が北から南へ流れ込むように互層をなして堆積している。更に、その下層にはヘドロ状の黒褐色粘質土が砂層を内包しながら厚く堆積している。



6. 調査区全景（南より）

これに対して、護岸跡の北側には暗茶～灰茶褐色土を基調とする中世末から江戸時代前期の整地層が黄白色の風成砂層上に堆積している。しかし、この整地層はきわめて薄く、北端部ではほとんどなく、擾乱層下はほどなく黄白色の風成砂層に達している。ただし、この黄白色砂層が砂丘の基盤層となるものではなく、砂層下の1m～2mほどの間には砂層や粘土層が互層をなして二次的に堆積していた。また、この層中には、角材や円礫で留めた厚板材が護岸跡に並列してあった。石組護岸跡の内陸側に点在している角杭列跡と共に、右組護岸跡築造以前の浜留め跡として拡大する「息の濱」の証左となろう。

3. 調査の概要

第96次調査区は、博多遺跡群を形成する二つの古砂丘のうち海側の「息の濱」南西縁にあたり、入海に面した砂丘面が南にむかって傾斜をはじめる縁辺に立地している。そのために遺物包含層は、北側が薄く、南側には厚く堆積しているものと想定されていた。しかしながら、戦災復興時の瓦礫整地層が予想以上に深くまで達していた。そのために重層的な遺構面の確認はできず、一面的な遺構の検出に終始した。

発掘調査は、西側と東南隅の家屋解体が未了であったために、これを除いた「L」字状に調査区を設定して南側から表土層の掻き取り作業を開始した。すると、調査区の南縁から約8mのところで、柱状に加工された花崗岩がアーケード街に沿うように並んで検出された。これが明治時代初期に覆蓋された「博多大水道」であった。そこで18世紀代の遺構検出のために、表土層はこの覆蓋のレヴェルに合わせて除去することとした。ところが調査区の北東端では、表十層の直下で拳大～人頭大の円礫群を検出した。当初は瓦礫層の一部と考えたが、円礫中に土師皿や陶磁器片が混入していることから石組護岸跡と判断した。この礫群より北側は、薄く堆積した暗茶褐色土層を挟んで黄白色砂層に至り、この黄白色砂層上から土壤や溝等の遺構が掘り込まれていた。

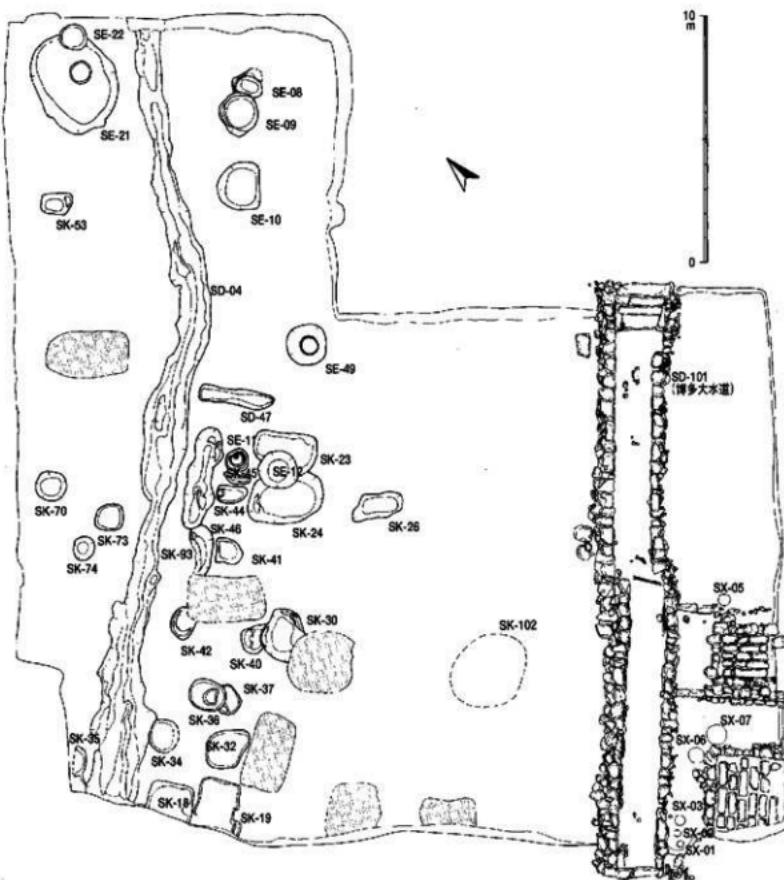
これを俯瞰的に見ると、調査区の中央部に円礫や角礫で築かれた石組護岸跡が東西に長く続いている。その西端は弧状に延びて第89次調査区の石組護岸跡へと繋がっている。この護岸跡を境として北側は土壙や井戸跡、溝等が切り合うように掘がっている。これに対して南側は、護岸跡上に掘り込まれた井戸跡や土壙のほかには、いわゆる「博多大水道」があるだけで遺構は疎らである。これは小早川氏の入府以前が入海で、江戸時代初めに埋立てられたことに起因するものである。つまり、埋立土と遺構の覆土の区別がつかず、瓦や石材等の構築物やまとまった遺物が出土しないかぎり土質や色調だけでは判別できなかったからである。そのためには護岸跡から南側は、遺構が非常に少ない。また、「博多大水道」の南は称名寺等の寺院があったとされ、墓地跡も検出されている。石組護岸跡は、基底面に30cm～50cm大の角礫を敷き並べ、その上面にやや小振りの角礫を浜の傾斜に沿って丁寧に積上げる構造をとっている。西隣の第89次調査区のそれよりも遺存状況は良好であった。この護岸跡の前面には、竹材や角材を打込んだ杭列が4m～6mの間隔をおいて並列し、杭間に竹材や枝材を横木とした欄が幅まれていた。文献の史実を裏付けるとともに、その具体的施工法を示すものである。

これらの遺構は、それぞれに時間差があり、基本的には異なる整地面から掘込まれているはずである。しかしながら、現実にはほとんどが一面的に検出され、層位的な把握はできなかった。そのためには報告にあたっては、遺構の主格をなす石組護岸跡の機能喪失と博多大水道の構築を転換期として前後に大きく三区分して考えた。ただし、これは飽くまでも大勢であり、出土した陶磁器類の細かな検討によって更に、幾期かに細区分されるものである。なお、検出した遺構は、呼称をその機能ごとに区分して記号化し、本文中では、遺構名と遺構記号を併記して使用している。

4. 第1期の遺構

第1期としたこの時期は、調布区の南端部を東西に延びる「博多大水道」の築造以降の時代である。埋立地の利水のために築かれたとされる「博多大水道」の築造時期には諸説があるが、概ね18世紀初頭とされている。このことから第1期は、18世紀初め～19世紀中頃までの江戸時代後半の時期である。この長い時代を細かく観れば、18世紀代の遺構も前半から中頃、あるいは後半のものまである。同様にして19世紀代の遺構も、前半の化政期や中葉の幕末期のものがあり、時期を細かく区分することは可能である。しかしながら、年代の細分化によって街並を有機的に復原することはできなかつたために、ここでは敢えて大きく取りまとめた。

検出した遺構は、井戸跡や土壙、溝、墓等がある。これらの遺構は、全域にわたって密に分布して



7. 第1期の遺構配置図 (1/200)

いるが、埋立地上は一つ二つを除いては遺構は確認できていない。そのため状況的には、調査区の中央部が遺構の空白域になっているが、本来的には町屋等の何らかの遺構があったものと想起される。これを記録類と合わせると、街並は「博多大水道」を境として南北で大きく異なっている。大まかには「博多大水道」の北側の麁屋町～掛町筋には薬種屋や足袋屋、櫛屋等の小商人街があり、南側の櫛挽町筋は称名寺や宗祇寺等の寺院街が並がっていたようである。

1). 近世墓

近世墓は、調査区の博多大水道(S D-101)の南側の一隅にまとまって分布し、6基が検出された。このうち1基は、瓦質の植木鉢を転用したものであり、5基は中～大型の陶器壺を棺材としたものであった。この地は、古図や記録に記された「称名寺」の境内にあたる。称名寺は、金波山と号し、後醍醐帝元応年間の開基で、塔頭六坊の名刹であった。しかし、天正年間の兵火で焼失したが、土居町より移って柳屋九右衛門によって再興されている。

1号墓 (8・9・12・13)

近世墓の中で最西端に位置し、すぐ北には博多大水道が流れている。壺本体には瓦質の植木鉢を転用し、小さな陶器の摺鉢を落とし蓋状に挿入している。棺内には火葬骨片が納められていた。

1は、口径15.2cm、器高4.3cmの鉄輪の軒摺鉢である。摺目は8～9本を一単位とする。2は、三脚の瓦質植木鉢で、口径22.6cm、器高は17.8cm。ロクロ成形で、底部に円孔を穿つ。19世紀代。

2号墓 (10・12・13)

3号墓のすぐ南にある。中型の陶器壺を棺材とし、木蓋を被せている。副葬品はない。



8. 1号墓全景 (南より)



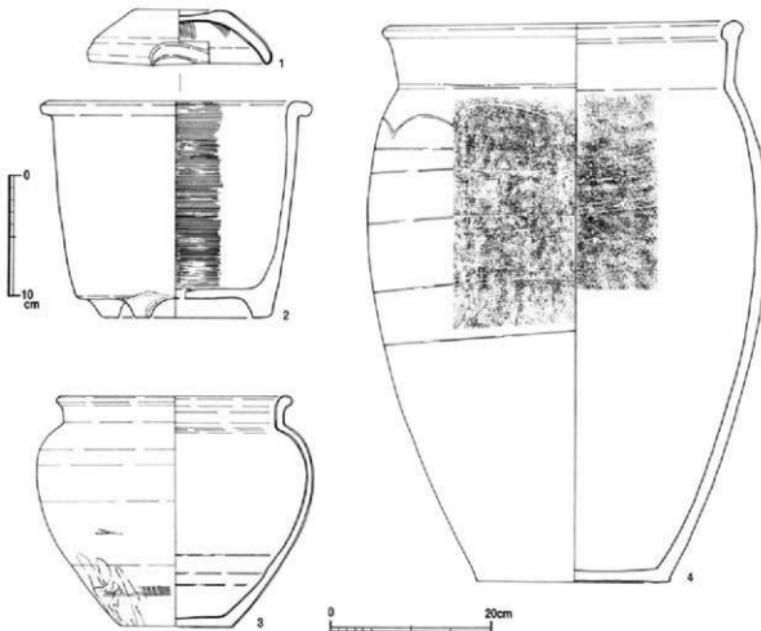
9. 1号墓火葬骨検出状況 (南より)



10. 2・3号墓全景 (南より)



11. 近世墓群全景 (西より)



12. 1~3 号墓出土 遗物 実測図 (1/4・1/6)



13. 1~3 号墓出土 遺物 (1/5・1/6)

3は、19世紀前葉の櫛前陶器甕で、口径は29cm、底径14cm、器高は28.5cm。頭部は短く直口し口唇部は小さく張り出す。底部を除いて鉄軸を掛け、体部には格子目叩き痕がある。6ヶ所に胎土目痕がみられる。

3号墓（10・12・13）

2号墓の東にある木蓋の成人墓で、棺内からは大腿骨や胸骨片が出土している。銅鏡等の副葬品はない。

4は、口径44cm、器高69.3cmの鉄軸の肥前陶器甕である。胴部上半には5条の凹線が巡り、肩部には弧状の山形文が描かれている。口頭部がヨコナデのほかは格子目叩き整形。

2). 土 壤

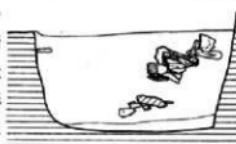
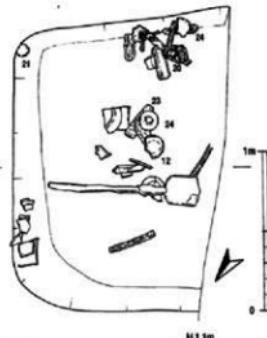
第1期の土壤は、23基を検出したが、時期の明らかでないものを含めると多くの要素もある。平面的には、円形～椭円形プランのものが多く、方形プランのものは少ない。構造的にはすべてが素握りで、その深さには深浅があり、断面形も逆台形や舟底形など多様である。一方、分布的には全域に拡がっているが、巨視的には4(SD-04)号溝の南岸の西半部にまとまる傾向がある。

18号土壤（14～16）

18号土壤は、調査区西端に位置する大型の土壤である。すぐ北には東西に流れる4号溝があり、南には19号土壤が並んで隣接している。平面形は、西側半分が調査区外に拡がるが、短辺が180cmで、長辺が250cmほどの隅丸長方形プランをなす。壁面は、ほぼ垂直に立ち上がり、壙底までの深さは62cmを測る。床面は平坦で、断面形は逆台形をなす。土壤内からは、伊万里焼の陶磁器と唐津焼の色絵鉢がまとめて出土している。また、壙底近くからは柄の装着されたままの鎌が出土している。時期的には、唐津の色絵などから18世紀前半代と考えられる。

出土遺物（17～19）

5・6は、貝文様に型押し成形した白磁の紅皿である。5は口径4.4cm、器高1.5cmで、菊文がある。7は、口径4.8cm、器高は1.6cm。口縁部と高台は無釉。いずれも18世紀代。6は、肥前磁器の蓋物のミニ碗。口径は4.4cm、器高は1.7cmで、底部と口縁内縁は無釉。18世紀代。



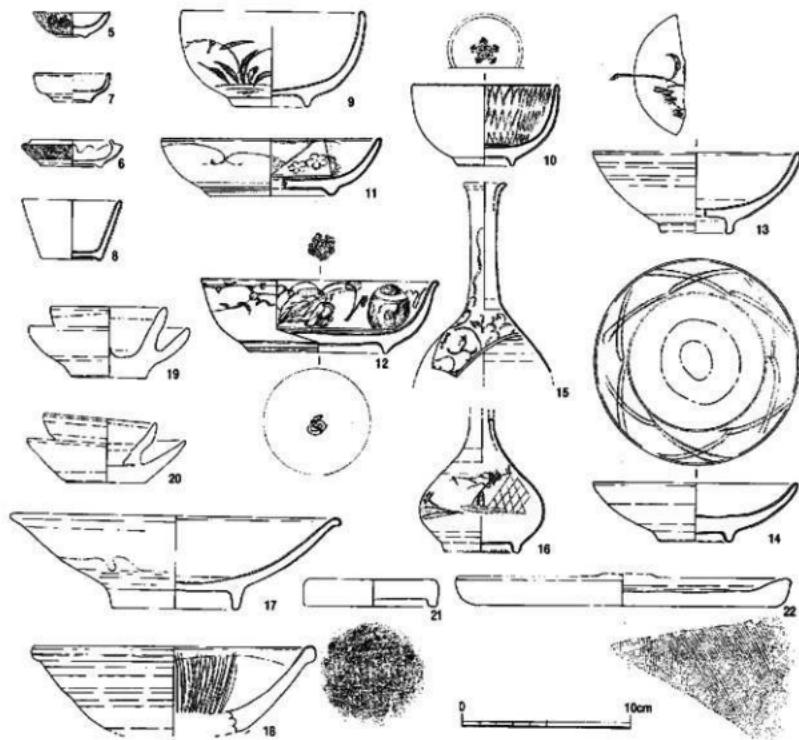
14. 18号土壤実測図 (1/30)



15. 18~20号土壤全景 (西より)



16. 18号土壤全景 (東より)



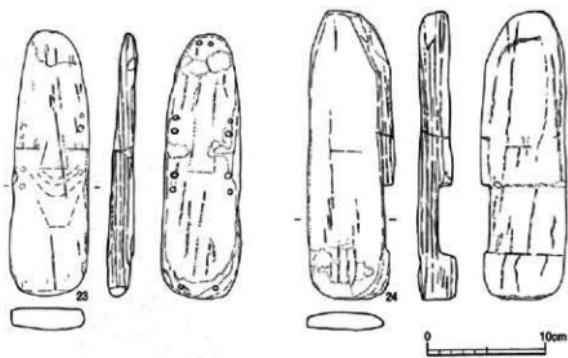
17. 18号土壌出土遺物実測図 1 (1/3)

8は、肥前窯の白磁小皿で、口径は5.8cm、器高は3.5cm。9は、久留米朝妻窯の染付磁器碗で、口径は11cm。胴部には草花文、高台内には「寿」銘を描いている。白化粧土上に釉薬を堆に掛けている。18世紀前半代の作。10は、18世紀前半の肥前窯青磁染付碗で、口径は8.6cm、器高は4.9cm。胴内面には重網日文を、見込には五弁花のコンニャク印判を施している。口銘で、釉薬は掛分けている。11は、肥前器の染付小皿で、口径は13cm。見込には五弁花のコンニャク印判が押され、胴部には花と肩文を描いている。18世紀前半～中葉の作。12は、18世紀前半の波佐見窯の染付宝珠文輪花皿。見込には五弁花のコンニャク印判を押している。高台内には園線と草書体の「福」銘がある。13は、京焼風の肥前陶器皿で、口径は12cm。見込に山水文を描いている。明るい鉄釉で、腰部～高台は無釉。18世紀前半頃のもの。14は、波佐見窯の染付磁器皿で、口径は12.2cm。内面には格子文を描き、見込には蛇の目状の釉薬ぎ痕がある。疊付は無釉で、砂目が付着している。18世紀後半のもの。15は、18世紀前半～中葉の肥前の染付瓶である。外面には蛸唐草文を描いている。16は、17世紀後半～18世紀前半の肥前染付瓶で、山水文を描いている。疊付は釉剥ぎで、砂目が付着している。17は、18世紀代の肥前陶器の鉢で、口径は19.6cm、器高は5.5cm。濃い鶯色の釉薬を掛け、見込は蛇の目状に釉薬を剥いでいる。

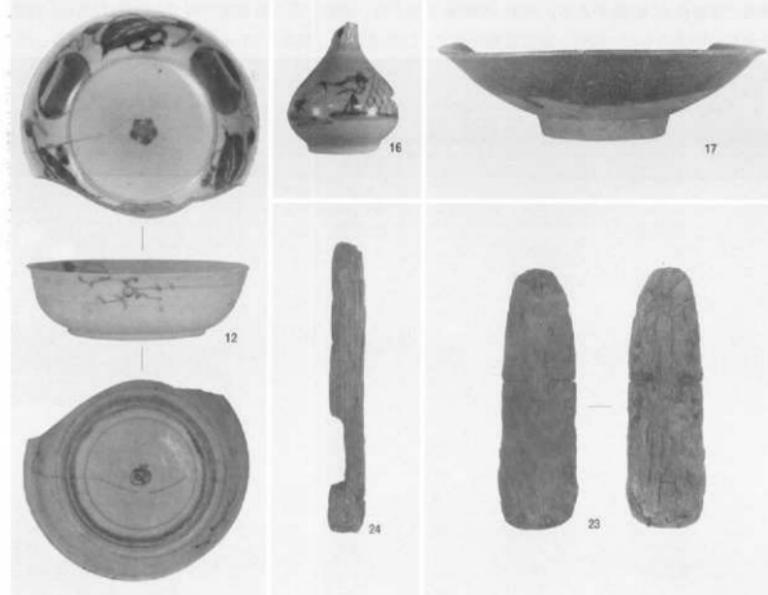
る。18は、肥前の陶器
摺鉢で、口径16.4cm。
口縁部のみに鉄軸を施
釉している。17世紀後
半のもの。19は、肥前
陶器の灯明皿である。
口縁部は灰釉を掛け、
見込には突起がある。
20は、在地系の陶器灯
明皿である。いずれも
糸切り底で、18世紀後
半～19世紀のものであ
らう。21は、関西系
の焼塙壺の蓋で、口径
は7.8cm。18世紀の作。

22は、口径が20cmの灰器の蓋である。

23・24は、下駄である。23は、長さ22cm、幅6.5cm、厚さは2.2cm。2枚の板目板を密に繋ぎ、12個の
目釘が通っている。24は、長さ24cm、幅7.3cm、厚さが3.3cmの未製品である。踵部には長さ6cmの割
り込みがある。



18. 18号土墳出土遺物実測図(1/4)



19. 18号土墳出土遺物(1/3・1/4)

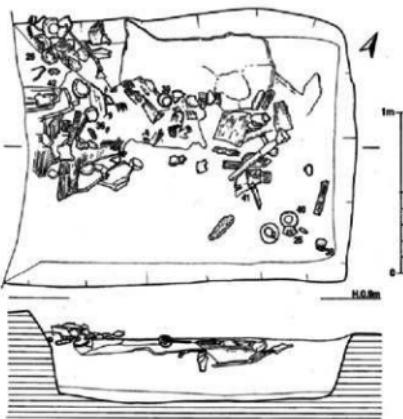
19号土壙 (20・21)

19号土壙は、調査区西端の中央部に位置する土壙で、北壁は18号土壙の南壁に削平されている。平面プランは、短辺が147cmで、長辺は240cm以上の長方形になろう。主軸方位をN-62°-Eにとる。壁面は急峻に立上がり、壙底までの深さは42cmを測る。床面は平坦で、断面形は逆台形をなす。土壙の上層からは、肥前陶磁器や漆器類がまとめて出土している。

出土遺物 (22~24)

25は、口径は7.2cmで、器高が3cmの在地系の陶器小壺である。口縁部と内面には黄土色の釉薬が掛けられている。26は、陶器碗で、小石原窯の産か。口径は10.4cm、器高は5.6cm。黒い釉に白っぽい灰釉が上掛けされている。

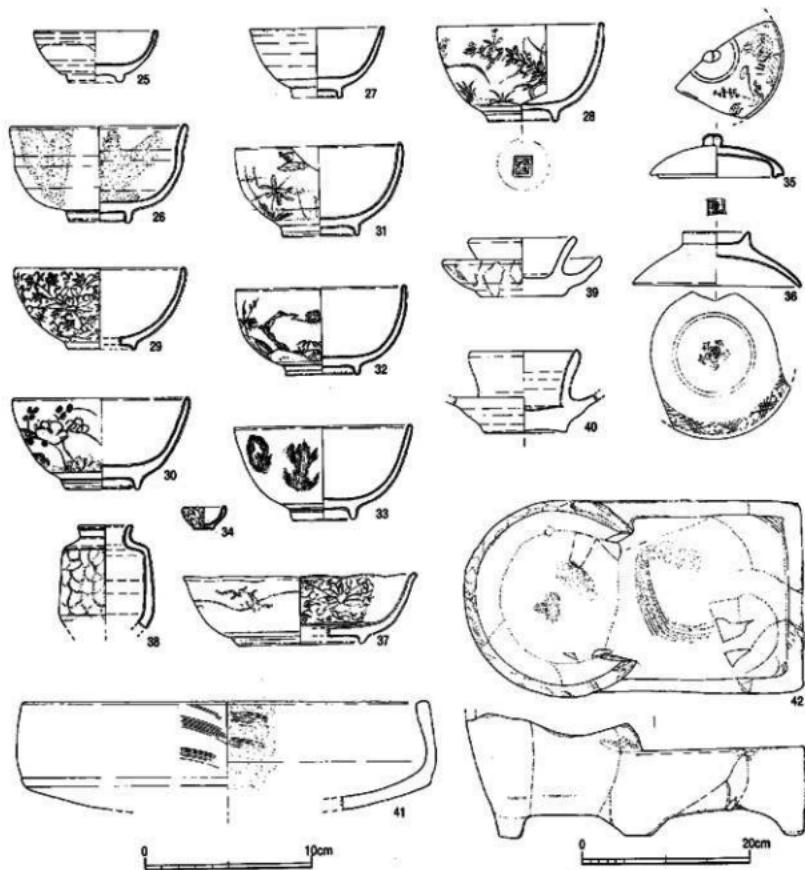
27は、高台内には砂目が付着している。17世紀末~18世紀代。27~33は、肥前の染付碗である。27は小型の碗で、口径は7.8cm、器高は3cm。口縁部下に雨降り文を施している。高台内には砂目が付着している。18世紀前半のもの。28は、口径が9.8cm。外面には草花文を描き、高台内には二重の方形枠内に草書体の「福」銘がある。1690~18世紀初頭の作。29は、牡丹唐草文の碗で、口径は10cm。18世紀前半~中葉のもの。30は、波佐見窯の碗で、口径10.4cm、器高は5.4cm。外面に梅樹文を描き、高



20. 19号土壙実測図 (1/30)



21. 19号土壙全景 (東より)

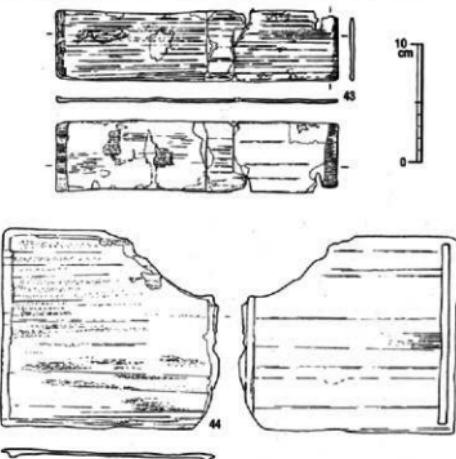


22, 19号土壌出土遺物実測図 1 (1/3-1/6)

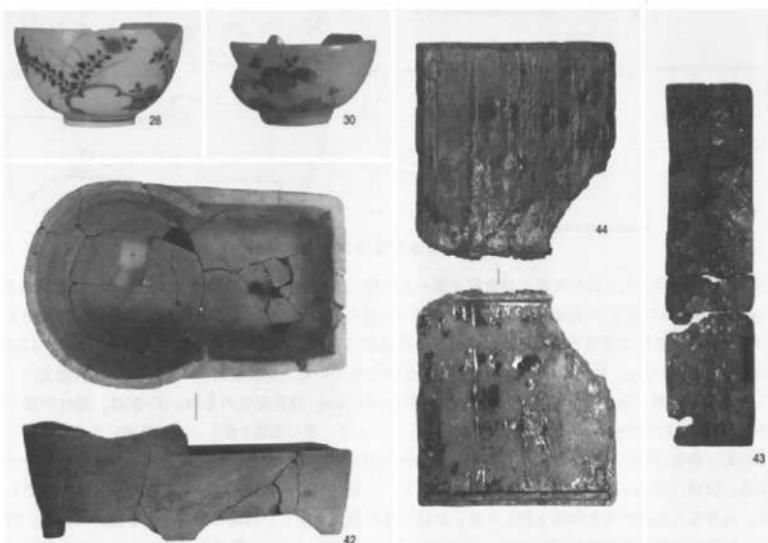
台内には「大明年製」の銘がある。18世紀中葉～末の作。31は、筒江窯の産で、口径9.8cm、器高は5.3cm。高台内には「筒江」の銘がある。18世紀前半～中葉のもの。32は、口径10cm、器高5.1cmの梅樹文の碗である。縁付は釉剥ぎで、見込には小さな異物が付着している。18世紀前半～中葉。33は、口径10.4cm、器高5.5cm。見込にはコンニャク印判が押されている。18世紀前半の作。34は、氷裂文のミニチュア磁器碗。縁付は無釉で、口径2.6cm、器高は1.3cm。18世紀代のもの。35・36は、染付の蓋である。35は、口径が8cm、器高は2.5cm。摘みを中心にして二重の圓線を配し、その外側に草花文を描いている。身受け部には砂目が付着している。18世紀前半～中葉。36は、18世紀後半の筒江窯産の蓋である。口径は10cm、器高は3.2cm。外面は青磁で、二重方形枠内に「筒江」銘のある摘み内は白磁である。五弁花のコンニャク印判を押した見込には二重の圓線を配し、外縁には格子文を描いている。37は、18世紀前半の肥前染付磁器皿で、口径は13.6cm、器高は4.1cm。見込にはコンニャク印判と牡丹

唐草文を施文している。胴部には唐草文を描き、口縁部は輪花形をしている。38は、陶器の茶入れ壺で、口径3.2cm。茶色釉の上に黒い釉斑が付着している。17~18世紀のもので、在地の所産か。39~40は、糸切り底の陶器の灯明皿。39は器高3.4cm。鉄釉が雜に施釉されている。40は、器高4.8cm。受部の外面は無釉で、油煙が付着している。17世紀末~18世紀のもの。いずれも肥前か在地のものである。41は、口径24cmの土師質の盤で、煤が付着している。胎土は粗く、長石や砂粒を多く含む。42は、長さ40.1cm、幅22.8cm、脚高が2.5cmの拂帶竈。

43は、漆塗りの箱物であろう。内面は黒漆、外面は赤漆を塗り分けている。長さは23.4cm、厚さは2mm。44は、長さが18.2cm、幅が16.5cm、厚さが約4mmの漆塗りの箱物の蓋である。外面には赤漆を、内面には黒漆を塗っている。内面の両縁には、幅4mm、高さ3mmの身受けが付く。



23. 19号土壤出土遺物実測図 2 (1/4)



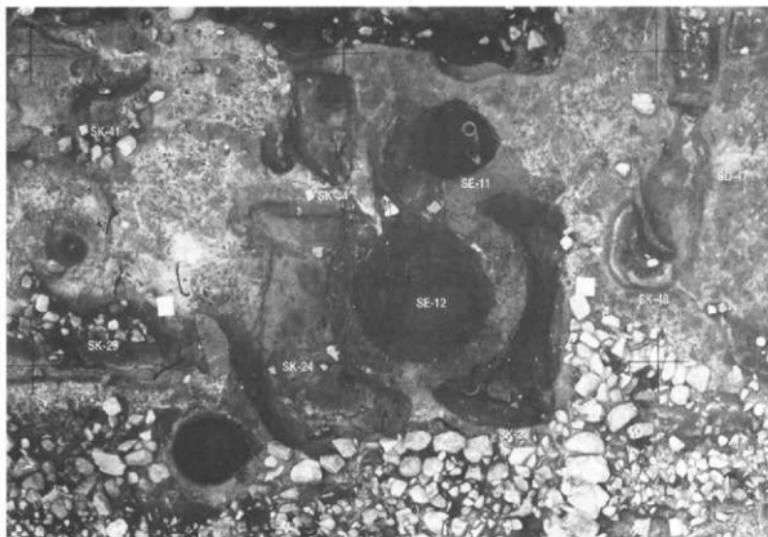
24. 19号土壤出土遺物 (1/3・1/4・1/6)

23号土壙 (25)

23号土壙は、調査区の中央部に位置する大型の土壙で、24号土壙よりも新しく、12号井戸跡よりも古い。平面形は、長軸が247cmで、短軸は150cmほどになる片壁の張り出した長方形プランを呈する。壁面はやや急峻に立上がり、壙底までの深さは40cmを測る。床面は、中央部が凹レンズ状に凹んだ舟底状の断面形をなす。覆土は、濃灰褐色土～灰茶褐色土が層状に堆積していた。遺物は、石鍋や摺鉢のほかに陶磁器類が出土している。

出土遺物 (26・27)

45・46は、貝文を模した型押し成形の肥前白磁の紅皿。45は、口径2.6cm、器高は1.3cm。46は、口径4.4cm、器高1.9cm。胴部下半～高台は無釉。17世紀末～18世紀。47は、肥前染付の磁器小碗で、口径は8.3cm、器高は4.2cm。疊付は無釉で、外面には蘭文を描いている。18世紀中葉～末の作。48は、陶器碗。口径9cm、器高は5.4cm。胴部には指痕による凹みを施している。釉薬は、濃茶の鉄釉の上に灰釉を流し掛けしている。18世紀の作で、小石原窯のものか。49は、関西系の陶器碗で、口径9.4cm、器高は5.7cm。高台内面は無釉。18世紀中葉～末。50は、肥前磁器のそば猪口で、口径は8cm、器高は5.6cm。胴部には枝折文を、高台内には渦福文を描いている。疊付は無釉。18世紀前半。51は、筒型をした染付の磁器湯呑碗で、口径は9.6cm、器高は6.5cm。見込には輪花文を描き、高台内には筒江窯を表す二重方形枠に「筒江」の銘がある。疊付は無釉で、砂目が付着している。18世紀中葉～後半の作。52・53は、染付の磁器皿。52は、口径18cm、器高は6.3cm。見込には、コンニャク印判文と葡萄文を、外面に唐草文を描いている。高台内には「渦福」銘がある。波佐見窯のもので、18世紀後半。53は、芙蓉手輪花文の染付大皿。口径22.8cm、器高は3cm。胴部に唐草文を描き、高台内に「富貴長春」銘がある。疊付は無釉で、4ヶ所にハリ支え痕がある。18世紀中葉の有田窯の産54は、具須手の陶器皿。見込には、山水文を描く。疊付は釉刺ぎ。口径13.4cm、器高は4.3cm。17世紀後半～18世紀初。



25. 23・24号土壙全景 (南より)



26. 23号土塚出土遺物実測図(1/3・1/4)

55-56は、蓋物の磁器蓋である。55は、有田窯の染付蓋で、口径は9.2cm、器高は2.6cm。外面には、市松文と松葉文を描いている。1690~1710年代。56は、色絵生地の蓋で、色絵を省いて染付として製品化している。口径は8.8cm、器高は2.6cm。18世紀前半~中葉のもの。57は、肥前染付の斐付油壺である。胴部には草花文を描いている。斐付は無釉。口径は3.2cm、器高は8.9cm。17世紀末~18世紀前半の作。58は、肥前磁器の染付油瓶で、口径は2cm。肩部には絞唐草文を描いている。胴部内面は無釉である。18世紀後半のものである。59は、陶器の片口の摺鉢で、口径は31.4cm、底径は11.4cm、器高は12.3cmを測る。内面には全体に指目を施し、外底面を除いた全面に鉄釉を掛けている。17世紀末~18世紀のもの。

24号土壙 (25)

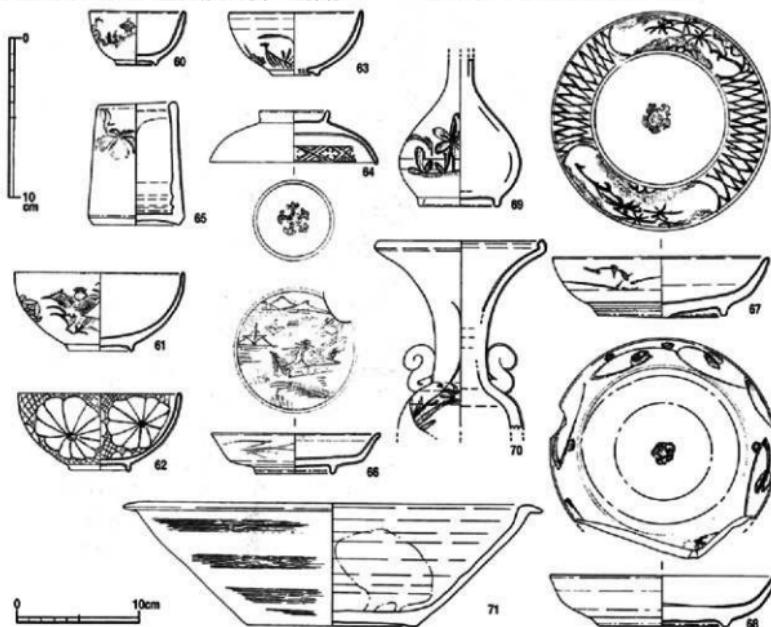
24号土壙は、調査区の中央部に位置する大型の土壙で、重複する12号井戸跡や23号土壙中でもっとも古い。平面形は、長軸が305cmで、短軸が220cmほどになるやや不整な長方形プランを呈する。深さは50cm～55cmで、壁面は急峻に立上がる。床面はほぼ平坦で、断面形は逆台形をなしている。濃い灰茶褐色の覆土中からは、肥前系の磁器類が多数出土している。

出土遺物 (28・29)

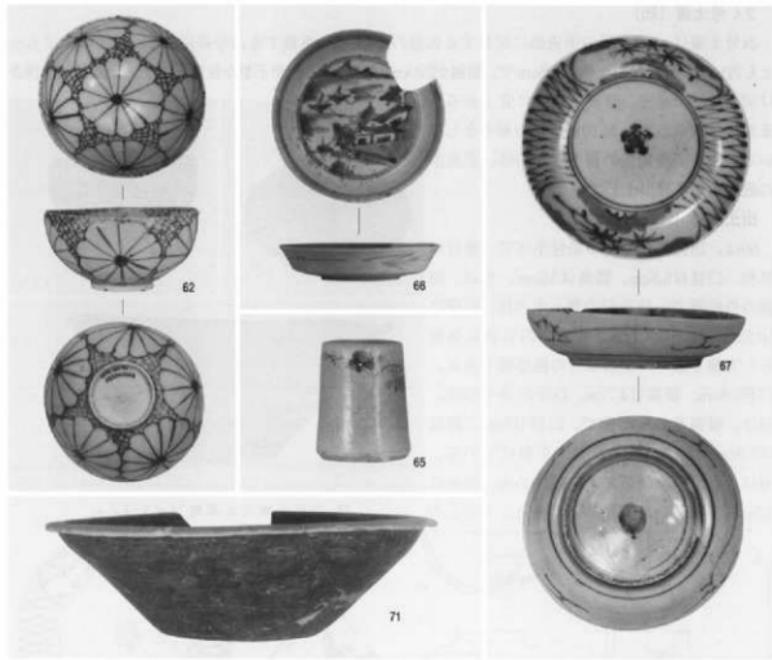
60は、18世紀の肥前の染付小杯で、墨付は無釉。口径は5.8cm、器高は3.3cm。61は、磁器の色絵碗で、18世紀中葉～末の作。口径は10.2cm、器高は4.7cm。62は、内外面に菊散らし文様を描いた肥前染付の磁器碗である。口径9.8cm、器高は4.7cm。18世紀後半の作。63は、関西系の陶器碗で、口径は8cm、器高は3.9cm。全体に透明な釉薬を掛けている。64は、青磁の染付蓋で、口径10.2cm、器高は3.2cm。見込には二重圓線の中央に五弁花の



27. 23号土壙出土遺物 (1/3・1/4)



28. 24号土壙出土遺物実測図 (1/3・1/4)



29. 24号土壤出土遺物 (1/3・1/4)

コンニヤク印判を押し、口縁部内には格子文を描いている。18世紀中葉～末。65は、関西系の色絵陶器で、灰落しであろう。口径5cm、底径5.4cm、器高は7.5cm。白化粧土を下釉にして草文を描いている。18世紀代。66は、染付の小皿で、見込には山水文、外面には枝折文を呉須で描いて



30. 26号土壤全景 (東より)

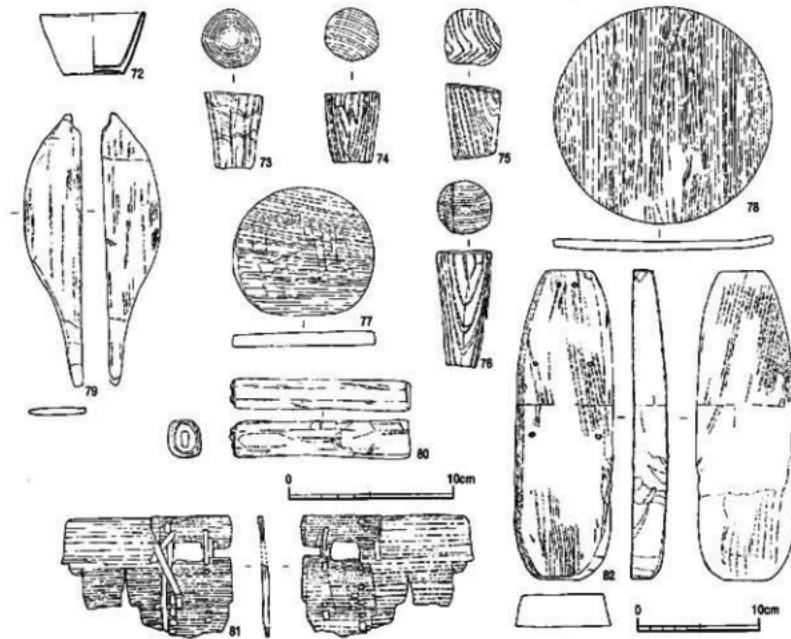
いる。口径は10.3cm、器高は2.4cm。18世紀前半～中葉。67・68は、波佐見窯の染付皿である。67は、口径13.3cm、器高は3.6cm。見込には五弁花のコンニャク印判の外縁に二重圓線と網目文を呉須で描いている。疊付には砂目が付着している。18世紀前半～中葉。68は、口径13.8cm、器高は3.1cm。見込には五弁花のコンニャク印判を押し、花唐草文を呉須で描いている。蛇の目の釉剥ぎがあり、疊付には砂目が付着している。18世紀中葉～末。69は、鶴首の磁器瓶。胴部には若松文を呉須で描く。三日月高台の内縁には砂目が付いている。18世紀中葉～末。70は、肥前染付の磁器花生瓶で、口径は10.4cm。口縁部は盤口形をなし、肩部には対称位にS字状の把手が付き、草花文を呉須で描いている。18世紀代。71は、鉄軸の陶器鉢で、口縁部には黄色と緑色の釉薬が上掛けされている。口径34.4cm、底径14cm、器高は10cm。口縁部は嘴状に外方に摘み出している。在地の所産で、18～19世紀の作。

26号土壌 (30)

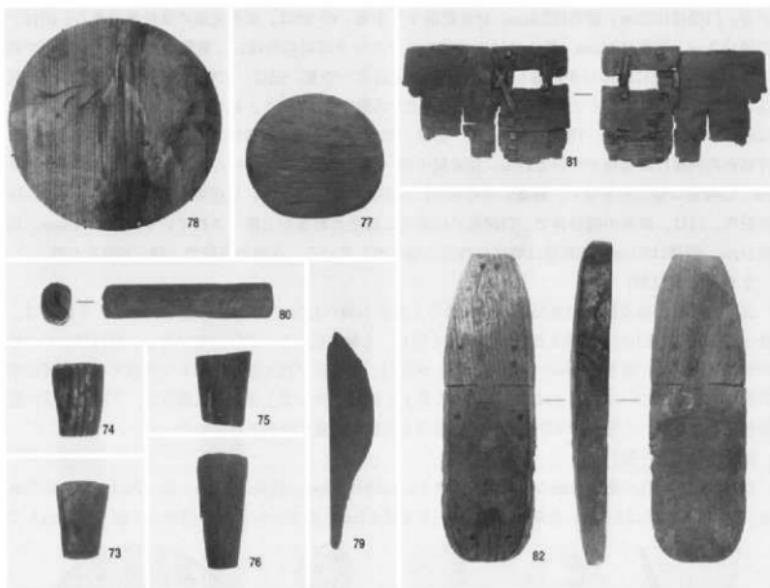
26号土壌は、調査区の中央部にあり、24号土壌から南へ1.2mの距離に位置している。平面形は、長辺195cm、短辺100cmの隅丸長方形プランを呈し、主軸方位をN-30°-Wにとる。壁面は、やや緩やかに立上がり、深さは30cm～40cmを測る。床面は、中央部が浅く窪んだ凹レンズ状をなし、逆台形の断面形をなしている。覆土は、黄灰色の砂質土を間層を挟んで上層が濃灰褐色土、下層が粘質の黒褐色土からなり、上層には下駄や桶柄、箸等の木器類が多く投棄されていた。

出土遺物 (31・32)

72は、18世紀代の肥前白磁のそば猪口である。口径は6.2cm、器高は3.7cm。73～76は、樽の栓である。73は、基部径は3.5cm、先端径は2.2cm、長さは4.7cm。基部から先端に向かって鋭く削り込んで

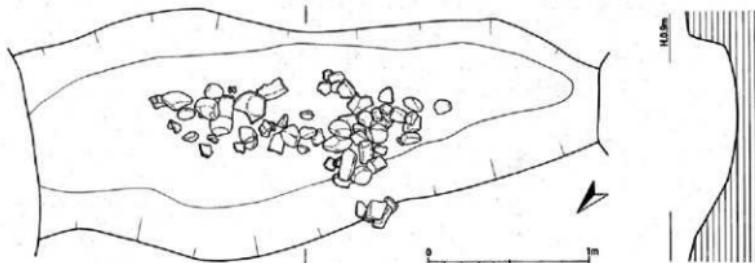


31. 26号土壌出土遺物実測図 (1/3・1/4)



32. 26号土壤出土遺物 (1/3・1/4)

いる。74は、基部径が3.2cm、先端径が2.2cmで、長さは4.3cm。全体に丸みを帯びている。75は、基部径が3.2cm、先端径が2.5cm、長さは4.6cmで、いずれもほぼ同じ規格に仕上げられている。76は、基部径が3.2cm、先端径が1.8cm、長さが6.8cmとスマートで長めである。77は、径が7.5cm×8.5cm、厚さが8mmの円形の板材である。曲物の底板かと考えられる。底面に焼焦げ状の痕跡がある。78は、桶か樽の底板であろう。直径は17.5cm～17.8cmで、ほぼ円形をなす。厚さは8mm。79は、ヘラ状の木製品で、長さは16.4cm、幅は3.4cm、厚さは4cmである。半円形の刃面は両面より削り出している。80は、包丁等の刃物の柄であろう。長径が2.3cm、短径は2cm、長さが10.7cmの円柱状で、片面に長さ10mm、幅4mmの茎の装着孔を彫り込んでいる。81は、幅9.8cm、厚さが2mmの曲物の側板である。板の結び目



33. 29号土壤実測図 (1/30)

は幅4mm～5mmの桜皮で、縦2列に丁寧に結んでいる。82は、下駄である。長さは25cm、幅は7.7cm、厚さは2.7cmで、断面形は台形をしている。爪先と踵および側縁に2孔一対の締掛けの孔が穿たれている。

29号土壤 (33・34)

調査区の中央部にある溝状の長い土壤で、東側小口壁は24号土壤に、西側小口壁は30号土壤に切られている。幅は155cm、長さは400cmほどで小口側が小さく窄まる形状になろう。主軸方位はN-49°-Eにとる。断面形は浅い舟底状を呈し、深さは35cmを測る。遺構上面には拳大的な礫石が散在し、その下層からは火葬骨片と炭化物が出土している。遺物は、土鍋や土師皿のはかに18世紀代の肥前陶磁器片が出土している。

出土遺物 (35・36)

83は、口径が22.8cm、器高が9.5cmの土鍋である。胴部はストレートに開き、口縁部内唇を上方に小さく摘み出している。ヨコナデ調整で、外面には指押圧痕がみられる。内面には炭化物が焦げ付き、外面には煤が付着している。胎土には砂粒を含み、焼成は良好。

30号土壤 (39)

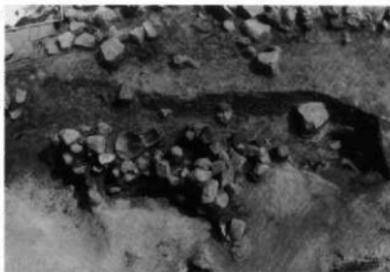
調査区の中央部の西寄りにある土壤で、29号土壤や40号土壤よりも新しい。平面形は、長辺が215cm、短辺が175cmのやや不整な楕円形プランをなしている。壁面は緩やかで、壤底までの深さは35cmである。床面は浅い凹レンズ状をなし、板材片が散乱していた。17世紀後葉～18世紀初めの有田窯の染付や陶器碗が出土しており、17世紀代の第2期の遺構群に遡る可能性もある。

出土遺物 (37・38)

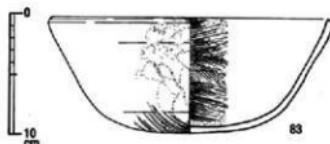
84は、上質の肥前有田窯の染付碗である。胴部には草花文を、口縁部下と高台ぎわにはシャープな二重の圈線を呉須で描いている。口径は9.8cm、器高は5cm。1670～1690年代のもの。85は、肥前陶器の碗である。全体に明るい薄茶色の釉薬を丁寧に釉掛けしている。疊付は無釉で、口径は11.8cm、器高は6.6cmを測る。17世紀後半～18世紀初。

32号土壤 (7)

調査区西端の19号土壤のすぐ東に位置する土壤で、33号土壤よりも新しい。平面形は、一辺が160cm～170cmの隅丸方形状を呈し、南東隅が小さく張出す。深さは約15cmで、床面は浅い凹レンズ状をなしている。



34. 29号土壤全景(北より)



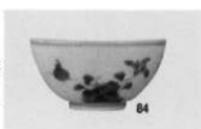
35. 29号土壤出土遺物実測図(1/4)



36. 29号土壤出土遺物(1/4)



37. 30号土壤出土遺物実測図(1/3)



38. 30号土壤出土遺物(1/3)

3 4 号土壙 (7)

調査区の西隅にある直径125cm円形土壙で、北壁は4号溝を、南壁は33号土壙を切っている。壁面はやや急傾に立上がり、深さは17cmである。壙底は浅い凹レンズ状をなしている。覆土中からは備前や肥前の陶器片が出土している。

3 5 号土壙 (7)

調査区の北西端に位置する土壙で、4号溝のすぐ北側にある。平面形は、直径が約130cmほどの円形プランをなそう。壁面は急傾で、深さは30cmを測る。遺物は土師皿と瓦質の火鉢が出土している。

3 6 号土壙 (7)

調査区の西部にあり、37号土壙の北壁を切っている。平面プランは、長辺が145cm、短辺が127cmの円形を呈している。緩やかに立上がる壁面の深さは22cmで、床面は浅い凹レンズ状をなしている。

3 7 号土壙 (7)

調査区の西部にある小型の土壙で、北壁側は36号土壙によって削平されている。平面形は、長辺が120cm、短辺が105cmの円形プランをなす。壙底までの深さは20cmで、床面は凹レンズ状を呈する。

4 1 号土壙 (7)

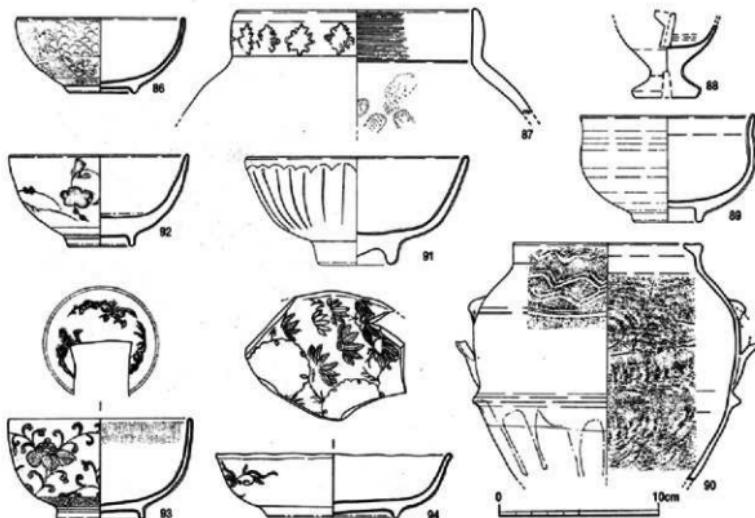
調査区中央部の北寄りに位置する小型の土壙で、すぐ北には93号土壙がある。平面形は、長辺が120cm、短辺が105cmの楕円形プランを呈する。深さ25cmの壁面はやや緩やかに立上がり、南壁側には10~20cm大の礫石が集積していた。床面は浅い凹レンズ状をなしている。遺物は、肥前の染付碗のほかに土師皿や土鍋片が出土している。

出土遺物 (40・41)

86は、肥前磁器の染付碗で、口径10.2cm、器高4.6cm。18世紀中葉~末のものである。87は、口径が15.2cmの瓦質壺である。内面には油煙が付着している。



39. 調査区中央部の土壙群（北より）



40. 41・45・46号土壌出土遺物実測図 (1/3)

4.2号土壌 (7)

調査区の西寄りに位置する小型の土壌で、90号土壌よりも新しい。平面形は、長辺が110cm、短辺が90cmの楕円形プランを呈する。床面は浅い凹レンズ状をなし、深さは25cmを測る。遺物は、18世紀代の肥前磁器片や土師皿、摺鉢が出土している。

4.4号土壌 (39)

調査区のはば中央部にある土壌で、東壁は45号土壌に、北壁は46号土壌に切られている。平面形は判然としないが、一辺が150~200cmの隅丸の方形プランをなそう。深さは40cmで、壁面は急峻に立上がる。

4.5号土壌 (7)

調査区の中央部に位置する土壌で、東壁は11号井戸跡に、南壁は12号井戸跡に切られている。平面形は、長辺が140cm、短辺が100cmほどの楕円形プランになろう。深さは38cmで、壁面は急峻に立上がる。遺物は肥前陶磁器の碗や皿、瓶等が出土している。

出土遺物 (40)

88は、陶器の灯明皿で、見込に芯立てがある。薄茶色の胎土上に褐釉を雜に掛けている。18世紀代。89は、京焼風の肥前陶器碗である。高台内～高台きわは無釉。口径11cmの口縁部は端反りになっている。器高は6.6cm。18世紀前半のもの。90は、口径12cmの陶器の二耳壺である。口縁部は内唇を水平に摘み出している。肩部には凹線で波状文を描き、把手下には1条の三角凸帯が巡る。内面には青



41. 41・46号土壌出土遺物 (1/3)

海波の叩き痕がある。釉薬は鉄釉に墨灰釉を上掛けしている。16世紀末～17世紀初頭のもの。

46号土壙 (39)

調査区中央の北寄りに位置する溝状の土壙で、すぐ北には4号溝が流れている。44号土壙よりも新しく、西小口壁は93号土壙に切られている。幅は80～120cmで、長さは330cmほどになろう。東小口壁と両側壁には中段に小さなフラット面が付く。側壁は、このフラット面を境として小さく鈎形に屈曲している。床面は浅い舟底をなし、深さは58cmを測る。18世紀代の色絵皿や染付碗のほかに青磁碗、土鍋等が出土している。

出土遺物 (40・41)

91は、蓮弁文の龍泉窯の青磁碗で、口径13.8cm、器高は6.7cm。兜巾状の高台内と疊付は無釉。92は、波佐見窯のいわゆる「くらわんか碗」と云われる染付磁器碗である。胴部には異須で梅文を描いている。見込は蛇の目の釉剥ぎ。口径10.8cm、器高は5.5cm。18世紀中葉～末の作。93は、有田窯の色絵で、口径11cm、器高は6.1cm。見込には松竹梅の円形文と格子文を、胴部には花唐草文と波涛文を描いている。1730～70年代の作。94は、有田窯の色絵皿で、口径14.2cm、器高は3.9cm。口縁部は輪花形をなし、見込には雪輪笠文を描いている。疊付は釉剥ぎ。18世紀前半の作。

53号土壙 (7)

調査区の北部にある土壙で、21号井戸跡のすぐ西に位置している。平面形は、長辺が115cm、短辺が85cmの方形プランを呈し、東隅壁に小さなフラット面が付いている。壁面は緩やかに立上がり、深さは21cmを測る。床面は浅く窪み、断面形は逆台形をなしている。遺物は染付片や壺片、土師皿片が出土している。

70号土壙 (42)

調査区の中央部北縁に位置し、すぐ北には16号土壙がある。平面形は、直径が125cmの円形プランを呈する。深さは28cmで、壁面はやや緩やかに立上がる。土師皿や肥前陶磁器片が出土している。

73号土壙 (42)

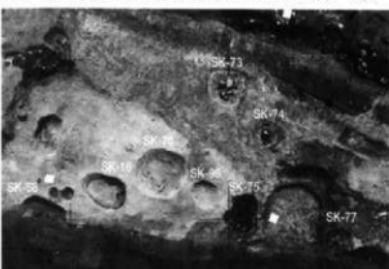
4号溝北岸の西寄りにあり、84号土壙のすぐ北に位置している。平面プランは、一辺が約110cmの方形を呈する。壁面は急峻で、深さは15cmと浅い。床面は平坦で、断面形は逆台形をなす。遺物は肥前の磁器片や土師皿片が出土しているが、量的には少ない。

74号土壙 (42)

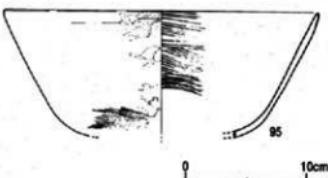
調査区の北西部にある小型の土壙で、73号土壙の西に位置している。平面形は、直径が80～90cmの円形プランを呈する。壁高は17cmと浅いが、壁面はやや緩やかに立上がる。床面は浅い凹レンズ状をなしている。遺物は、小量の肥前磁器片や土師皿片が出土している。

93号土壙 (39)

調査区中央部の4号溝南岸にあり、46号土壙の西小口壁を切っている。平面プランは、西壁側が焼失しているが、長辺が200cm、短辺が150cmほどの楕円形をな



42. 70・73・74号土壙全景（西より）



43. 93号土壙出土遺物測定図 (1/4)

そう。深さは30cmほどで、壁面はやや緩やかに立上がる。遺物は、土鍋のほかに肥前の摺鉢や同安窯の碗、土師皿片が出土している。

出土遺物 (43・44)

95は、口径25.6cmの土鍋である。外面は押圧痕上に煤が付着している。内面は粗いハケ目調整。

102号土壙 (45~50)

102号土壙は、調査区の南半部に抜がる埋立地の第1

杭列と第2杭列の間の西寄りに位置する大型の土壙である。覆土と埋立土とは土質的にも色的にも識別が困難であった。そのために上面では検出できず、まとまった遺物の出土によって初めて確認された。このことから平面形は明らかでないが、遺物の出土状況からすると直径が300cmほどの円形プランにならうか。壙底には、肥前陶磁器の碗や壺等をはじめ簾、竹箒、杓、金隠し、下駄等の木製品や鹿角製の鉗等がまとまって投げ込まれていた。木製品の中には、曲物の底板に墨書きのあるものもある。また、簾や竹箒は脆弱なために、ウレタン樹脂で固定して取り上げた。埋立地上遺構は、瓦で井筒を作る井戸跡のほかには26号土壙と102号土壙しかない。これは覆土と埋立土の類似性に因るもので、本来的には未検出の遺構があったと推察される。

出土遺物 (51~53)

96は、染付の大皿で、口径は21.6cm、器高は5.8cmである。見込は蛇の目の釉剥ぎで、二重圈線上に菊流文を吳須で描いている。全体に緋色が入り、豊付は無釉。17世紀後半の肥前波佐見窯のもの。97は、17世紀後半の染付大皿で、口径21.4cm、器高は6.5cm。見込には吳須で扇文を描いている。高台ぎわには二重圈線があり、豊付は無釉。98は、口径が1.6cmの鶴首の染付花瓶である。胴部には草花文を描いている。18世紀前半～中葉のもの。99は、肥前青磁の花生瓶で、口径は6.1cm、底径は6.4cm、器高は16.5cm。頭部と肩部の境には蝸牛形の耳は左右で渦の



44. 93号土壙出土遺物 (1/4)



45. 102号土壙遺物出土状況実測図 (1/30)



46. 102号土壙遺物出土状況 (西より)



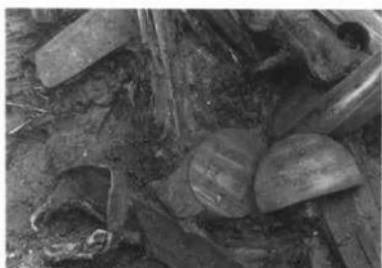
47. 102号土壤箆出土状況(西より)



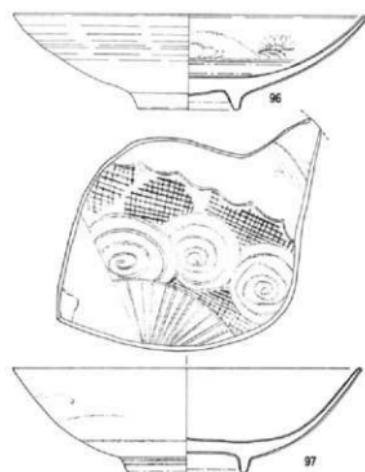
48. 102号土壤竹蓆出土状況(西より)



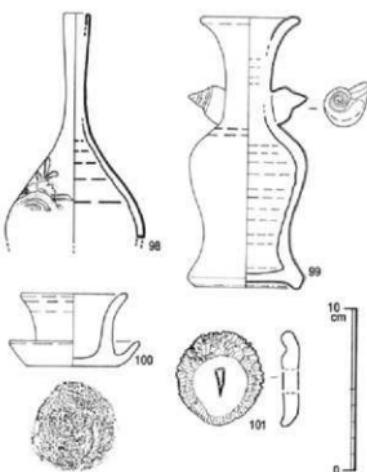
49. 102号土壤金箔・杓出土状況(西より)

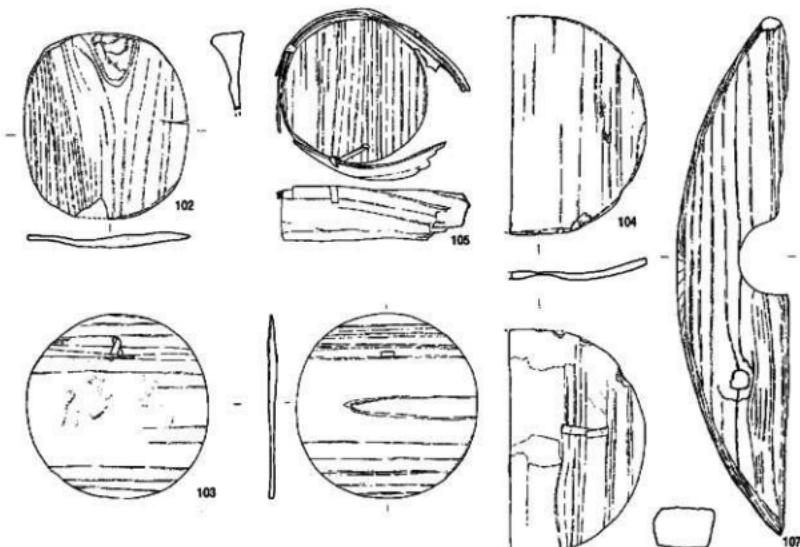


50. 102号土壤墨書き板出土状況(南より)

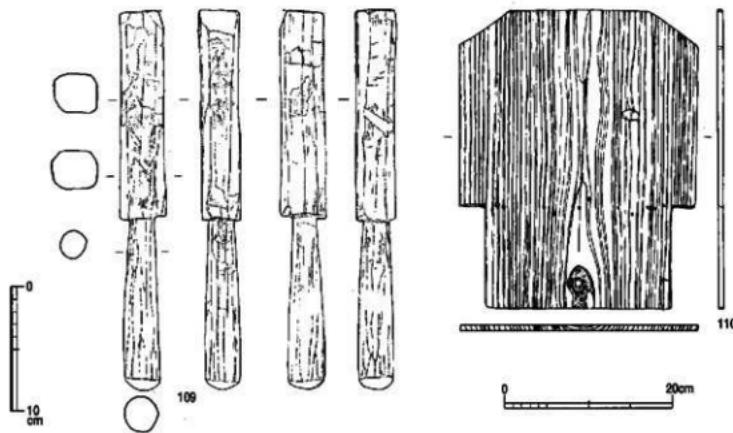


51. 102号土壤出土遺物実測図1 (1/3)





0 10cm

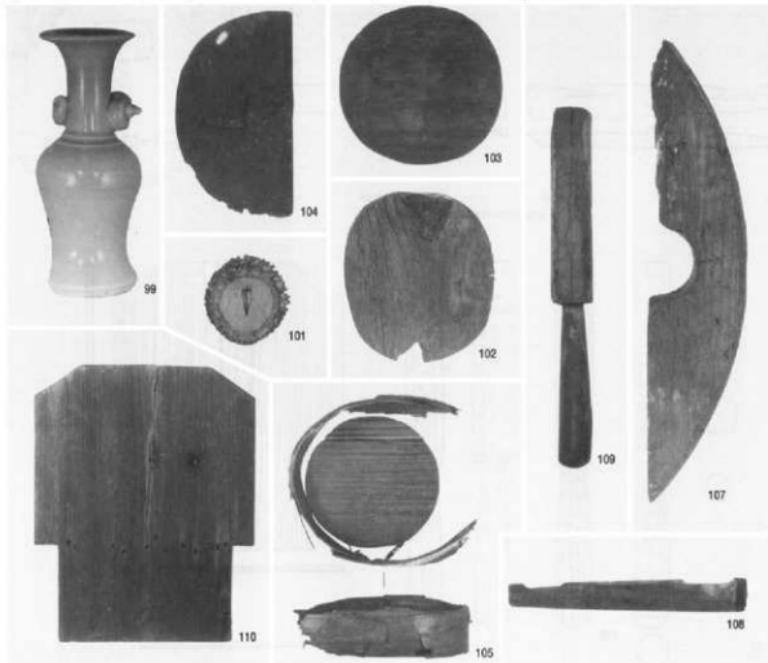


52. 102号土墳出土遺物実測図 2 (1/3・1/4・1/6)

巻き方が異なる。胴部は縦に半裁しているが、漆で縫いで再利用している。蓋付は無軸。17世紀末～18世紀前半。100は、口径6.4cm、器高4.4cmの土師器の灯明皿である。糸切り底で、在地の産か。

101は、長径が5.8cm、短径が5.4cm、厚さが1.1cmの円形をした鹿角製品である。中央部に幅7mm、長さ18mmの三角形の割り抜き孔があり、脇差しの鍔と考えられる。鹿角は切り落とした基部の両面を研ぎ、基部側から刃部を装着したものであろう。

102～104は、曲物の底板である。102は、長径が11cm、短径が9.6cmの小判形の底板。厚さは3mm～7mmで重みがある。103は、直径が10.6cm～10.8cm、厚さは3.5mm。木目に沿って割れた2枚の板を桜皮で結んでいる。外面に墨痕があるが、判読できない。104は、復原直径は13.2cmで、厚さは4mm。桜皮で結ばれている。105は、底板径が7.5cmの曲物。側板は幅が3.2cmで二重に巻き、3ヶ所を幅4mmの桜皮で固定している。106は、曲物の側板で、幅4mmの桜皮で固定している。107は、厚さ2.4cmの樽の蓋で、直径が4.5cmの円孔が穿たれている。108は、長さ15cm、厚さは9mm。中央部に目釘孔がある。109は、芯持ち材の砧である。楕部は幅が3.1cm～3.5cmで、方形の角を幅狭に削って八角形に造り出している。把手部は、1.8cm～2.8cmに丸く削りだしている。全長は30cmで、楕部長は16.4cm。110は、長さ35.4cm、幅が29.3cm、厚さは7mmの金隠しである。上縁は両隅を切り落として台形を作る。下縁から12cmの所には幅が3cmの枠受けの削り込みがある。この枠受けは30°の傾きがあり、この角度で11本の釘を用いて枠留めされている。このほかに竹箒や簾があるが、現代の製品と同じである。



53. 102号出土遺物 (1/3・1/6)

3). 井戸跡

井戸跡は、すべてで12基を検出した。基本的には、円形～梢円形プランの掘り方内に井側を埋置するものである。井側の構造としては、1)素掘りのもの、2)曲物を用いたものや桶を用いたもの、3)平瓦を円形に巻いたものがある。このうち瓦巻きのものには、無蓋のものと木蓋で覆いその上に陶管を組いだものがある。この陶管を組いだものはポンプでの汲み上げを意味し、近代まで使われたことを示すが、その開鑿が近世に遡るものか否かは明らかでない。ちなみに博多では、昭和20年頃まで瓦巻きの井戸が使われていたとのことである。

分布的には、調査区の北半部にまとまって拡がり、護岸跡より南側の埋立地上にはみられない。潟の堆積土壤に因るものかもしれない。また、博多大水道の北側が町屋街で、南側が寺院の境内であったことに因るとも推察される。

8号井戸跡 (54・55)

8号井戸跡は、調査区の東端部にある素掘りの井戸跡で、西壁は9号井戸跡に切られている。平面形は、直径が約100cmほどの円形をなす。検出面から80cmほど掘り下げた標高-0.1mの所で、水が湧きだし、完掘を断念した。この段階では井側は検出していない。遺物は青磁碗や紅皿、土師皿等が出土している。

9号井戸跡 (54・55)

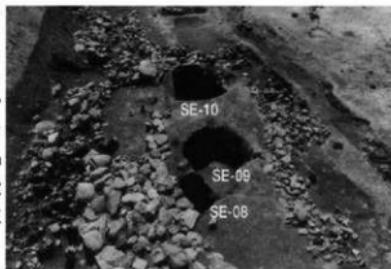
9号井戸跡は、調査区の東端部にある素掘りの井戸跡で、8号井戸跡よりも新しい。平面形は、直径が170cmの円形で、標高-0.1mの地点で湧水し、未掘のままである。井戸側は未検出である。遺物は青磁片や陶器壺片がある。

10号井戸跡 (54・56)

10号井戸跡は、調査区東部にある素掘りの井戸跡で、護岸跡上縁の礫石上に掘り込まれている。平面形は、直径が200cmの円形をなす。標高-0.3mの地点で湧水し、完掘していない。井戸側は検出してないが、18世紀代の肥前色絵瓶等とともに木器の薄皮片が出土しており、曲物の井戸側の可能性もある。

出土遺物 (63・64)

111は、青磁の皿で、口径12cm、器高は3.7cm。磁胎は密で白っぽく、口縁部には油煙痕がある。
112は、じゃかご文の肥前色絵小瓶のミニチュアである。口径は1cm、底径は2cm、器高は3.7cmで、底部と内面は無釉。18世紀後半～19世紀中葉のもの。



54. 8~10号井戸跡全景(東より)



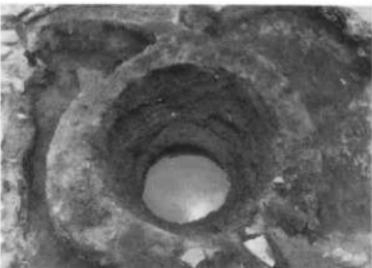
55. 8・9号井戸跡全景(北より)



56. 10号井戸跡全景(東より)



57. 11号井戸跡全景(北西より)



58. 12号井戸跡全景(北より)



59. 25号井戸跡全景(南より)



60. 27号井戸跡全景(南より)

11号井戸跡 (57)

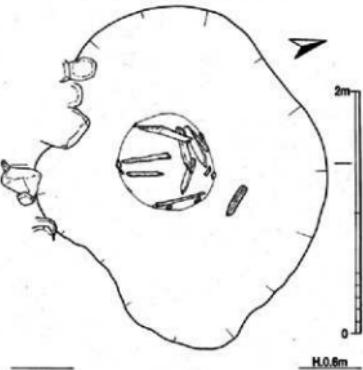
11号井戸跡は、調査区の中央部に位置し、45号土壌よりも新しい。平面形は、直径が1mの円形で、検出面より50cm下がった標高0.3mの平瓦巻きの井戸側がある。この井戸側上には70cm四方の木蓋が被せられ、その一端に径15cm、長さ60cmの陶管が立てられていた。掘り方内から18世紀代の染付皿が出土している。

12号井戸跡 (58)

12号井戸跡は、調査区の中央部に位置し、23・24号土壌よりも新しい。平面形は、直径が160cmの円形プランを呈する。標高0.3mの所で井戸側に用いた曲物を検出したが、0mの所で湧水し、完掘はしていない。17世紀末～18世紀代の獅子文の染付碗等が出土している。

21号井戸跡 (7)

21号井戸跡は、調査区の北端にあり、22号井戸跡よりも古い。掘り方は、長径が4.1m、短径が3.1mの楕円形を呈し、その中央に2個の井戸側が東西



61. 49号井戸跡実測図(1/40)

に切り合って並んでいる。新しい方は12枚の平瓦を巻き、外側に玉砂利を敷き込んでいる。

出土遺物 (63)

113は、型成形の染付散蓮華で蝶文を描く。

25号井戸跡 (59)

25号井戸跡は、調査区中央の26号土壇のすぐ東にある。直径が1.1mの円形で、平瓦巻きの井戸側上には木蓋が被せられていた。

27号井戸跡 (60)

27号井戸跡は、調査区中央部の西寄りにあり、石組護岸跡の礎石上に掘り込まれている。掘り方

は、直径が105cm～120cmの円形で、その中に11枚の平瓦を巻いて径80cmの井戸側を作る。更に、この井戸側の内面には桶が2段重ねられている。掘り方と井戸側の間には玉砂利が敷き詰められている。

出土遺物 (63)

114は、土師質の十能である。柄の差し込み口は、直径が1.5cmで、長さは6cm。18～19世紀代。

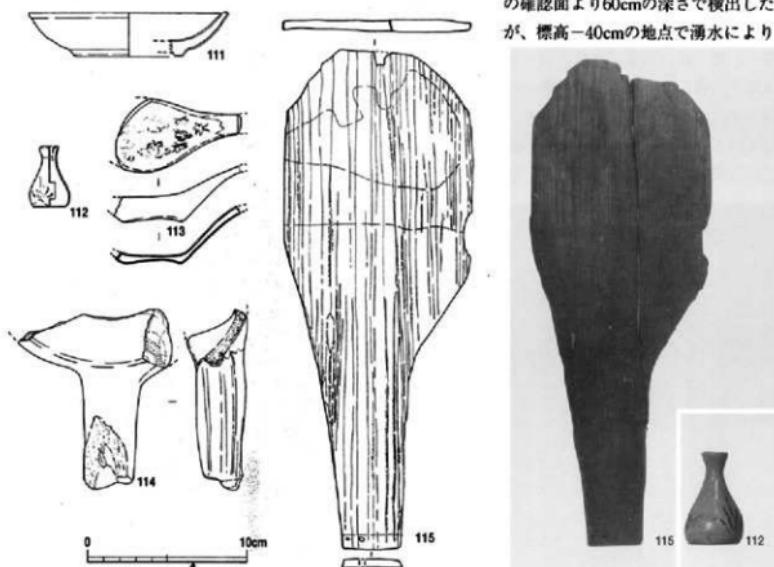
49号井戸跡 (61・62)

49号井戸跡は、調査区の中央部に位置し、すぐ北には87号土壇がある。井戸跡は、初めに長径2.85m、短径2.35mの楕円形の堅穴を掘り、その中央部に直径が80cmほどの木桶を井戸側として埋め込んでいる。井戸側の外側には親指大～拳大の円礫を裏込めして水の滤過を図っている。木桶は、井戸跡

の確認面より60cmの深さで検出されたが、標高-40cmの地点で湧水により



62. 49号井戸跡全景（東より）



63. 10・21・27・49号井戸跡出土遺物実測図 (1/3)

64. 10・49号井戸跡出土遺物 (1/2・1/3)

壁面が崩落したために完掘はしていない。また、井戸側の木桶には幅5cm~8cm、長さが35cm~40cmの板材を用いて、現状で2段重ねている。

出土遺物 (63・64)

115は、杓文字状の木製品で、長さは30.5cmで、厚さは7mm。柄の基部には円孔がある。装着用のものか。

4). 溝遺構

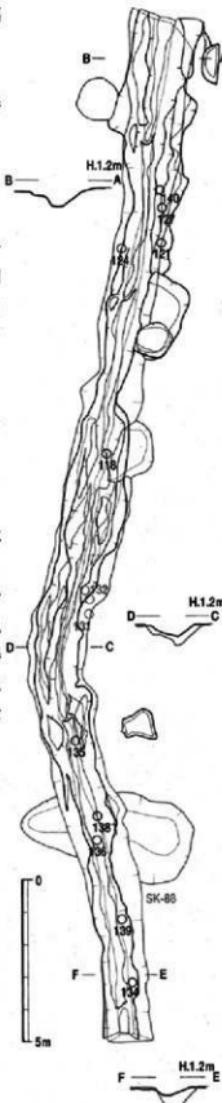
第1期の溝遺構は2条を検出したが、構造的には大きな違いがある。ひとつは「博多大水道」と呼ばれる石造りの強固な構築物であり、もうひとつは素掘りの簡便なものである。この違いは、溝の根源的な機能の相違に起因するものではなく、多くは必要度の軽重に発するものと推測される。

4号溝 (65~70)

4号溝は、調査区の北部を東から西方方向へ小さく蛇行しながら流れる溝で、溝幅は狭いところで80cm~90cm、広いところで190cmほどある。壁面の中段には隨所に小さなテラス状の平坦な段が付くところがある。この溝は、はじめに幅1.2m~1.9m、深さ65cm~90cmのU字溝を掘り、廃絶した後に、再び流路と同じ様に掘り返して使用されている。この再掘溝は、幅が1m~1.6mで、深さは30cm~60cmと一回り小さくなり、断面形も浅いV字~U字状を呈している。流路は東側が浅く西側がやや深い。覆土は、下層に水性の灰~灰黒褐色の粘土が、上層には暗茶褐色土層が堆積していた。この下層からは中国陶磁器や土師皿、土鍋、漆器碗、イスの骨等が出土した。一方、上層からは肥前陶磁器が多量に出土している。これは16世紀代に護岸跡に沿ってあった流路が埋没し、18世紀に再開削されて機能したことを意味しよう。



65. 4号溝全景(東より)



66. 4号溝実測図 (1/150)

出土遺物（71～73）

116～120は、15世紀～16世紀代の李朝陶器である。116は、鉄釉皿で、口径は10.2cm、器高は3cm。見込と高台内には4個の胎土目痕がある。117は、口径が11.4cm、器高が3.6cmの皿である。灰色の釉薬を施釉している。三日月高台で、見込には4ヶ所に胎土目痕がある。16世紀代のもの。118は、口径が11.4cm、器高が3.8cmの皿である。濃灰色の釉薬に白化粧土をハケ目状に掛けている。兜巾の三日月高台で、疊付には砂目が付着している。119は、口径12cm、器高が5.7cmの碗で、卵色の釉薬を掛けている。見込と疊付には胎土目痕が付く。120は、灰釉の碗である。高台は無釉で、見込には胎土目痕がある。121・122は、龍泉窯の青磁碗である。121は、口径11.8cm、器高は6.5cm。明るいベージュに灰釉が施釉され、見込には2本の圈線がある。高台は無釉で、チャッ痕が付いている。122は、三日月高台の蓮弁碗で、見込には花文がある。口径14cm、器高は8cm。123・124は、15世紀中葉～16世紀前半代の稜花形の青磁皿である。123は、口径12.2cm、器高は3.2cm。釉薬は明るい灰色で、三日月高台の内面は無釉。見込には陰刻がある。124は、口径が11.8cm、器高は2.9cmで、高台内は無釉である。125～127は、景德鎮窯の染付皿である。125は、見込に龍文を描いた16世紀前半～中葉のもの。高台ぎわに砂目が付着している。126は、小皿で口径が9cm、器高は2.5cm。蛇の目の釉剥ぎをした見込には花文を描く。16世紀代のもの。127は、口径9cm、器高が2.2cmの小皿である。見込には花を抽象化した十字花文を、胸部には唐草文を描いている。疊付は釉剥ぎ。15世紀末～16世紀前半。128は、18世紀後半の肥前染付蓋で、見込には岩に舟を、摘み内には昆虫文を具須で描いている。129は、外面に草花文を、見込には枝折文を具須で描いている。1725～1750年代のもの。130は、器高が3.4cmの肥前染付皿で、見込には具須で花生文を描く。疊付は無釉。1630～1640年代製。131は、三足脚の鉄釉陶器盤で、底径は18.4cm。内面はナデ、外面には格子目叩き痕が残る。17世紀前半～中葉のもの。



67. 4号溝下層イヌの骨出土状況（南より）



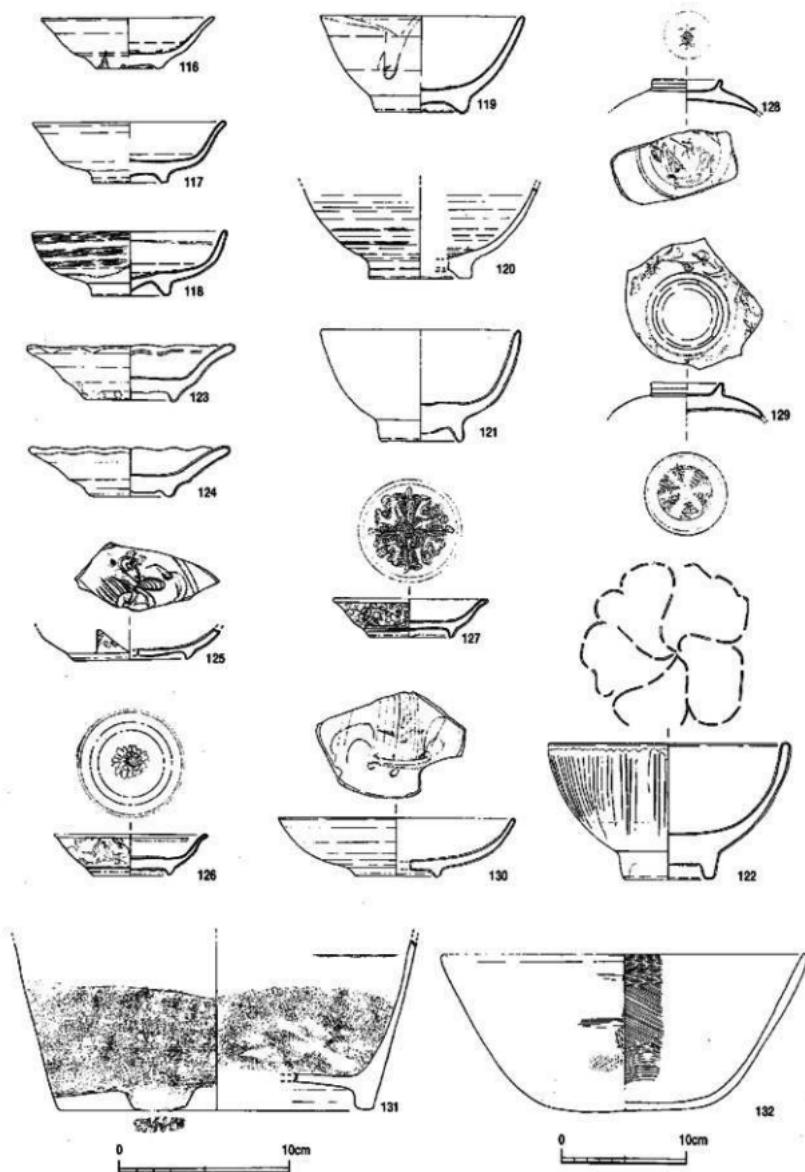
68. 4号溝下層土器出土状況（南より）



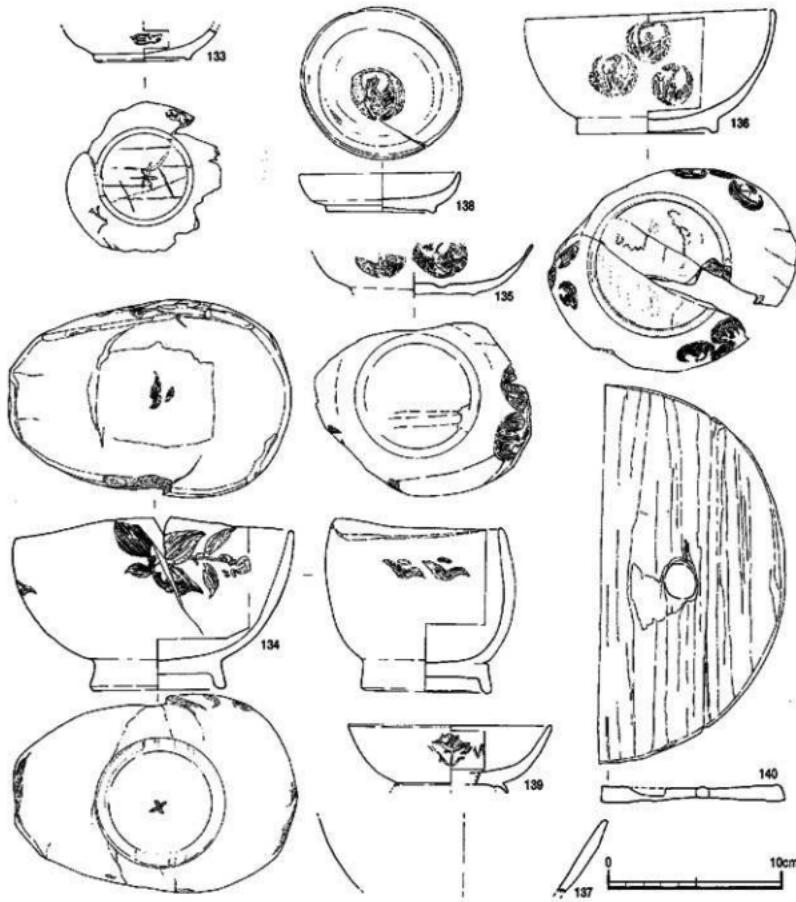
69. 4号溝下層漆器・皿出土状況（北西より）



70. 4号溝下層漆器（南より）



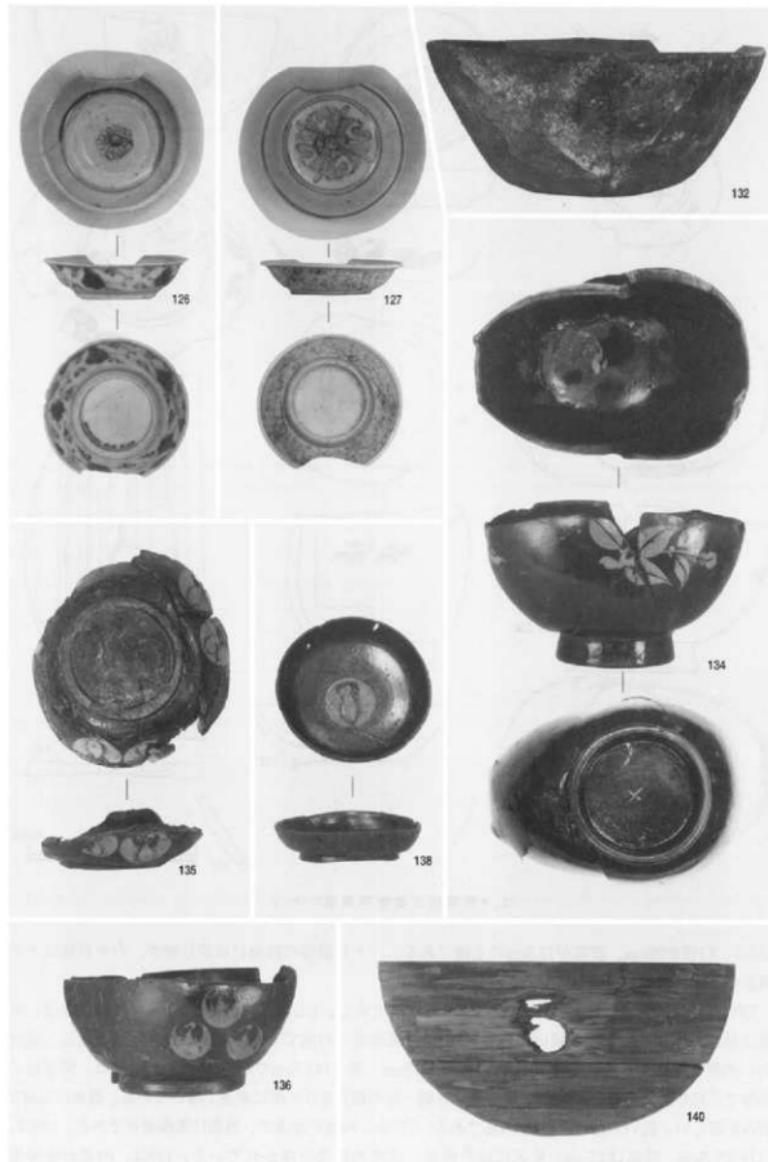
71. 4号清出土遺物実測図1 (1/3・1/4)



72. 4号溝出土遺物実測図2 (1/3)

132は、口径が29cm、器高が12.5cmの十鍋である。ハケ目調整の内面には炭化物が、ハケ目後にナデ調整の外面には煤が付着している。

133～139は漆器で、133～137は椀、138・139は皿である。133は、高台径が5.8cm。内面は赤漆、外表面は黒漆に赤漆で絵文様を描いている。134は、黒漆塗りの碗で、歪みが著しい。胴部と見込、高台内に赤漆で蘆草文を描いている。高台径は7.7～8cm、高さは1.8cmで高台部が高い。135は、黒漆地に赤漆で三対の絵文を描く。136は、黒漆地に3個一対の鶴丸を3ヶ所に赤漆で描いている。器高は7cmで歪みが著しい。低い高台の直径は8.5cmである。137は、内面が赤漆で、外表面は黒漆塗りである。138は、口径が9.5cm、器高は2.5cm。見込には黒漆地に赤漆の絵文が描かれている。139は、内面が赤漆塗



73. 4号溝出土遺物 (1/3・1/4)

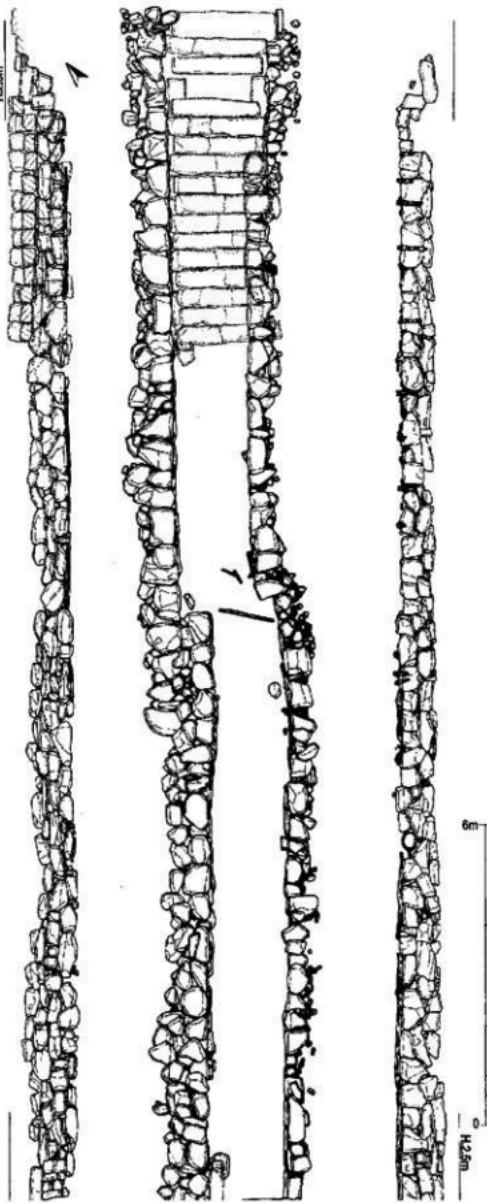
り。外面は黒漆地に赤漆で草花文を描いている。140は、桶の蓋で復原径は24cmで、厚さは1cmである。中央の外縁側に寄って孔径が2cmの円孔が開けられている。

321は、1174年初銚の「淳熙元寶」である。

101号溝 (74~81)

101号溝は、調査区の南端部で検出した石積みの水路で、東西方向に直線的に伸びている。これが『筑陽記』等に記されたいわゆる「博多大水道」である。

101号溝は、現地表下50cmのところで、東西長約25mにわたって検出した。溝底のレヴェルは西方に向かって緩やかに低くなり、博多川に放流していたものと推察される。石壁は、基底面に直径が10cmほどの松杭を2~3本敷いて胴木とし、その上に石材を横に並べて積上げている。石積みは、30cm~80cm大の花崗岩や玄武岩質の割石を3~4段積上げ、その裏面にはそれより小さめの石材や円礫を詰めて裏込めとしている。壁面は、基本的に内側に面を揃えて野面積みに丁寧に積上げている。北壁はこの状況をよく留めている。これに対して南壁は、砂岩質の割石を縱や横方向に比較的ランダムに積上げている。石材にも切り出し時の整痕が残っている。この相違は北壁は水路構築時の様相を留め、南壁は明治13年の覆蓋時かそれ以前に改修が加えられた跡を物語るものと考えられる。また、壁面は中央部が南側に1段屈曲している。北壁は直ぐに延びる壁面が、屈曲部を境にして西側に壁面を1列補強するようにして内側に張り出している。石材や積み



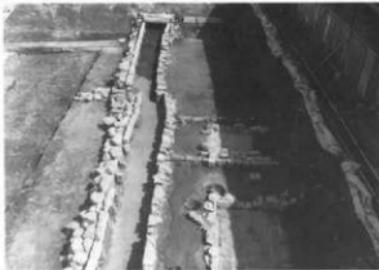
74. 101号溝実測図 (1/100)



75. 101号溝全景(北より)



76. 101号溝覆蓋状況(西より)



77. 101号溝蓋石除去後(西より)



78. 101号溝北壁裏込め(北より)



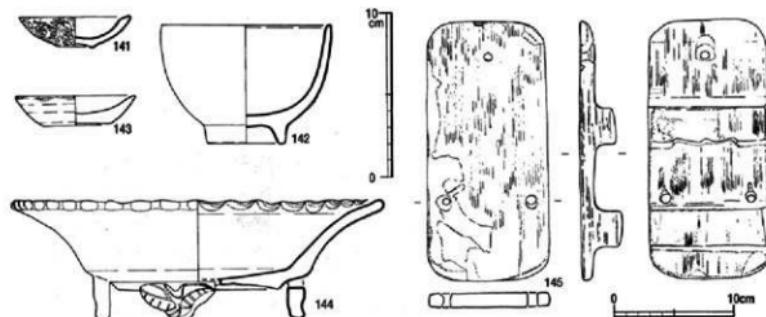
79. 101号溝南壁裏込め(南より)



80. 101号溝屈曲部壁面(西より)



81. 101号溝蓋石支脚壁(南より)



82. 101号溝出土遺物実測図 (1/3・1/4)

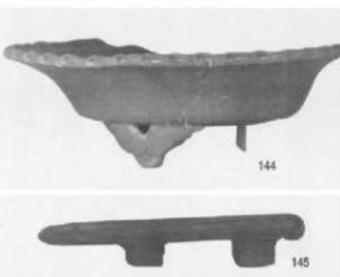
方に東西での違いはない。南壁でも同じく矩形に屈曲していることからすると後日の補修痕とは考えがたい。構築時から意識的に折れ曲がっていたものと考えられる。ただし、これが街区の規制によるものか、あるいは単に東西からの石面の接合誤差かは判断はしがたい。溝幅は、基底面で150cmである。

一方、北壁の内側には御影石(花崗岩)の石柱で橋脚を作っている。はじめに溝底に40~50cm角の平石を据え、それを礎石として30cm角の長さが60cmの石柱を60~100cmの間隔で立て、その上に長さが120~150cmの石柱を梁として架け渡している。梁面は、石壁の上縁に面を揃え、その上に長さ170~200cmの石柱を直交に架け並べて覆蓋している。この石梁は北壁側のみで、石柱の短さを補うものである。この溝底上にはヘドロ層と砂層が互層的に堆積しており、その中からは18世紀~19世紀代の陶磁器片や寛永通寶等が出土している。また、上層からは明治~昭和期までのものが出土している。

出土遺物 (82・83)

141は、南壁の裏込めより出土した肥前白磁の紅皿である。口径は6.6cm、器高は1.8cmである。型打成形の胸部には陽刻の蛸唐草文が施文されている。釉薬は雑に掛け流し、高台付近は無釉である。19世紀代。142は、呉須手の肥前陶器碗で、疊付は無釉である。見込には異物が付着している。口径は10.4cm、器高は7.2cmで、高台径は4.8cm。17世紀後半~18世紀前半代のもの。143は、口径7.2cm、底径4.2cm、器高が1.8cmの糸切り底の陶器小皿である。口縁部には油煙が付着しており、灯明皿に転用されたものであろう。18世紀~19世紀代の在地産のものであろう。144は、三足脚の肥前青磁の鉢である。口縁部は輪花形をなし、底面は蛇の目の釉剥ぎである。口径は22.8cm、器高は7.3cm。145は、下駄である。長さが21.1cm、幅が9.9cmの隅丸長方形で、爪先の中央に1孔、側縁に2孔の花緒掛けの円孔が穿たれている。裏面には中央よりやや後に幅3cm、高さ2.2cmの歯が削り出して付けられているが、前歯の方が4mmほど前に揺れている。

318~320は、「寛永通寶」である。

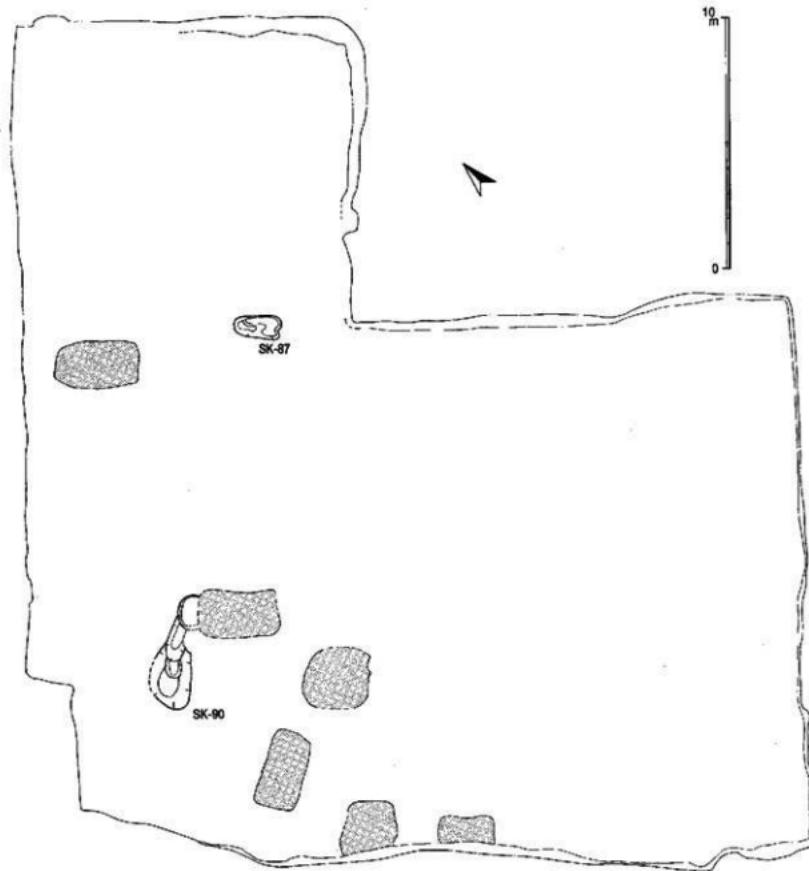


83. 101号溝出土遺物 (1/3・1/4)

5. 第2期の遺構

第2期としたこの時期は、調査区の中央部を東西に延びる石組護岸跡が埋立てられて機能を失ってから埋立地の利水のために「博多大水道」が築かれるまでの時期である。つまり、17世紀初頭～18世紀までの江戸時代前期の1世紀間である。博多のこの時期は、南北の砂丘の間に試がっていた渦が巻の施策によって大規模に埋立てられ、街域が急速に拡大していく時期である。

しかしながら、調査で検出した遺構は、上塙が2基であった。第1期の遺構としながらも17世紀代に遡る要素をもった36号上塙や40号土塙を含めても数量的には少ない。これは埋立地上であるための環境の劣悪性に因るものではなかろうか。排水の劣悪さによって住環境が安定しないために町屋街が形成されず、そのために副産物といえる土塙や溝等の遺構が少ないものと考えられる。調査区は、大半



84. 第2期の遺構配置図 (1/200)

がこの埋立地上に立地しており、遺構の過小さはこれに因るものであろう。しかし、これが「博多大水道」構築の遠因にもなっていく。

1). 土 壤

第2期の土壤は2基を検出した。プランは不整形な楕円形である。分布的には、遺構の少なさから拡がり方や傾向性を察することはできがない。

87号土壤 (85)

87号土壤は、調査区東部の4号溝と49号井戸跡に挟まれて位置している。平面形は、長辺が198cm、短辺が105cmの長方形プランを呈し、小口壁は円形に膨らんでいる。深さは25cmと浅く、壁面は比較的緩やかに立ち上がる。床面は浅く窪み、断面形は舟底状をなす。南小口壁側の上層には拳大的円礫が拡がっていた。覆土中からは同安窯系の青白磁類や備前系の壺片等が出土している。



85. 87号土壤全景(東より)

90号土壤 (86)

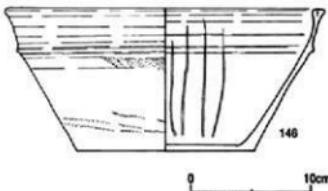
90号土壤は、調査区の西部に位置し、北壁は4号溝に、南壁は42号土壤に切られている。また、東小口壁も小土壤によって削平されている。平面形は、短辺が155cmで、長辺は約300cmに復原される長楕円形のプランをなし、東西方向に主軸方位をとる。壁面は緩やかに立ち上がり、壁高は15cmと浅い。覆土中からは、土師皿片のほかに肥前の陶器摺鉢が出土している。



86. 90号土壤全景(南より)

出土遺物 (87)

146は、口径26.6cm、器高は11.6cmの肥前陶器の摺鉢。口縁部は直口気味に立ち上がり、上唇は内外に小さく突き出す。口縁部下に1条の三角凸帯がある。摺目は4本1単位で、間隔は広い。口縁部から底部が鉄釉で、貝目痕がある。16世紀末～17世紀初。

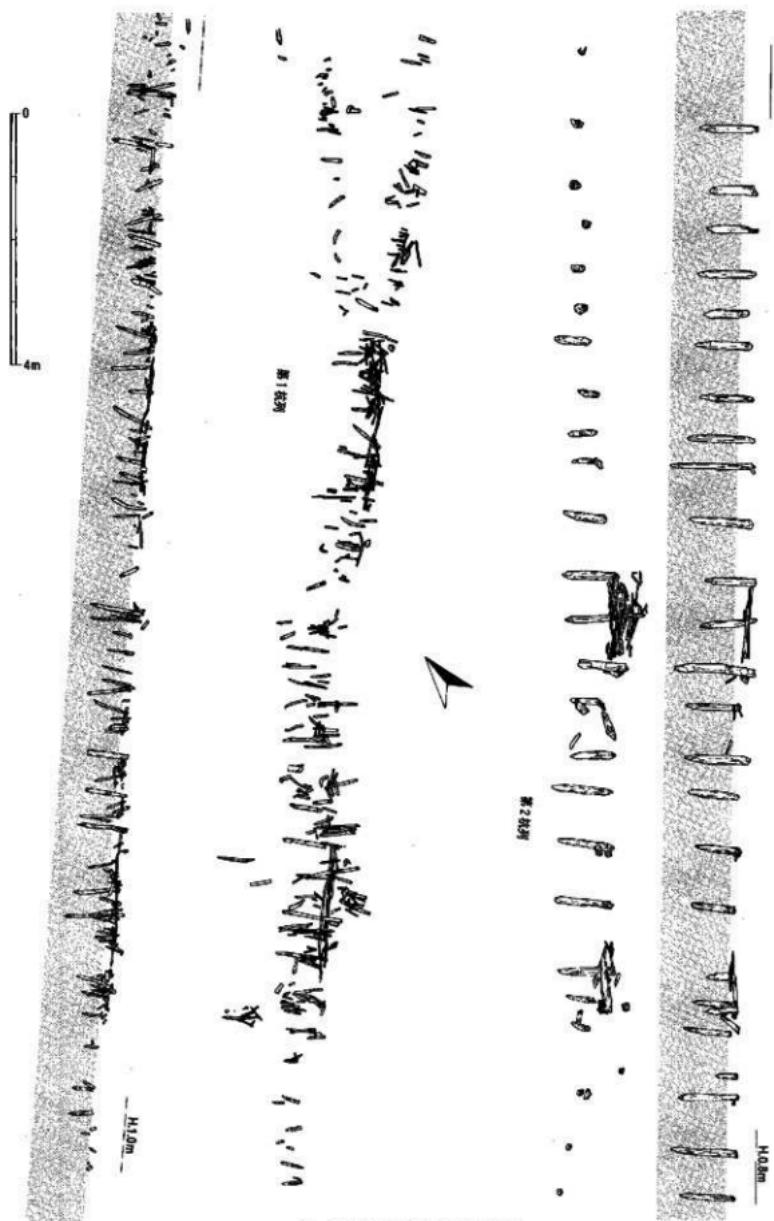


87. 90号土壤出土遺物実測図(1/4)

2). 埋立地

調査区の中央部には、東から西へと石組みの護岸跡が拡がっている。この護岸跡は弧状に延びて第89次調査区へと続き、その西端には舟着場と考えられる石敷きの施設が付設されていた。13世紀以降は断続的に小規模な埋立てが行なわれ、慶長5(1600)年は小早川秀秋により、慶長18(1613)年には黒田長政によって大規模な埋立て事業が二度にわたって実施されたと『石城誌』に記されている。

本調査区では、護岸跡の基礎石列から南の「博多濱」側へ3mの距離に杭列(第1杭列)がある。それから3m～4mの間隔を置いて更にもう1列の杭列(第2杭列)が東西に築かれていた。杭列は50cm～100cm



88. 埋立地杭列実測図 (1/80)



89. 埋立地全景 (南より)



90. 第1・2杭列全景 (東より)



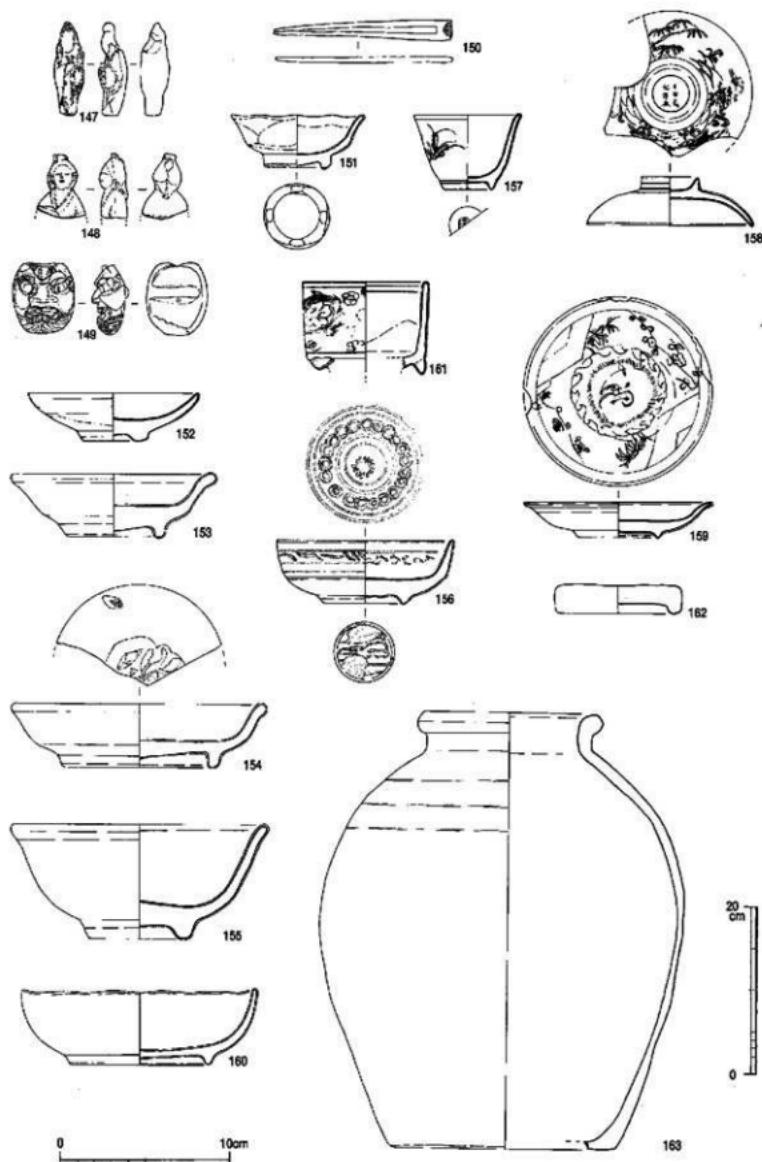
91. 第1・2杭列全景 (北より)



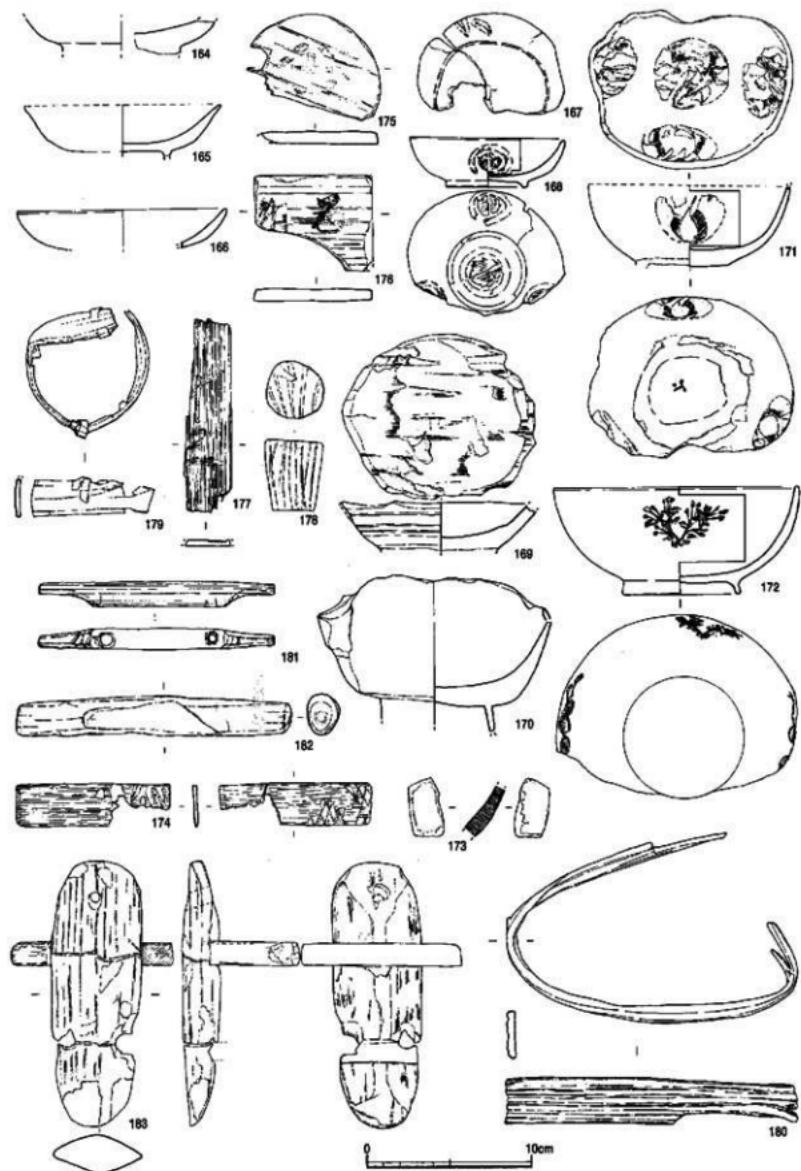
92. 第1杭列柵 (北より)



93. 第2杭列柵 (北より)



94. 堀立塚出土遺物実測図1 (1/3・1/6)

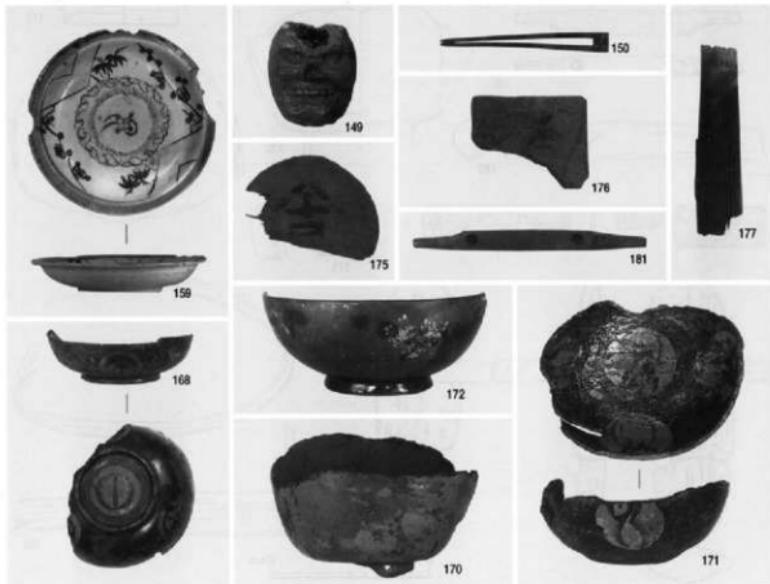


95. 墳立地出土遺物実測図 2 (1/3)

の間隔を置いて深く打込まれ、その杭と杭との間には横木を密に組んで構築している。杭列は第1杭列と第2杭列とで構築法に若干の差異がある。第1杭列は、杭材に竹杭と細目の木杭を併用し、横木には竹材と枝材をランダムに組み込んでいる。これに対して第2杭列は、杭材に10cm大の角材や丸太材を深く打込み、横木には竹材のみを密に編み込んでいる。この相違は、柵にかかる土砂圧の加重差に因るのではないか。つまり、第1杭列は護岸跡の傾斜面によって減圧されるが、第2杭列は土砂圧をそのまま受けるためにより強固な杭列が要求されたのではないか。しかし、両杭列ともに土圧に抗し切れず、外側へ傾いている。第2杭列から約7mの距離にも杭列(第3杭列)の一部がある。護岸上や埋立土下層は15~16世紀のものが多いが、上層は17~18世紀初めの遺物の混入もある。

出土遺物 (94~96)

147・148は、型押成形の土製人形。147は長さ5.5cmの親音像。148は雛人形。149は鬼面の陶器模付で、長さは4.2cm。黄色釉に緑釉を額や目尻に掛けた。関西系。150は長さが10.4cmの籠甲の笄。基部に飾り金具片が付く。151は切り高台の白磁小坏で口径は7.8cm。15世紀~16世紀。152は龍泉窯の白磁皿で口径は10cm。高台脇は無釉。153~155は14世紀後半~15世紀中葉の龍泉窯青磁皿と碗。153は口径12cm、器高は3.7cmで高台内は無釉。154は口径15cm。高台内は蛇の目の釉剥ぎで、見込には印花文を配す。155は口径14.6cm、器高が6.7cmの碗。三日月高台の疊付に2個の胎土目痕があり、内面は蛇の目の釉剥ぎ。156は口縁部と高台が口銘の李朝青磁皿で、口径10.4cm、器高は3.7cm。157は口径6.2cm、器高が4.4cmの肥前染付小坏。呂須で枝折文を描く。158は口径9.8cm、器高が3.4cmの肥前染付蓋。松竹梅文を呂須で描き、摘み内には「大明成化年製」銘がある。159は口径11.2cm、器高が2.1cmの色絵皿。見込の蛇の目の釉剥ぎは色絵の松竹梅文で隠している。160は肥前青磁の輪花形皿で口径



96. 埋立地出土遺物 (1/2・1/3)

13.8cm、器高は4.4cm。豈付は釉剥ぎ。161は色絵の三足香炉で、口径は7.4cm。口銅の口縁部下には花文を描く。162は口径7.6cmの焼塙壺蓋。163は13世紀～14世紀代の備前壺で、口径23cm、器高51cm。

164～173は漆器類。164・166・168・172は内面が、170は全面が赤漆塗りのほかは黒漆塗り。168は胴部と高台内に丸に抱き茗荷の家紋が入る。172は赤漆の花文に金粉を掛けている。174は黒漆地に赤漆で絵付けした箱物か。175～177は墨青。175は曲物の底板で、「舍」と読める。176は「・石」、177は「・三」か。178は直径が2.5cm～3.4cm、長さが4.2cmの樽の栓。179は直径が約7cmの曲物。側板は桜皮で対称位に留める。180は曲物の側板。181は長さが14cm、幅1.1cmの加工材で、把手か。上縁には2ヶ所に目釘孔がある。182は長さが16.4cmで、芯部に6mmほどの孔が貫通している。183はド駄で、長さ19.9cm、幅は5.4cm。齒は上辺が5.3cm、下辺が9.5cmの台形で、身に6mmほど差し込んで接着している。



97. 第3期の遺構配置図 (1/200)

6. 第3期の遺構

第3期としたこの時期は、調査区の中央部を東西にのびる石積みの護岸跡が「息の濱」の南西縁の汀線として機能していた16世紀末までの時期である。年表的に云えば、概ね室町時代後期から黒田長政が筑前に入府する江戸時代前夜までの長い期間であり、細かには更に幾期かに細分されよう。

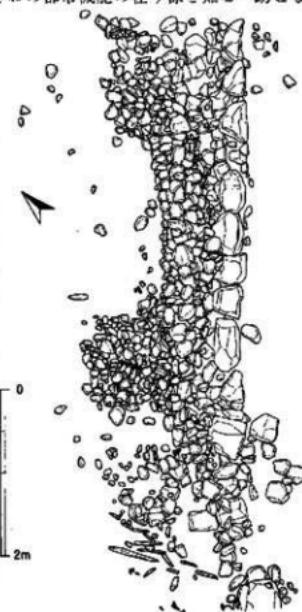
検出された遺構は、建物跡や土塙、溝などがある。このうち建物跡は、基礎石列をともなうものと柱穴の底に礎石を置いたものとがある。溝は雨落ち溝的で細く短いが、第3期の4号溝の旧溝は古く遡る可能性があり、護岸跡の内縁に沿って機能していた可能性も否定できない。分布的には、護岸跡の北側全域に拡がっているが、18世紀代の土塙が集中する中央部は希薄になる。また、この時期を象徴する護岸跡は、第89次調査区例と同じく堅牢なもので「息の濱」の南西縁の在り様を示している。同時にその内縁には矢板を伴った小規模な角杭列が数ヶ所にみられた。小規模な埋立てによって拡張する護岸跡構築以前の「息の濱」の一側面を窺い知ることができよう。

1). 建物跡

建物跡には、基礎石列を伴った大型の建物跡と素掘りの柱穴内に礎石を敷いた掘立柱建物跡とがある。基礎石列をもつ建物跡は1棟で、大きめの割石を基壇状に並べた堅牢な造りをしている。これに対して掘立柱建物跡は、柱穴内に扁平な円碟を敷いて礎石とした比較的簡便なもので3棟あるが、調査区外に拡がってまとまらない礎石を敷いた柱穴もあり、更に複数かがあるものと推察される。この基礎構造の相違は支える上屋の荷重に因るもので、建物の根本的な機能の差異に起因するものと考えられる。分布的には護岸跡に沿って拡がり、汀線に面した浜ぎわの都市機能の在り様を知る一助となるだろう。

89号建物跡 (98~100)

89号建物跡は、調査区の東端に位置する建物跡で、その中央には4号溝が流れている。建物跡は、堅固な基礎石列をもった東西棟で、桁行は現長で6mあり、調査区外にのびる面を加味すると4間以上ものになろう。梁行は南西の隅石を残して焼失している。基礎石列は、40cm~70cm大の花崗岩の割石を外側に面を揃えて横位に密着して据え並べ、その隙間に小さな角碟を詰めている。基底面は、扁平な割石や小碟を敷き詰めて安定させ、その上に基礎石を据えている。同様にして裏込めには割石や小碟を基礎石列に沿って70cm~80cmの幅で密に充填して固めている。この裏込め石は、西隅石から1.8mと5.4mを中心とした位置に100cm~120cmの幅で、梁筋に沿って帯状にのびており梁行筋の基礎石列と考えられる。これからすると、基礎石は桁行、梁行ともに外縁は大きな割石で堅固に焼き、内縁は小さめの碟石で造ったやや簡便な構造をしていたものと思われる。また、基礎石列の南側には護岸跡の集石群が接している。時期差が判然としないが、浜に面して機能した建物の可能性も否定できない。裏込め内から天目碗が出土している。



98, 89号建物跡実測図 (1/60)

103号建物跡 (101・102)

103号建物跡は、調査区北東部の4号溝の北岸にあり、104号建物跡のすぐ東に位置している。柱筋は明らかでないが、東西長が3.6mで、柱間は1.8mの2間である。南北長は1.6mの1間で調査区外に飛び、2間×2間以上の規模になろう。東側の柱には20cm～30cm大の扁平な礎石が敷かれている。

104号建物跡 (101・102)

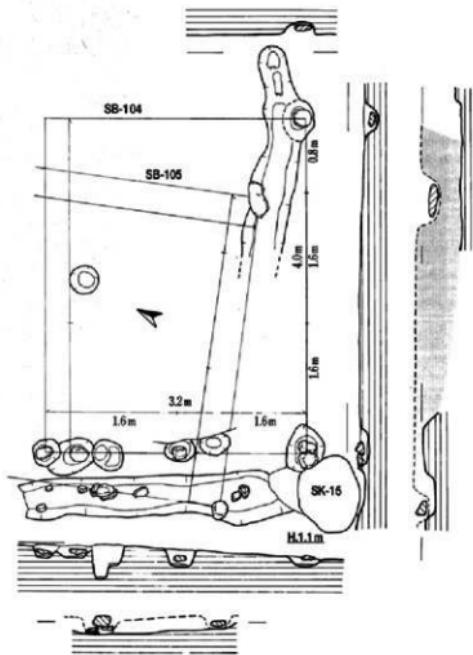
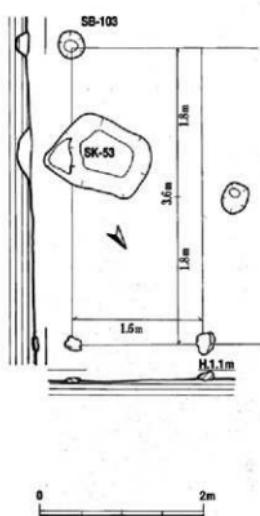
104号建物跡は、調査区の北東部に位置する3間×2間の東西棟の建物跡で、105号建物跡と重複して



99, 89号建物跡全景(南より)



100, 89号建物跡全景(東より)



101, 103号～105号建物跡実測図(1/60)



102, 103 号～105 号 建物跡 全景 (南より)

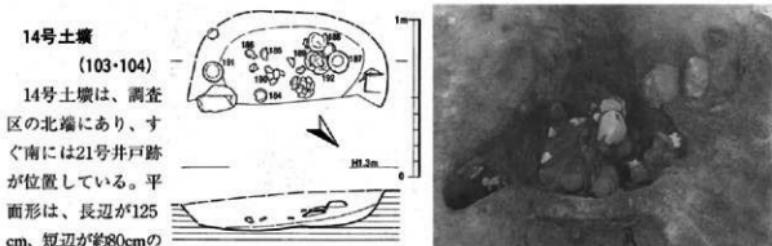
いる。桁行は全長が4mで、柱間は1.6m、1.6m、0.8mの3間にろう。梁行は全長が3.6mで、柱間は1.6mの2間である。柱穴内には、平石を敷いて礎石としている。

105号建物跡 (101・102)

105号建物跡は、調査区の北東部にあり、104号建物跡と重複している。柱筋は明らかでないが、東西長は3.8mで柱間は1.9mの2間にろう。南北長は1.4mの1間であるが調査区外にのびて2間×2間以上の規模になろうか。柱穴は消失しているが、63号溝の覆土上に平石を敷いて礎石としている。

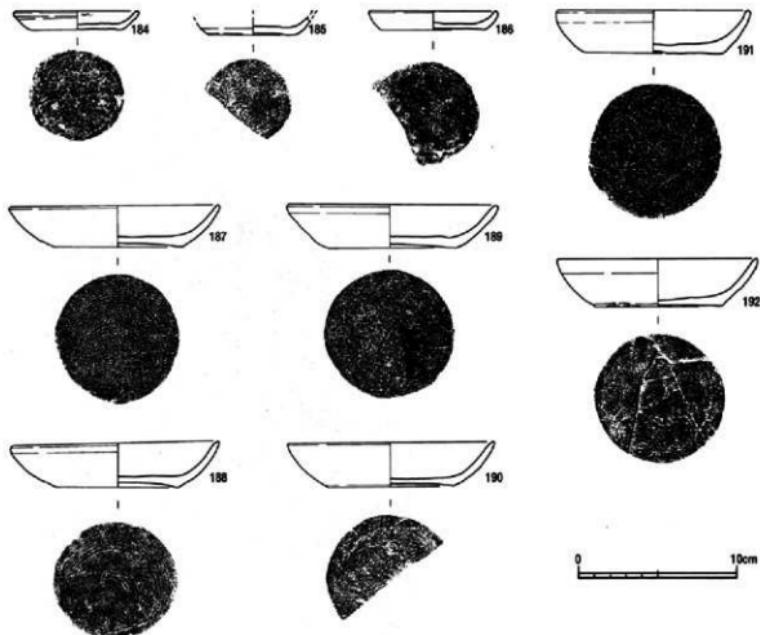
2). 土壌

第3期の土壤は、23基を検出した。平面的には、円形～椭円形プランのものと方形プランのものがあり、深さにも深浅の差がある。分布的には護岸跡の北側に抜がるが、傾向的には4号溝の南側はやや希薄で、街並みの北側にむかうほど濃くなる。また、機能的には土師皿等の「廃棄穴」である。



103, 104 号 土壌実測図 (1/30)

104, 10号 土壌全景 (西より)



105. 14号土壙出土遺物実測図 (1/3)

橢円形プランになろう。主軸方位はN-42°-Wにとる。壁面は緩やかに傾斜して立ち上がり、壁高は25cm。床面は凹レンズ状で、断面形は浅い舟底状をなす。覆土中から土師器壺と皿が出土した。

出土遺物 (105)

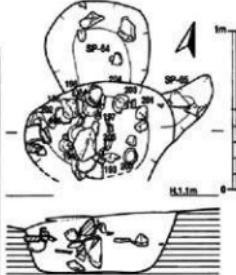
184~186は土師器小皿で、口径が7.9cm~8.5cm、器高は1.2cm~1.4cmである。187~192は土師器壺で、口径が12.5cm~13.4cm、器高が2.6cm~3cmと大きい。底部は回転糸切りである。

15号土壙 (106・107)

15号土壙は、調査区中央部の西端にある円形の土壙で、すぐ東には護岸跡に沿って4号溝が東西方向に流れている。平面形は、長辺が95cm、短辺が70cmを測る卵状の橢円形プランで、N-68°-Eに主軸方位をとる。壁面は急峻でストレートに立ち上がり、壁高は38



106. 15号土壙全景 (南より)



107. 15号土壙実測図 (1/30)

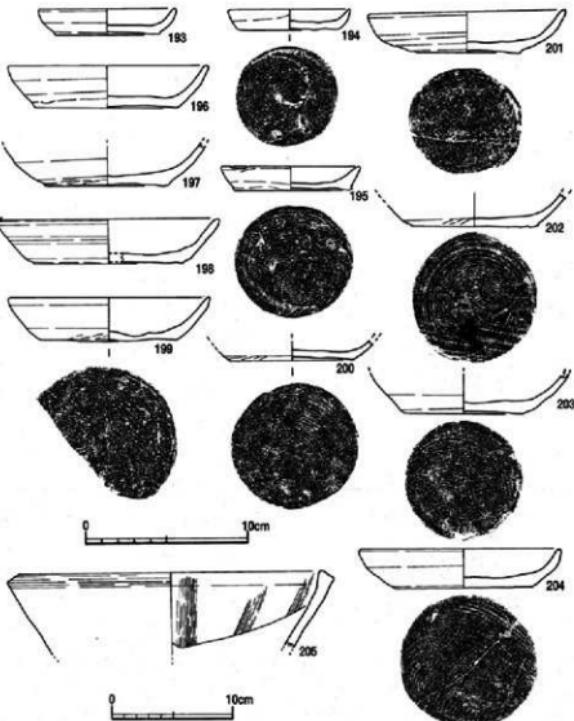
cmである。床面は平坦で、断面形は逆台形を呈する。茶～暗茶褐色の砂質土層の覆土中からは土器小皿や壺が出土している。また、遺構の上面から出土した人頭大の礫石は、北に隣接する礫石を敷いて礫石とした建物跡と関わりのある可能性もある。

出土遺物 (108)

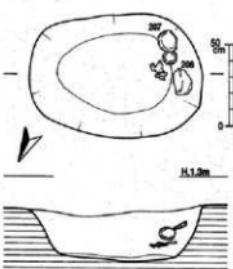
193～195は土器小皿で口径が7.8cm～8.8cm、器高は1.2cm～1.6cmで、小さいもの(194)と一回り大きいもの(193・195)がある。196～204は土器壺で口径12.4cm～13.8cm、器高は2.4cm～2.8cm。底部は回転糸切りによるが202には板目痕が残る。205は鉄軸の陶器摺鉢で口径は26.8cm。摺目は11本が1単位。

16号土壙 (109・110)

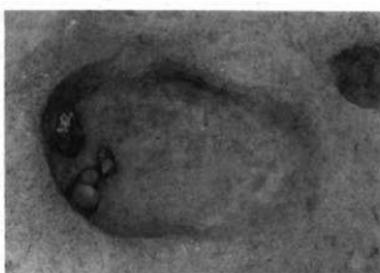
16号土壙は、調査区の西部にある小型の土壙で、東へ2.5mの距離には15号土壙が位置している。平面形は、長辺が106cm、短辺が75cmの楕円形プランを呈し、主軸方位をN-62°-Eにとる。床面までの深さは35cmで、壁面は緩やかに傾斜して立ち上がる。床面には小さな凹みがあるが全体に平坦である。西側の小口壁際には扁平な礫石があり、周辺か



108. 15号土壤出土遺物実測図 (1/3・1/4)



109. 16号土壤実測図 (1/30)



110. 16号土壤全景 (南より)

らは土師器小皿と壺が出土している。

出土遺物 (111)

206は口径8.2cm、器高が1.2cmの土師器小皿である。207は土師器壺で口径13cm、器高は2.9cm。底部は回転糸切りである。

17号土壙 (112・113)

17号土壙は、調査区の西端に位置する大型の土壙で、東へ4mの距離には16号土壙がある。土壙は、そのほとんどが調査区外にあるために全容は明らかでないが、径が2.3m～2.8mの円形か隅丸の方形プランになろう。深さは南壁際で40cm、最深部で53cmある。壁面は緩やかに立ち上がり、断面形は浅い舟底状をなそう。西壁際から土師器の小皿と壺がまとまって出土した。

出土遺物 (114)

208～213は口径が7.4cm～8cm、器高が1.2cm～1.6cmの土師器小皿である。214は口径が13.4cm、器高が2.8cmの土師器壺。底部には回転糸切りで板目痕がある。215は景德鎮窯の染付皿で、見込には十字状の花文を描いている。

20号土壙 (115・116)

20号土壙は、調査区の南西端にある土壙で、19号土壙のすぐ西に位置している。平面形は、南北長が約120cmの方形のプランをなそう。主軸方位はN-42°-Wにとる。壁面は緩やかに立ち上がり、上面からは土師器小皿や壺が出土した。

出土遺物 (117)

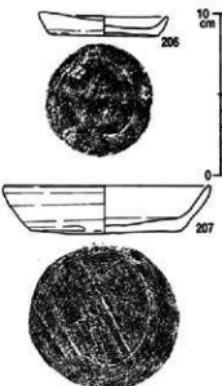
216-217は口径が6.8cm～7.6cm、器高が1.6cm～1.7cmの土師器小皿である。218-219は土師器壺で口径は12cm～12.5cm、器高は2.7cm～2.9cm。220は底径が16.4cmの陶器壺である。胎土は赤紫色で内外ともに暗緑色の釉薬を掛けている。底部には貝目痕がある。

28号土壙 (97)

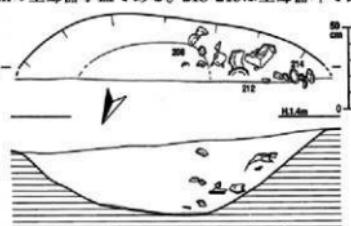
28号土壙は、調査区西端の護岸路上縁にあり、20号土壙のすぐ東に位置している。平面形は長辺が85cm、短辺が60cmの橢円形プランを呈する。深さは15cmで、壁面は緩やかに立ち上がる。断面形は浅い舟底状をなしている。遺物は土師皿と土鍋片や陶器片が出土している。

31号土壙 (97)

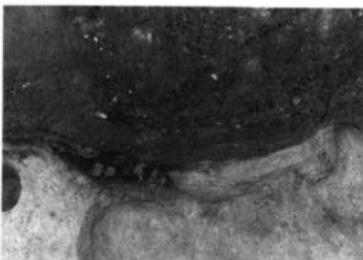
31号土壙は、調査区の西部にあり、南東には99号土壙が隣接している。平面形は115cm～125cmの隅丸方形プランをなし、床面までの深さは27cmである。壁面は緩やかに立ち上がり、逆台形の断面形をしている。遺物は土師皿のみが出土した。



111. 16号土壙出土遺物実測図 (1/30)



112. 17号土壙実測図 (1/30)



113. 17号土壙全景 (南より)

3 8号土壙 (97)

調査区の西部に位置する円形の土壙で、39号土壙より新しく37号土壙よりも古い。平面形は短辺が80cmの楕円形で、長辺は110cmほどになろう。壁高は14cmで、断面形は浅い逆台形をなす。土師皿が出土した。

3 9号土壙 (97)

調査区の西部に位置する小型の土壙で、西壁は38号土壙に切られている。平面形は110cm~120cmの方形をなし、深さは37cm。高麗青磁皿や摺鉢、土師皿が出土している。

5 0号土壙 (97)

調査区中央部の4号溝の南岸にあり、西壁は47号溝に切られている。平面形は長辺が110cm、短辺が80cmの不整な楕円形を呈する。遺物は土師皿片と陶器器片が小量出土している。

5 1号土壙 (97)

51号土壙は、調査区東部の護岸跡上線にあり、87号土壙の東に隣接している。平面形は長辺が110cm、短辺が100cmの方形プランをなす。壁高は20cmで、断面形は逆台形をしている。覆土中からは土師皿や鉢、土鍋片が出土している。

6 8号土壙 (97)

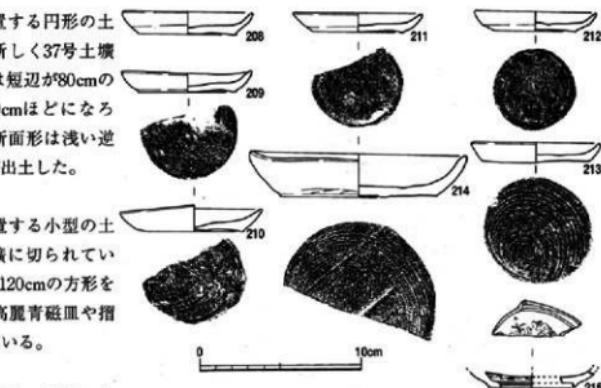
調査区北辺の中程にある方形の土壙で、一辺が110cmほどになろう。断面形は逆台形で、壁高は36cm。遺物は土師皿のみが出土した。

7 5号土壙 (97)

調査区北辺の西寄りにあり、98号土壙の上面に掘り込まれている。長辺が100cm、短辺が70cmの不整楕円形プランを呈する。遺物は土師皿や瓦質鉢、青磁片が出土している。

7 7号土壙 (97)

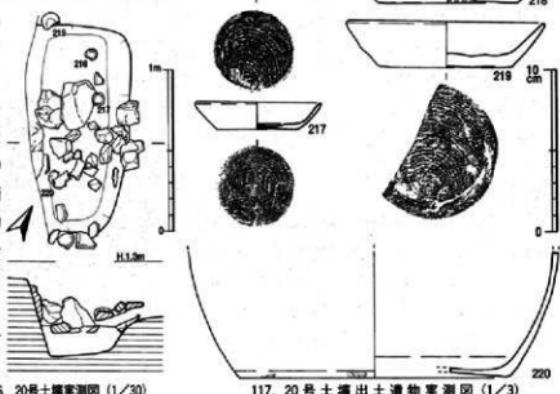
調査区の北西端に位置する隅丸長方形の土壙で、短



114. 17号土壙出土遺物実測図(1/3)

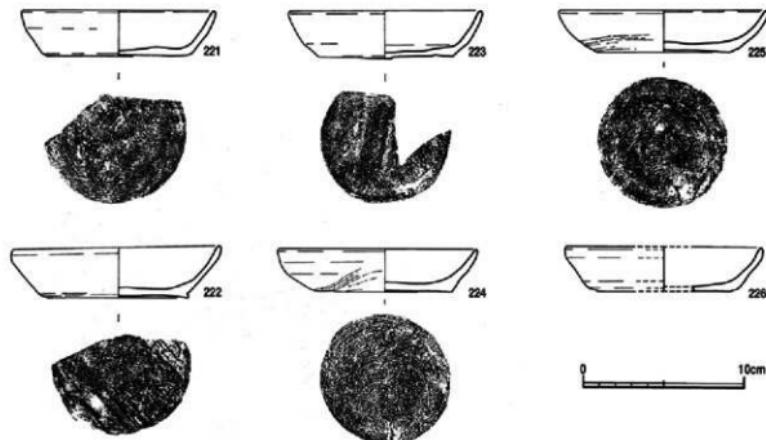


115. 20号土壙全景(東より)



116. 20号土壙実測図(1/30)

117. 20号土壙出土遺物実測図(1/3)



118. 85号土壌出土遺物実測図 (1/3)

辺は140cm。長辺は180cmほどになろう。壁高は21cmと浅く、断面形は逆台形をなす。98号土壌よりも新しい。遺物は土師皿や瓦質の鉢が出土している。

85号土壌 (97)

85号土壌は、調査区西北部の4号溝北岸にある小型の土壌で、84号土壌の西隣に位置している。平面形は一辺が約90cmの方形プランを呈する。壁面は緩やかに立ち上がり、断面形は逆台形をなす。壁高は18cmと浅い。遺物は土師皿のみが出土している。

出土遺物 (118)

221～226は口径11.8cm～12.5cm、器高が2.6cm～3.2cm土師器杯である。底径は8.2cm～8.6cmであるが224は7.1cmと小さい。体部は内弯ぎみに立ち上がる。底部は糸切りであるが、222には板目圧痕が残る。内面はヨコナデ～ナデ調整。

88号土壌 (119)

88号土壌は、調査区の東部にあり、89号建物跡よりも新しく4号溝よりも古い。平面形は長辺が51.5cm、短辺が25.0cmの大型の梢円形プランをなす。壁面は緩やかに立ち上がり、深さは40cm～50cm。覆土は灰黒色の腐食物質土で、多量の下駄や箸等の木製品のほかに青磁皿や瀬戸美濃焼器、土師皿、獸骨片が出土した。

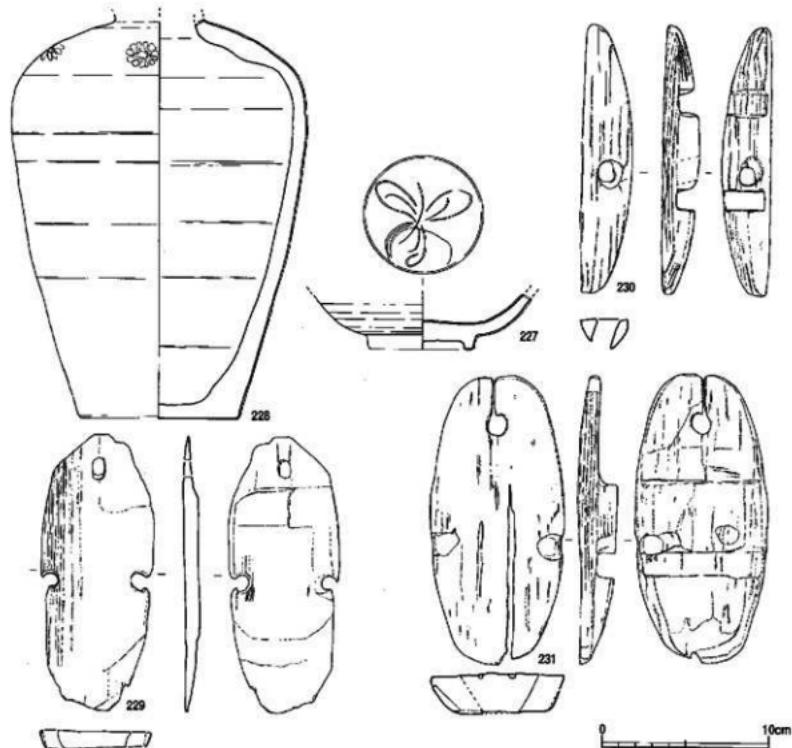
出土遺物 (120・121)

227は龍泉窯系の蓮花枝折文青磁皿で、高台径は6.2cm、高台は豊付から露胎。228は瀬戸瓶子の三耳壺で、底径が9.4cm。灰釉掛けの肩部には菊花を施文している。13世紀～14世紀代。

229～231は差込み式の下駄である。梢円形で爪先と側縁に花緒孔がある。231は長さが23cm、



119. 88号土壌全景 (西より)



120. 88号土壤出土遺物実測図 (1/3)

幅は10.6cm、厚さは3.2cmである。断面形は側縁が膨らむ逆台形をなす。

94号土壤 (97)

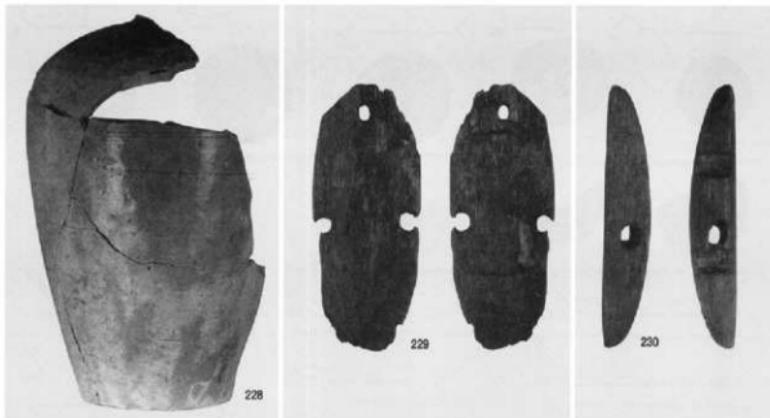
調査区の中央部北寄りにあり、南壁は4号溝に切られて消失している。平面形は短辺が175cmで、長辺が220cmほどの長方形プランをなそう。壁高は53cmで、壁面は急峻に立ち上がる。床面は中央部が浅く凹む舟底状の断面形をなす。覆土は灰褐色の粘砂土で、上師皿や土鍋、甕等が出土している。

95号土壤 (97)

調査区西北部の84号上塙の東壁下にあり、南壁は4号溝に切られている。平面形は長辺が140cm、短辺が105cmの楕円形プランをなす。壁面は深さ47cmで急峻に立ち上がり、床面は凹レンズ状をなす覆土中からは土師等や瓦質鉢片が出土している。

98号土壤 (122・123)

98号土壤は、調査区の西端に位置する土壤で、77号土壤の下層面に掘り込まれている。南西側には17号上塙が隣接している。平面形は、長辺が120cm、短辺が110cmの円形に近い隅丸方形プランで、主軸方位をN-36°-Wとする。壁面は緩やかに立ち上がり、壁高は45cmを測る。床面は浅い凹レンズ



121. 88号土壙出土遺物 (1/3)

状をなし、断面形は逆台形を呈する。覆土は暗茶褐色砂で、壙内からは土師器の小皿や壺がまとまって出土している。

出土遺物 (124)

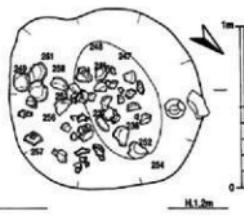
232~241は土師器小皿で口径は7.8cm~8.5cm、器高は1.2cm~1.5cmである。242~258は土師器壺である。口径が11.7cm~13cmと小さめのものと13.8cm~16.4cmの大きめのものがある。器高は2.6cm~3.4cmである。底部は回転糸切りで、258には板目圧痕が付いている。内面は体部がヨコナデ、底部がナデ調整。259~260は瓦質の片口鉢である。内面はハケ目、外面はハケ目後にナデ調整している。

99号土壙 (97)

調査区西部の護岸上縁にある小型の土壙で、31号土壙のすぐ東に位置している。平面プランは長辺が145cmの梢円形で、短辺は120cmほどになろう。覆土上層には掌大の円礫の集石があり、その上面には炭片や灰が薄く層状に堆積していた。遺物は高麗象眼皿と土師皿が出土している。

出土遺物 (125)

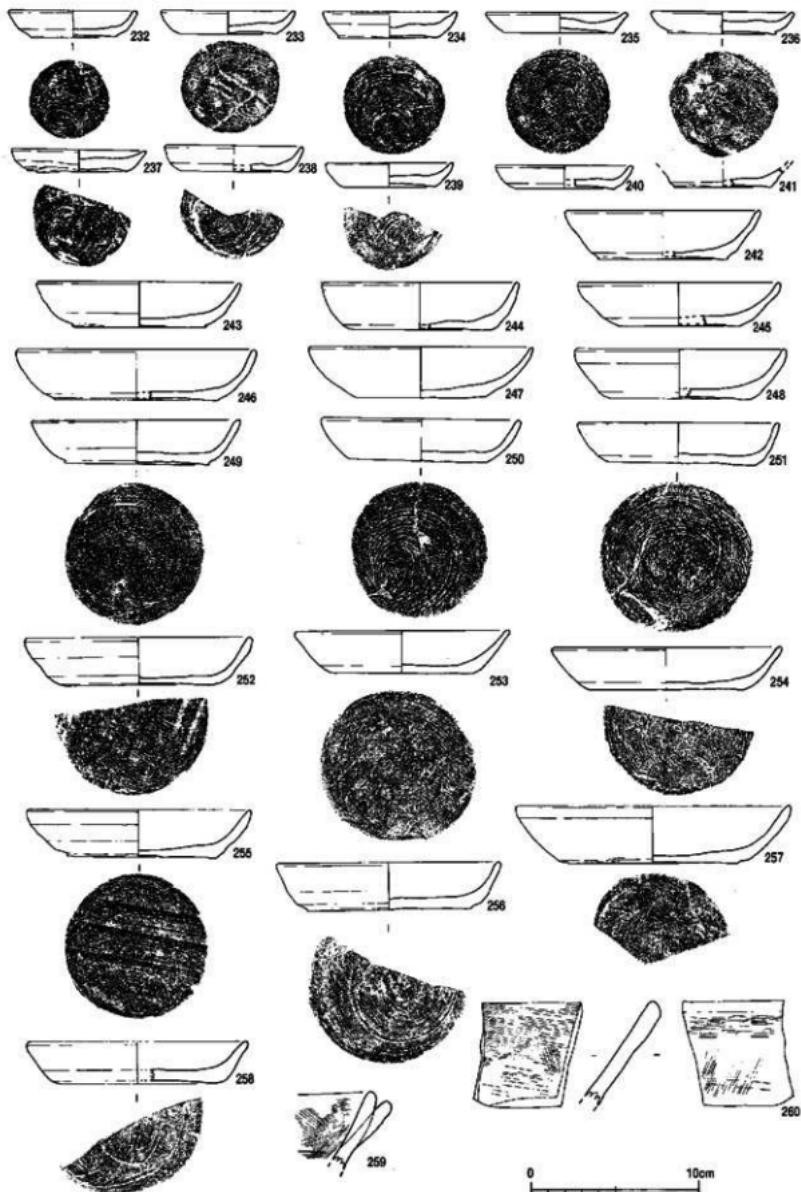
261は高麗陶器の象眼雲花皿で口径は19.6cm、器高は6.9cm、高台径は5.4cmである。高台内には細かい砂粒が付着している。13世紀~14世紀前半のもの。



122. 98号土壙実測図 (1/30)



123. 98号土壙全景 (東より)



124. 98号土壤出土遺物実測図(1/3)

3). 護岸跡

96次調査区は、中央部を境として地形的に南北で大きく異なる。その北半部は、「息の濱」の南西縁にあたる室町時代末頃の砂丘面が拡がり、南半部には博多川から湾入する浅い入海が拡がっている。この汀線に沿って堅固な石積みの護岸施設が築かれていた。この石積みの護岸跡は、砂丘の緩斜面が浜底へと移行するその変換線上に縱が30cm~40cm、横が50cm~80cmの大きめの割石や転石をていねいに横に据えて基礎石としている。次に、この基礎石列の上縁に20cm~30cm大の転石や礫石を砂丘の傾斜面に沿って石垣状に隙間なく敷き並べている。この礫石群上には砂土層が集石群を覆うように、上縁側から基礎石列を越えて凹レンズ状に堆積していた。更に、この砂土層上には拳大~人頭大の礫石を密に敷き重ねる二層的な構造をなしている。

礫石層を厚くすることで護岸の強度をより堅固に補強したものと考えられる。また、護岸石の内側には角杭列が東西や南北方向にのびており、石組護岸跡の構築以前に簡便な砂留めの護岸があったものと推察される。護岸石上からは土師皿や陶磁器、漆器、下駄等が出土している。上層は埋立て整地層の搅乱で18世紀代の陶磁器が混入しているが、基本的には17世紀初頭頃まで機能していたと考えられる。



125. 99号土壤出土遺物実測図(1/3)



126. 護岸跡全景(北より)

• 杭



127. 推岸跡実測図 (1/150)



128. 護岸跡石組上面全景（西より）



129. 護岸跡石組上面全景（南より）



130. 護岸跡石組基礎石全景（南より）



131. 護岸跡石組基礎石全景（南より）



132. 護岸跡石組基礎石全景（南より）



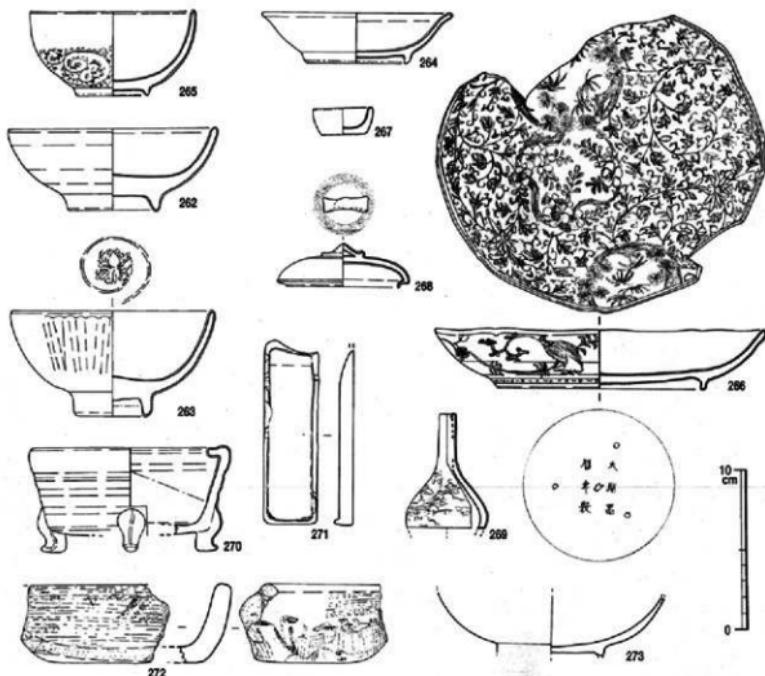
133. 護岸跡石組基礎石全景（西より）



134. 護岸跡石組断面（東より）



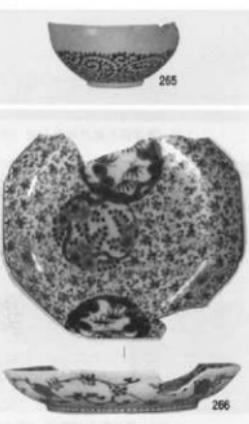
135. 護岸跡内側の杭列（南西より）



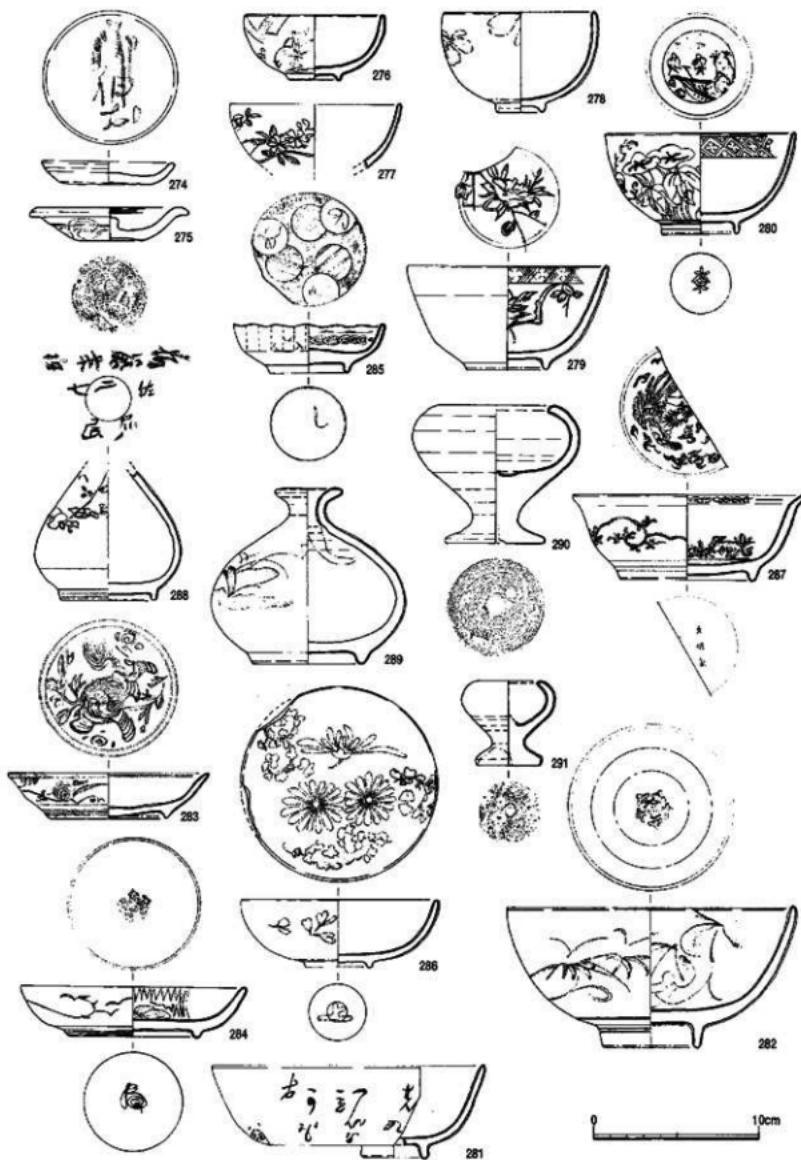
136. 藤岸跡出土遺物実測図 (1/3)

出土遺物 (136・137)

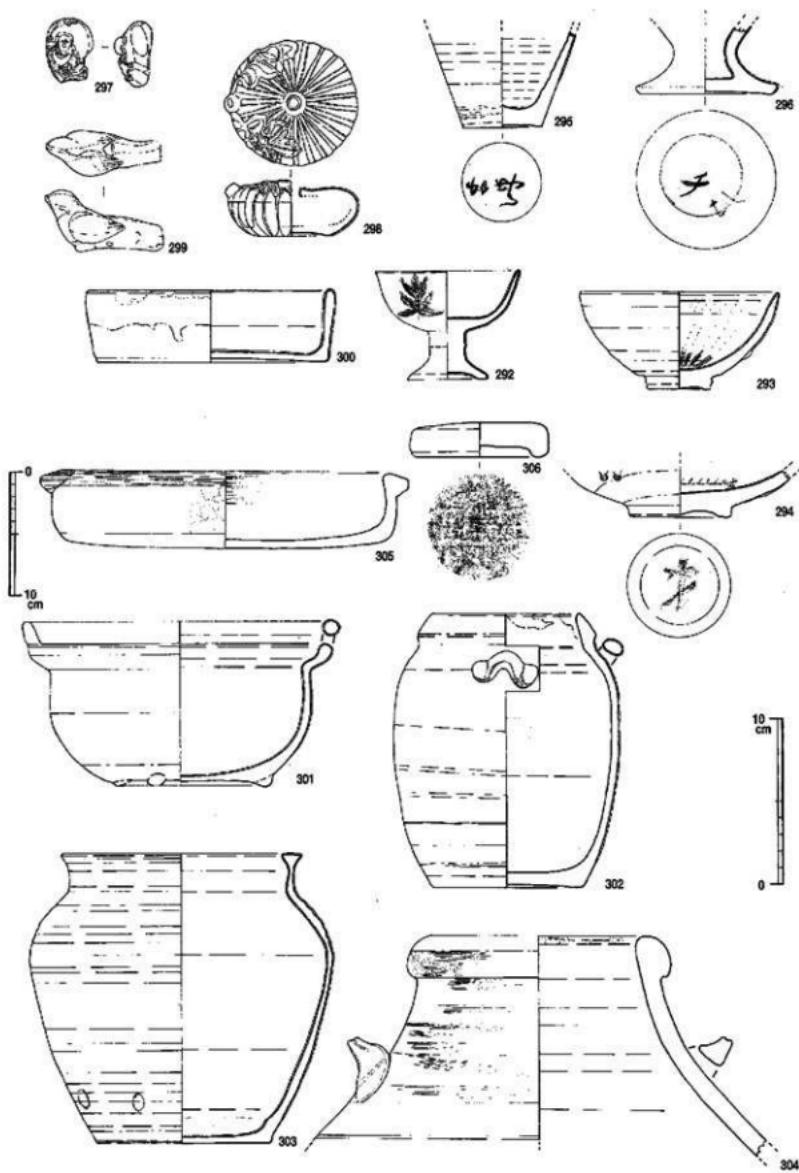
262は口径12.6cm、器高5cmの粗製の青磁碗。見込に圓線があり、高台内は無釉。263は劍先進弁文の龍泉窯青磁碗。口径12.2cm、器高は6.4cm。見込に陽刻蓮花文がある。高台内は無釉。15世紀中葉～16世紀前半。264は景德鎮窯の白磁皿で口径11.6cm、器高3.1cm。16世紀。265は靖唐草文の肥前染付碗。口径10cm、器高は5.2cm。266は肥前有田窯の染付八角形大皿で口径20cm、器高は3.6cm。見込には牡丹唐草文に意絵で松竹梅を描いている。高台内には「大明萬曆年製」の銘と4ヶ所にハリ支え痕がある。18世紀前半。267は関西系の柿釉ミニチュア陶器で、口径は3.6cm。268は口径6.6cm、器高が2.6cmの肥前染付蓋。269は染付鶴首瓶のミニチュアで、口径1cm。呉須で松竹梅文を描く。18世紀前半～中葉。270は17世紀後半の肥前青磁香炉。口径11.8cm、器高6.3cm。271は長さ11.3cm、幅が3.3cmの硯。272は墨書の瓦質盤。273は赤漆塗りの椀で、高台内は黒漆塗り。



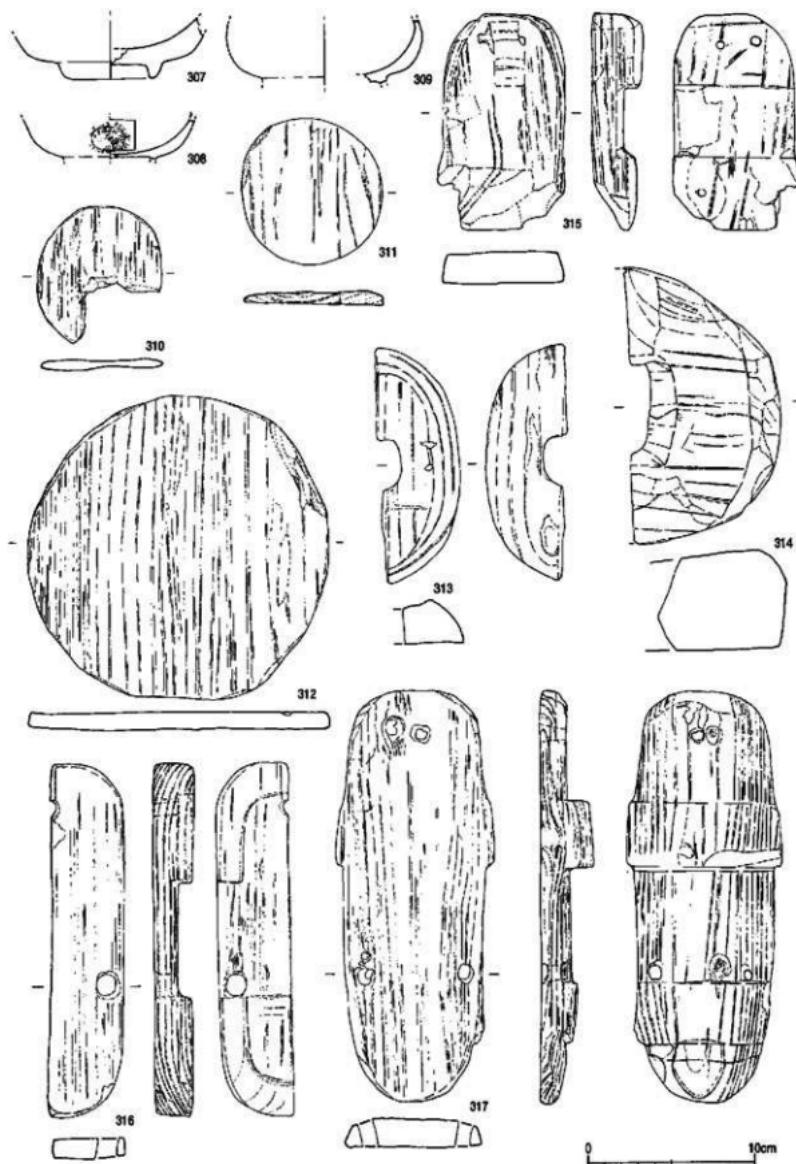
137. 藤岸跡出土遺物 (1/4)



138. 包含層出土遺物実測図 1 (1/3)



139. 包含層出土遺物実測図 2 (1/3・1/4)

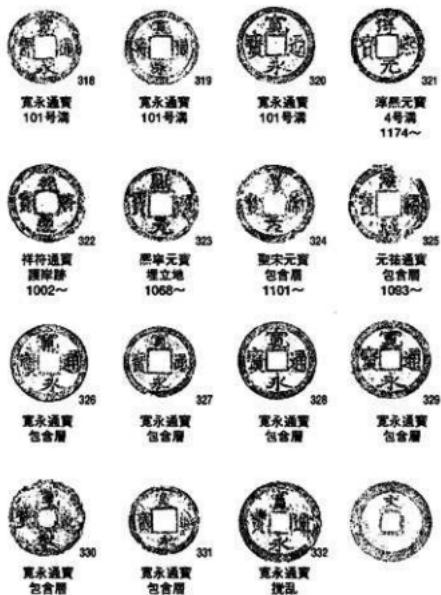


140. 包含層出土遺物實測圖 3 (1/3)

6. 包含層の遺物

274は口径7.9cmの土師皿で、「御神前」の墨書がある。275は蓋内に墨書がある。276は有田窯の色絵碗で口径8.2cm。唐人と草花文を描く。18世紀後半。277は18世紀前半の有田窯の花流水文色絵碗で、口径10cm。278は京焼風の色絵陶器碗で、口径9.4cm。三日月高台は無釉。18世紀中葉～末。279は有田窯の外青磁染付蓋付碗で口径11.8cm、器高は6.2cm。見込には呉須で枝折文を描く。窯出し時の焼きキズを色絵で焼継いでいる。高台内には渦福鉢がある。18世紀前半。280は朝顔文の染付碗で口径11.4cm、器高は6.1cm。見込には山水と人物、高台内には昆虫文を描いている。18世紀後半。281は1810～60年代の染付碗で、口径は10.6cm。282は肥前波佐見窯の蔓草文染付鉢で、口径17.4cm、器高は8.5cm。見込には蛇の目釉剥ぎに五弁花のコンニャク印判がある。18世紀前半～中葉。283は16世紀前半～中葉の景徳鎮窯染付皿。口径11.8cm、器高は2.7cm。見込には玉取り獅子文を描く。284は一重綱目文染付皿で、胴部には唐草文を描く。見込には五弁花のコンニャク印判、高台内には渦福文がある。口径13.4cm、器高は3cm。18世紀前半～中葉。285は鰐文の輪花形染付手塩皿。見込には6つの窓繪と焼継痕がある。口径9cm、器高は3cmで、1820～60年代。286は関西系の菊唐草文色絵陶器皿で、口径11.7cm、器高は4cm。口縁で高台内には釉薬で「上」と描く。17世紀末～18世紀前半。287は有田南河原窯の染付小鉢の秀品。見込には鳳凰に唐草文、口縁部には波涛文を描く。高台内に「大明成化年製」銘がある。口径13.6cm、器高は5cm。1670～90年代。288は17世紀末～18世紀前半の染付瓶で、内底に墨書がある。289は草花文の肥前染付瓶で、蓋付は無釉。口径は4cm、器高は10.5cm。17世紀後半～18世紀前半。290は在地系の鉄釉陶器灯火具。18世紀～19世紀。291は肥前陶器の鉢軸乗燭で、器高5.1cm。292は口径8.4cm、器高6.4cmの肥前磁器仏飯具。若松文を描き、蓋付は無釉。293は口径11.8cmの天目碗。294は肥前陶器の鉄絵皿。高台内に「才」銘がある。1590～1610年代。295は墨書の陶器小壺。296は陶器仏花瓶で底面にチャッ痕。297は磁器模付。298は型押成形の陶器水滴。299は土師質の鳩笛。300は口径14.8cmの陶器斐翫。鉄釉に灰釉を重掛けしている。17世紀後半～18世紀。301は関西系の陶器両手鍋。甚筋底で見込にハリ支え痕がある。302は陶器二耳壺。303は在地の鉄釉陶器壺で、口径14.4cm。18～19世紀。304は荒焼の沖縄鉄釉壺で口径12.6cm。18世紀末～19世紀。305は口径27.4cmの土師質盤。306は口径8.2cmの焼塗壺の蓋。307～309は漆器椀。308は黒漆地に赤漆で家紋様の絵柄を描く。310～312は柾目取りの曲物の底板。311には目釘がある。313～314は有孔の加工材。315～317は下駄。317は刺り貫き式で長さ24.2cm。

324は「聖宋元寶」、325は「元祐通寶」。



141. 銅鏡拓影 (2/3)

III. おわりに

第96次調査区では、中世末から近世の遺構や遺物を検出した。しかし、第89次調査区とでは、通りを一筋隔てただけで時空間的な景観に幾許かの違いがある。ここでは確認された事実を簡単に整理して、両調査区の占地する下川端地区の景観について若干の復原を試み、今後の調査の糧としたい。

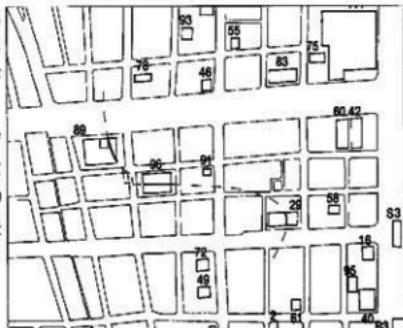
中世から近世にかけての下川端地区は、入海の埋立てと「博多大水道」の建設を転機として大きく三つに分けられる。はじめは護岸の築造によって港湾都市として活発に機能していた時代。次は入海の埋立てによって護岸と港が機能を失い、都市的発展を遂げる時代。そして「博多大水道」の開削によつて全城が都市化する時代である。

はじめに、89次調査区から続く16世紀後半代の石積み護岸跡の検出は、「息濱」南西線の汀線を一層明らかにした。構造的には汀線に沿って基礎石を並べ、その上に転石や礫石を砂丘面に張付ける様にして積み重ねている。更に、その上面に小さな凹縛や角縛を覆い被せて堅固なものとし、波頭の浸食から「息濱」の汀と街並を守っている。この護岸跡が89次調査区の護岸跡へ繋がることは容易に推察できる。ところが89次調査区の護岸跡が弧を描いて東へのびているのに対して、本調査区の護岸跡は直線的に東から西へのび、両調査区の護岸線の復原には幾許かの不合理さがある。一方、89次調査区の護岸跡の北西端には護岸の基礎石上に壁体を築き、前面の海底に石疊状の平石を敷き並べた舟着き場的な施設が付設されていた。これらを勘査すると西へのびた護岸跡は、北へ矩形に屈曲して弧状の護岸跡へ繋がっていたのではないか。そしてこの矩形の空間には、89次調査区と同様の舟着き場的な施設の存在が想起される。位置的には「息濱」の南西線に抜がる入海の湾入口にあたり、風波の穏やかな内湾の護岸沿いに駒舟の荷揚げ場があったと考えるのがより合理的ではなかろうか。なお、東は湾奥で第29次調査の石枕列へと繋がり、冷泉を経て再び博多川へのびるものであろう。

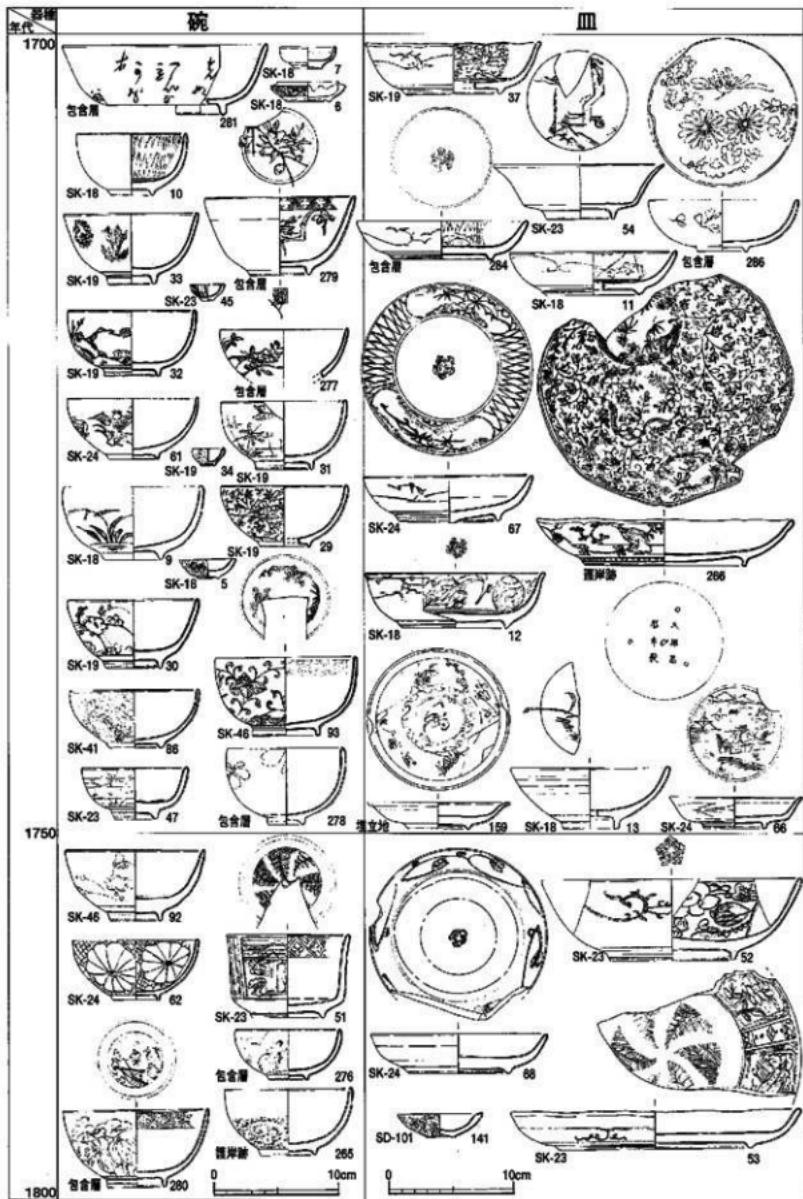
「息濱」の町割は天正12年の太閤町割を基本としている。この太閤町割は地形的に制約された中世博多の街区を、古小路町を中軸にして長方形街区と短冊型地割りとで整然と区切るが、この町割の西限は洲崎町から十居町流れまでで、「息濱」南西線の下川端地区には及んでいない。綱場町から掛町、麹屋番と続く弧状的道路は、この町割の規制から外れた護岸の堤壙に沿って自然発生的にできた道路と考えられる。これが後の唐津街道で、明や朝鮮からの積み荷で賑わう貿易港の活気が彷彿される。

次の17世紀初頭には、「息濱」と「博多濱」間の湿地が藩政府によって埋立てられる。この時点で石積護岸跡と舟着き場は機能を喪失し、掛町筋から麹屋番の「息濱」南西域に生じた新たな都市空間には橋口町、川端町、片土居町等の街区が生まれ都市化する。しかし、埋立て後の両地区には大きな差異がある。89次調査区では17世紀代の遺物や遺構が多いが、96次調査区はこの時期のものが少ない。これは埋立地の土質が89次調査区は透水質の粗砂土層であり、96次調査区は吸湿性の高い水性堆積土層に因ると考えられる。つまり水捌けの良い89次調査区は早くから居住街区化するが、96次調査区は未開発状態にあったと思われる。ところがこの利水の劣悪さが「博多大水道」の築造に繋がる。

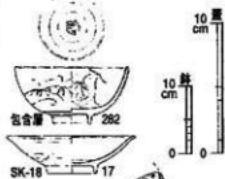
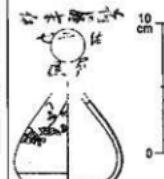
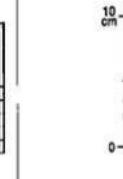
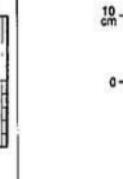
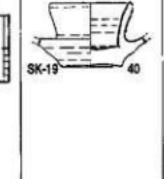
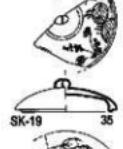
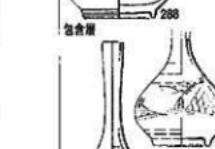
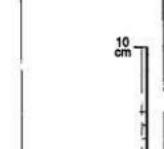
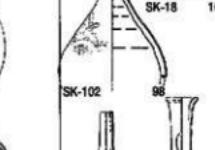
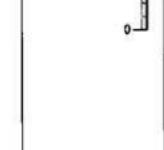
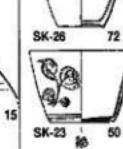
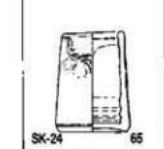
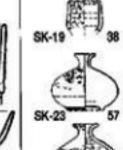
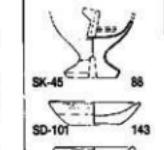
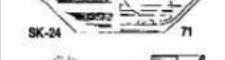
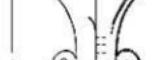
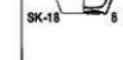
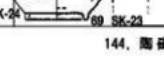
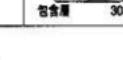
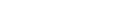
「博多大水道」は石堂川沿いの蓮池町から西町、土居町、川端町を経て博多川へ注いでいる幅1間



142. 護岸跡復原推定図



143. 陶磁器編年表1

| 鉢・蓋 | 花瓶 | 香炉・仏壇器・小杯 | 壺 | 掻鉢・灯火具 |
|--|--|--|--|--|
|  |  |  |  |  |
|  |  |  |  |  |
|  |  |  |  |  |
|  |  |  |  |  |
|  |  |  |  |  |
|  SK-23 |  SK-102 |  SK-24 |  SK-19 |  SK-19 |
|  SK-24 |  SK-18 |  SK-24 |  SK-19 |  SK-19 |
|  SK-24 |  SK-18 |  SK-24 |  SK-19 |  SK-19 |
|  SK-24 |  SK-18 |  SK-24 |  SK-19 |  SK-19 |
|  SK-24 |  SK-18 |  SK-24 |  SK-19 |  SK-19 |
|  SK-24 |  SK-18 |  SK-24 |  SK-19 |  SK-19 |
|  SK-24 |  SK-18 |  SK-24 |  SK-19 |  SK-19 |
|  SK-24 |  SK-18 |  SK-24 |  SK-19 |  SK-19 |
|  SK-24 |  SK-18 |  SK-24 |  SK-19 |  SK-19 |
|  SK-24 |  SK-18 |  SK-24 |  SK-19 |  SK-19 |

144. 商磁器編年表2

の下水溝である。築造時期は定かでないが、宝永2(1705)年の『筑湯記』には「川端町に織き溝川あり。…石堂川に入る。」とある。ところが元禄12(1699)年の福岡博多古図には土居町辺りまでしか描かれておらず、この数年間に開削築造を求めることができよう。ただし溝底からは17世紀中頃を遡る遺物は出土していない。この下水道の築造を機として「博多大水道」を挟んだ街区の都市化が進む。18世紀代の造構や遺物が急増するのもこれを裏付けている。また、下水溝の石壁の屈曲は位置的に掛町筋とほぼ合致し、築造時から町筋を意図した都市計画の基に開削された可能性も十分に考えられる。

次に、造構内からは多量の肥前陶器が出土している。伊万里焼と呼ばれる肥前磁器の始まりは16世紀の初頭とされ、それが日本の染付の歴史でもある。肥前磁器は鍋島藩の窯場の整理統合を経て16世紀の中頃には生産量が急増する。これは世界的な染付生産地の景德鎮窯等が明らか清への王朝の交替に伴う混亂で磁器の輸出が止まり、結果として肥前磁器はアジアやヨーロッパへの輸出が拡大し、同時に日本国内でも中国磁器に代って全国に流通するようになる。これは藩への運上銀の急増でも裏付けられる。17世紀中葉のこの時期には赤絵の創始をはじめ窯詰め法や道具等の中国的技术の導入によって朝鮮的な要素が薄れゆく。はじめは中国磁器を手本として意匠的に中国の影響を受けながらも次第に日本の作風が色濃くなる。肥前磁器はこの技術革新と海外輸出の展開による需要増大の相乗効果によってより洗練された意匠と技術を生み出す。ところが中国の政情安定に伴って海外市場を失い、国内市场での分業化が始まる。18世紀以降の「くらわんか碗」に代表される日常食器の飛躍的な増加はこれに起因する。19世紀には各地で磁器生産が活発化し、国内市场の独占に陰りが見える。

博多では地理的な条件から早い段階で肥前磁器が流入しているが秀品が少ない。18世紀には量的、器種的にも増加し色絵等の秀品も出土するが、江戸や大阪等の大消費地とは異なる要素をもつ。大消費地への輸送に就前商人が大きく介在していたことに因るものであろう。

肥前磁器の編年は、大橋康二氏の研究に詳しく述べる余地がない。下川端地区から出土した肥前磁器は泥文によって年代幅が広いために消費地遺跡の編年には無理があり、大橋氏の編年を基に表を作成した。第89次調査区と合わせて17世紀～18世紀を概観し、特徴的要素を列挙するに留めた。

- I. 17世紀前半(1610～1650)
 - 器皿が手で高台臺付の旅船を省く 宝塗法が目印種み 線は1線高脚足が多い
 - 瓦に滑落皿が出現 三鳥手、二彩手、落落落としが始まる 鉄馬(1640～)
 - 上繪付技法が始まる 手切り刷毛の運び成形法が出現
 - 文様：円彫紋、波紋(火炎花、唐草、唐模、桔梗)、動物文(櫛 鶴)
- II. 17世紀後半(1650～1690)
 - 薄くシャープな舟形が一般化 製品に滑船の船形が多形な遊鑑を作り出す
 - 窯詰め法に手捺す技法を創始(1650～) 窯詰めにチャックを採用(～17c)
 - 上繪付技法に金銀焼けを採用(1655～57) 京焼風が特徴的の品目として出現(1660～18c初頭)
 - 文様：京焼風は山水文、波瀬文が多い
 - 一型刷毛文、寛政文(1660～70) 寛永焼花唐草文(1680～90年代)
 - 旅款を施文 「人明治化乍製」(喜末) 「大明」(～17c) 「大明成化」(～17c) 「化年製」(17c)
 - 「大明年製」(17c～18c) 「宣明年製」(1670～90) 「押」(1680頃同一化)
 - 一方形神に虫形字を朱文したものが出現
- III. 18世紀前半(1690～1780)
 - コンニャク印刷や墨絵(墨が透けし感)一文種が目立つ 空上手唐津や刷毛口碗が盛行
 - 外青磁内朱彩輪が出現 全羅手の色絵磁器 舟の目四形高台の出現
 - 素付碗の出現(18c中葉～) 旅箱(～1775)
 - 文様：五介花文(1690～18c) 梅竹梅月形文(18c～) 雨降り文 たこ唐草文(1690～)
 - 二重網口文、交叉文にハート唐草文が盛行
 - 白化断手に象、鳥、蝶類をねじて巻、萬葉、木の葉、紫陽花、椿、光、雷文を描く
 - 一方形神に「福」の草書体(1690～18c前) 「大明萬曆年製」(1680～) 「萬曆長春」(18c～)
 - 「太明成化年製」(17c～18c) 「或化年製」(18c～19c前半)
- IV. 18世紀後半(1780～1860)
 - 素付弓は東洋や複反形の既行(18c中葉～) 烧削(1789～明治)
 - 見足に絞の日輪羽羽 素焼きに色鉛の上書きも出現
 - 羽子板等を描いた滑手の色絵碗
 - 壓印成形の「底紅里」
 - 文様：祥瑞 美菫手 忠臣蔵文が多い
 - 幕之内(1770～90) 布化款らし文 黒氏香文(18c後半のみ)
 - 「大明年製」の変形版(18c中葉～後半) 「廻經」の変化版(18c後半のみ)

漆器の漆膜構造分析について

吉田古生物研究所

博多遺跡群第96次調査出土の漆器について漆膜構造を顕微鏡で観察した。

試料

試料総数は5点(表)。顕微鏡観察にあたり、漆器の小破片をエポキシ樹脂に包埋し、研磨して薄片に仕上げた標本を観察した。

結果

観察結果を表に示す。(aは内面、bは外面を示す)。観察結果をもとに、漆器の塗装技法について以下に整理する。

下地の種類

(a) 植漆と木炭粉を混和(135-136-168-172)

鏡下では細かい木炭粉が観察され、木炭粉に褐色の接着剤が絡みつくが空隙が目立つ。

(b) 漆と砥の粉を混和(44)

鏡下では下地に非常に細密な土が観察されるところから、地の粉類でなく、砥の粉と考えるのが妥当と思われる。

漆層

漆層には透明漆と、漆に油煙を混和した黒漆、漆にベンガラないしは朱を混和した赤色漆が観察された。

(a) 透明漆

全ての漆器に観察された。

(b) 黒漆(168外面、44内外面)

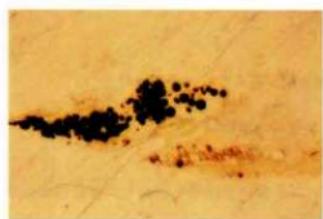
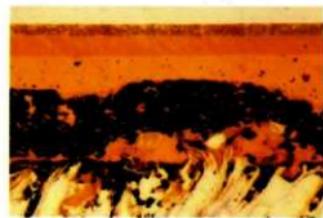
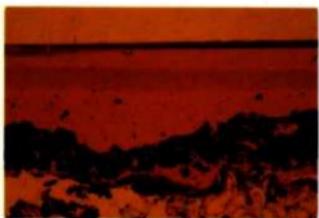
高倍率下で微細な粒子が密に観察できた。その様子は実験的に漆に油煙を配合した漆膜の顕微鏡観察結果と酷似する。このことから観察した微粒子を油煙類と判断した。

(c) 赤色漆

漆とベンガラを混和したものと、漆と朱を混和したものがある。鏡下ではベンガラは色の微粒子がやや褐色を帯びているが、朱は粒子が赤色で透明感がある。ただし、非常に細かな粒子については鏡下ではベンガラと朱の区別はつきにくい。表中のベンガラと朱の判別結果は厳密に欠け、正確には他の方法による機器分析が必要である。

| | | 器種 | 造構 | 時代 | 下地層 | | 漆層 | | 層厚(μm) |
|-------|------|-------|-------|------------|-----------------|----------------|-----------------------------|--------------------------|---------|
| | | | | | 内容 | 層厚(μm) | 内容 | 層厚(μm) | |
| 135 a | ×100 | 漆器 梵 | 4号溝 | 16世紀?~18世紀 | 木炭粉+植漆 | 40~100 | 透明漆 | 15~20 | 65~115 |
| | ×100 | | | | 木炭粉+植漆 | 65~110 | 透明漆 ベンガラ+漆 | 10~15 8~19 | 90~140 |
| 136 a | ×50 | 漆器 梵 | 4号溝 | 16世紀?~18世紀 | 木炭粉+植漆 | 40~96 | | | |
| | ×100 | | | | 木炭粉+植漆 | 48~73 | 透明漆 朱+漆 | 8~13 0~10 | 75~88 |
| 168 a | ×50 | 漆器 小箱 | 埋立地 | 16~17世紀初頭 | 木炭粉+植漆 | 60 | ベンガラ+漆 | 58~70 | 110~120 |
| | ×100 | | | | 木炭粉+植漆 油煙+漆 | 70~110 4 | 透明漆 | 30~38 | 110~140 |
| 44 a | ×20 | 箱物 | 19号土塙 | 18世紀初頭 | との粉+漆 | 500< | 掃墨+漆 透明漆 | 10~25 40~80 | 30~100 |
| | ×100 | | | | との粉+漆 | ? | 掃墨+漆 ベンガラ+漆 | 10 45~60 | 55~70 |
| 172 a | ×100 | 漆器 梵 | 埋立地 | 16~17世紀初頭 | 木炭粉+植漆 木炭粉+漆 | 5 70~80 | 透明漆 透明漆 ベンガラ+漆 | 23~48 20 10 | 140 |
| | ×100 | | | | 木炭粉+植漆 木炭粉+漆 | 10~20 45~80 | 透明漆 透明漆 透明漆 ベンガラ+漆 | 10~40 25 20 0~4 | 125~160 |

漆製品の一覧と漆膜構造の分析結果

135a $\times 100$ 漆器桙 4号溝135b $\times 100$ 漆器桙 4号溝136a $\times 50$ 漆器桙 4号溝136b $\times 100$ 漆器桙 4号溝168a $\times 50$ 漆器小桙 埋立地168b $\times 100$ 漆器小桙 埋立地44a $\times 20$ 箔 物 19号土壤44b $\times 100$ 箔 物 19号土壤172a $\times 100$ 漆器桙 埋立地172b $\times 100$ 漆器桙 埋立地

漆膜の顕微鏡写真

はか た
博 多 68

—下川端東地区市街地再開発事業に伴う博多遺跡群第96次調査の概要—

福岡市埋蔵文化財発掘調査報告書第605集

1999年3月11日

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1-8-1

印刷 有限会社アイオ一企画印刷

はか 博 多 68

—下川端東地区市街地再開発事業に伴う博多遺跡群第96次調査の概要—

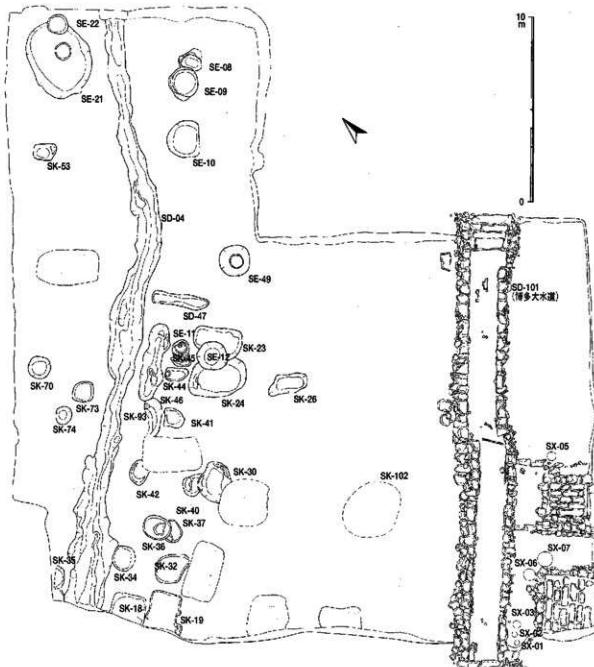
P.53



97. 第3期の遺構配置図 (1/200)

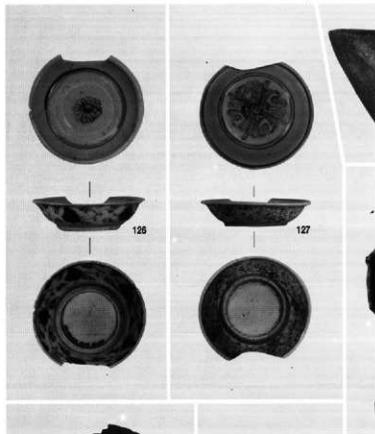
P.12

福岡市埋蔵文化財発掘調査報告書第605集

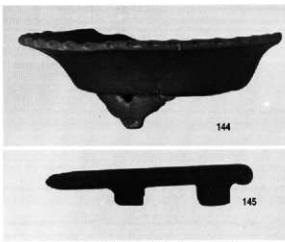


7. 第1期の遺構配置図 (1/200)

P.42



73.4号溝出土遺物 (1/3・1/4)
P.45



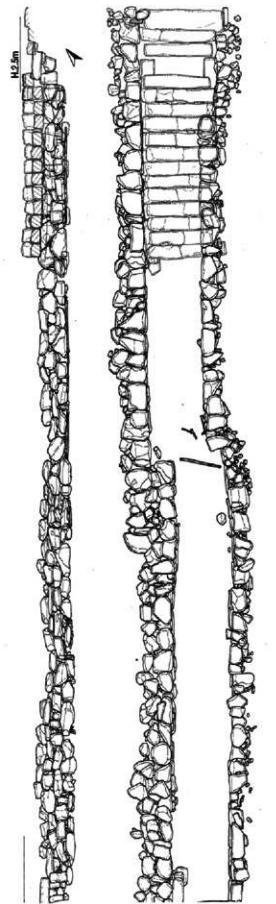
83.101号溝出土遺物 (1/3・1/4)

P.56



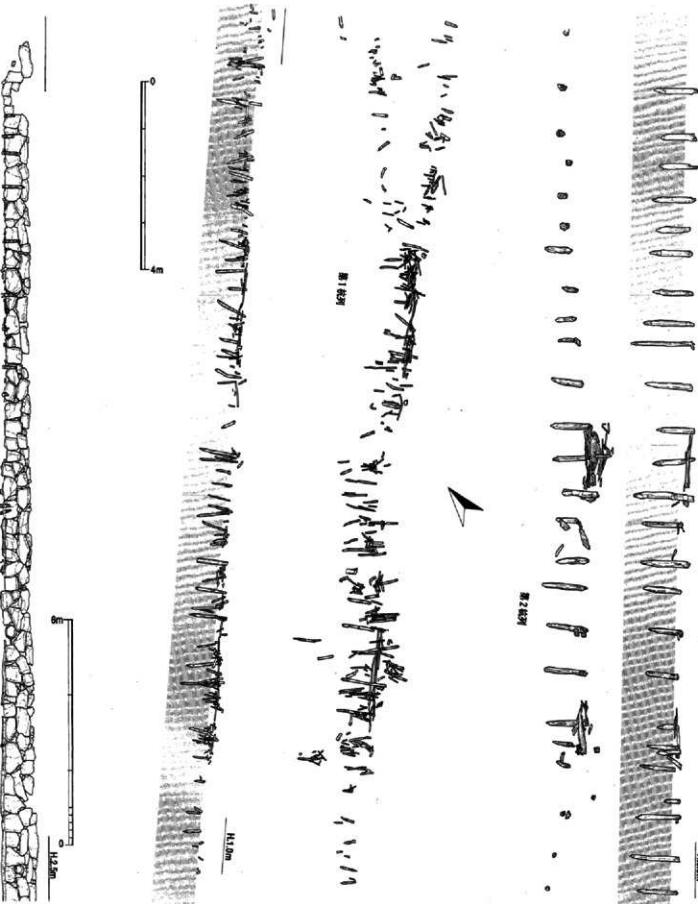
104.14号土壤全景 (西より)

P.43

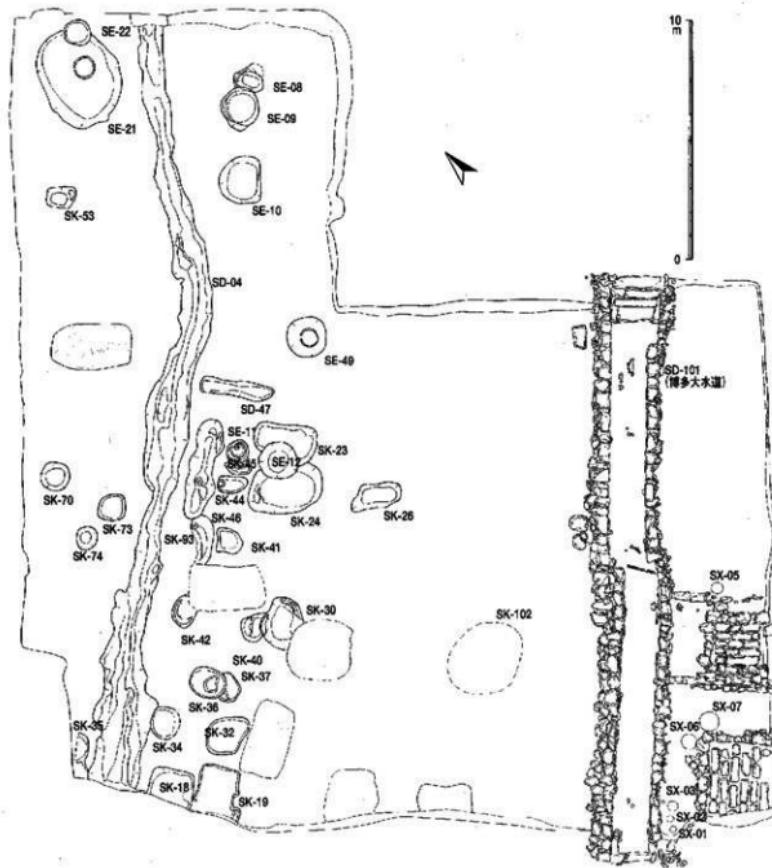


74.101号溝実測図 (1/100)

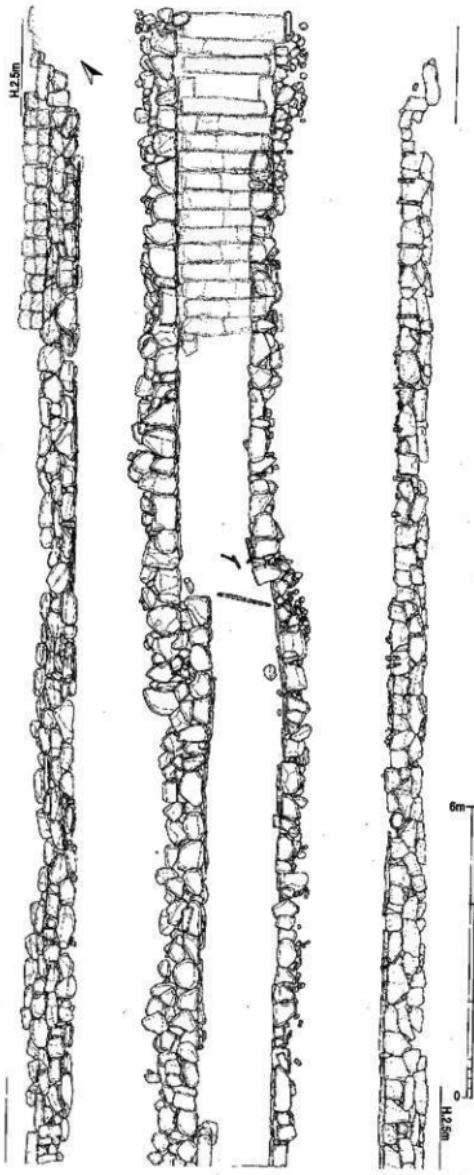
P.48



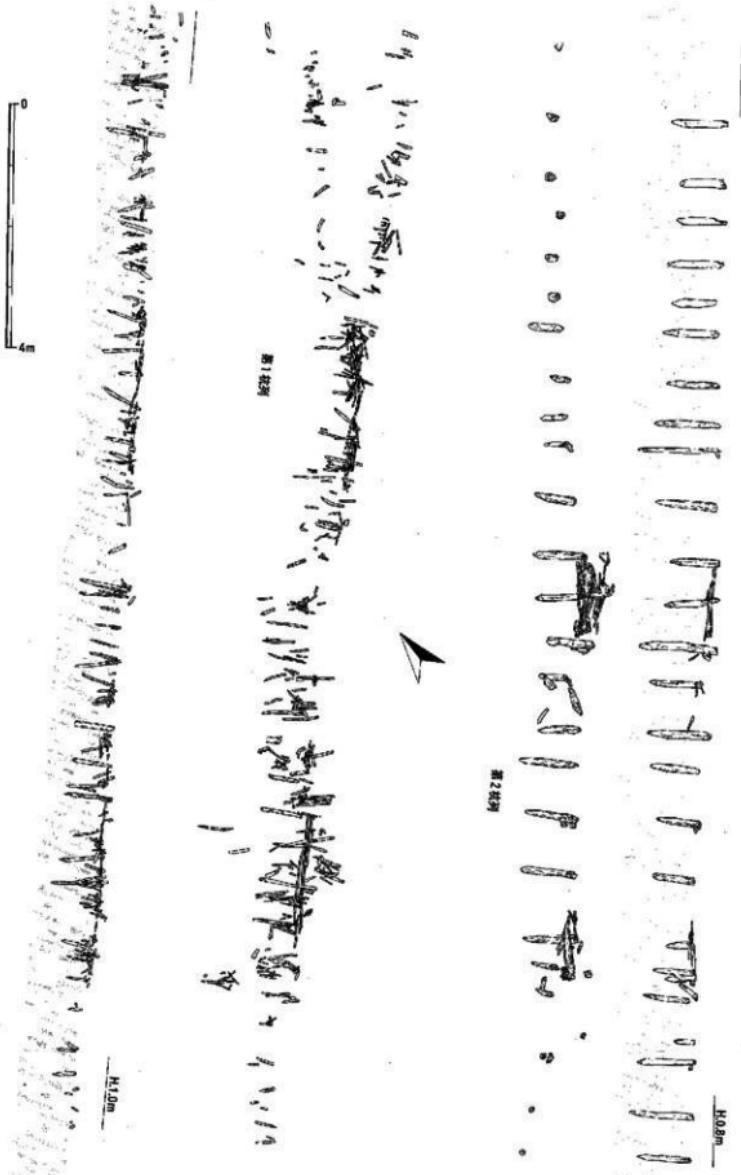
88.埋立地杭列実測図 (1/80)

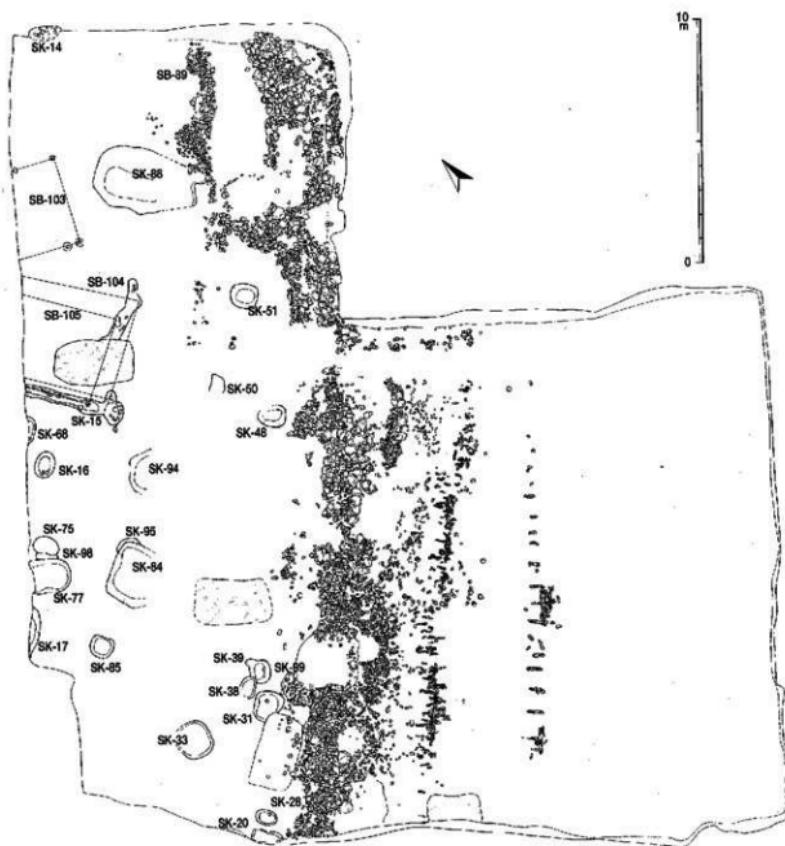


7. 第1期の造構配置図 (1/200)



74. 101号 漢墓平面圖 (1/100)





97. 第3期の造構配置図 (1/200)